に、おかめの面のやうな娘に、下髪の女兒に、肥つた後家さんに、子供のある細君に、これではいくら人が多くつても、歌留多會として盛會とは言はれない。勤も勇造も今更に二十騎町時代を戀しく思つた。

時代も絶えず遷つて居た。歌留多の取りやうもいつとなく變つた。勇造や勤の頃には、下の句のみを取るのが普通で、引手繰る取組む引搔く、洋燈を引繰返す、それは騷ぎなものであつたが、此頃では上の句を讀んで下の句を取るので、すべてが上品に綺麗にハイカラになつて、臭い手を幽靈のやうに歌牌の上に出したり、他人の取つたのを傍から奪つたりするやうなことは全くなくなつた。

大學生の中には歌留多の競技會なども行はれ、好奇な新聞社では、正月の懸賞に歌留多の優勝者を募つて技を競はせたりした、女子教育の勃興、女子大學の設立、今まで深窓にのみ閉籠められた女子は、籠から放たれた鳥のやうに、自由に快活に新しい世に出た。海老茶の袴を着けて、紫メリンスの風呂敷をかゝへて、庇髪にリボンといふ効々しい扮裝は老いた人々の眼を驚かした。勇造すら東京に出て來て、

『實に女のハイカラになつたのには驚いたねえ。丸で變つちやつた。桃割だの銀杏返だのは見たくつても見られなくなつたぢやないか。』と勤に言つた。勤はまた勤で、朝夕の社へ往還りに、學校通ひの姿を見て、常に暗々の裡に逸早く過ぎ行く風潮の急なのを思つた。壓抑せられた時代から見ると、町にも巷にも野にも山にも、女子の生々した色彩が著しく目に立つ。勤はこの秋目白の女子大學の運動會を見に行つた時にも、身輕な自由な運動と競技とに對して、後れて古びて行くものは、唯自分ばかりのやう

な氣がした。溫良貞淑を唯一の生命として其以外の才能も何等の自由も持つて居ない時代の女の不幸をも繰返した。かれは籠から放たれた女の自由を眼を聳てゝ見たのである。

神樂坂の雜誌屋の店には、女子の讀物、女子の雜誌が山のやうに積まれた。

思潮界には宗教と文學、殊に奔放な個人主義がそろ〳〵その萠芽を出して、名高い批評家は、獨逸のニイチエの學說を主張した。美的生活といふ語も種々の意味に用ひられて世の人の口に上つた。

新派――舊派などゝいふ言葉が無意味に若い娘の口から出る。

其夜の歌留多會は唯喧しかつた。政次もおきよも政次の妹も來た。肥つたお三輪の姪も來た。中にハイカラの女學生が一人居たが、殺風景な歌留多會に手を出し兼ねて、面白くないやうな手持無沙汰のやうな顏をして居た。昔の連中は下の句ばかりで遣らうと主張する。それでは歌留多を取つたやうな氣がしないと若い娘連はいふ。混雜の中に時は經つて、五目鮨が出る、酒が出る、福引が出る。髮の白いお爺さんが高箒に當つて恐縮すると、げた〳〵と常に厭に笑ふ癖のある中年の腰辨には擂鉢が當つた。丸髷の型を得た政次はヤンヤと喝采された。

十時過には人々が歸り出して、やがて間もなく解散した。踏留つて徹夜をしやうなどゝいふものはなかつた。

『歌留多會ももう駄目だ。遣つてる中に若い細君の子供が目を覺まして、やめて飛んで行くやうにな

つちやもうおしまひだ。』と勇造は言つて、つまらなさうな大きなあくびをした。

二十二

一月、二月、三月――

西風に裏の雨戸の明けられぬ日もあつた。薄雪が向うの丘を白くして、空が水彩畫のやうに鮮やかに碧に晴れた朝もあつた。路の角の南を受けた老梅樹の早咲の花が、夕空に星のやうに寂しげに見える夕もあつた。霜解の路は新開地だけに日增に悪く、下駄を取られぬやうにと拾つて歩く近所の女、草鞋ばきで矢立を腰に挿した酒屋の御用聞、米屋は車の輪を深い泥に埋めながら、粉で白くなつた米袋を載せて通つた。家々の門から入口までは薦やら莚やら炭俵の明いたのやらが敷かれた。

風の日には凧のうなりが日の暮れるまで空に聞える。達磨に市松に武者繪、中には隨分大きなのもあると見えて、その鳴る音が唸るやうに吼えるやうにあたりに響く。近所の七八歳の男の兒が二三人、一錢凧にヒラ〳〵した紙の尾をつけて、垣の蔭の日向に小さくなつてかたまつて遊んで居ると、其頭の上の梅の枝に、大きな奴凧の半ば破れたのが、糸を一間ほど引いて引懸つて居て、風にブー〳〵鳴る。

小高い處に長い縁側を廻した家が其處から見える。東南を受けて居るので、いかにも暖かさうだ。七十位になる品の好いお婆さんが、白い手拭を襟に卷いて、後向になつて裁縫をして居ると、障子が一枚

開いて、五歳位の可愛い女の兒がちよこちよこ歩いて、其傍に行く。やがて甘えるやうに膝に凭懸る。お婆さんと孫との體が一緒になつて久しく離れない。時には年の頃十七位の色の白い姿の好い娘が、黄縞の八丈の羽織を着て、目白臺の眺めの好いのを立つて見て居る。いつも桃割に結つて、何方かと言へば舊派な娘だが、近所でも評判な子で、下宿屋の書生が大騒ぎをして居る。縁側には梅の盛りを過ぎた大きな鉢が置いてあつて、障子の日影に映る。

毎日朝の十時頃、田舍から出たばかりの十五六の小婢が、黄縞のねんねこで兒を負つて、霜解路を拾つて、低い田に添つた路を歩いて行く。淡竹の藪の向うに小學校の正門のある通りがあつて、新に開いた雜貨店、學校用具を賣る庇の低い家屋、下宿屋、其の隣の小高い處にペンキ塗の洋館、これは此の附近がまだ田畝で竹藪で、夜は狐狸が啼いたり雁鴨が下りたりする時分から永住した醫師の家で、其の快活な調子と金縁の眼鏡を懸けた半老の姿は、誰も皆なよく見知つて居る。門から玄關の砂利に暖かい日影が射して、石の階段に繻珍の鼻緒や泥に塗れた山桐の駒下駄などが並べてある。小婢がいつものやうに入つて行くと、藥局生が硝子窓の中からちよつと此方を見た。廣い待合所には、安段通の毛のすり切れたのが敷いてあつて、大きな丸い眞鍮の火鉢の周圍に患者が三四人退屈さうに坐つて居た。小婢は先づ其處に出してある番號札を取る。

一時間ほど經つて、其番號が呼ばれる。扉を明けると、中は暖爐の暖かさで、醫師の顔も代診の顔も

赤い。小婢が兒を抱いて結附帶を丸めて其處に立つと、醫師は手で前の椅子にと指さす。やがて小さい足を卷いた繃帶を取つて見ると、踵の所が赤く爛れて居た。醫師はちよつと見て、膏藥を塗つて、新しい繃帶で卷いて、『何うも寒いから治りが遲い。』

勤の家に田舍から小婢が來た翌日、咲子は若い母親に抱かれて、行火でこの火傷をした。

三日に一度はお光が醫師に伴れて行く。そして歸りには屹度下の家かお孝の家に寄つて、正午近くまで話をする。お光とお孝は若い同士だけに話が合ふ。

お孝の家の庭には、野梅が一本、粗末な手水鉢に竹製の柄杓、猫が日向に丸くなつて居る。お光はすべて生物が嫌ひ、行く度に其猫が氣になる。殊に、一度爪を立てゝ引搔かれてから、其傍には決して腰を掛けなかつた。

『何うしてお孝さんは生物が好きなんでせう。』などといふ。お孝はわざと抱いたり懷に入れたり頰摺をしたりして見せた。

新世帶――ことに一時なので、簞笥も長持もなかつた。机に赤い毛布を懸けて、偕行社記事が二三册と野外要務令とが載つて居て、暖い日影が緣側から座敷に射した。お孝は常に絹物を着て居るので、銘仙の派手な縞が目に立つ。

指環をはめた手も華奢で細く白い。

入口の格子の中には、下駄箱の蓋が除れたのに、女下駄と男下駄とが並べて入れられてあつて、其上に長靴と短靴が置いてある。日曜日ごとに秋田あたりの田舍訛の除れない單純な顏をした從卒が遣つて來て、せつせと長靴を磨く。時には使に遣られたり水を汲ませられたりする。三疊の間には外套、軍服、劍などが置かれた。

お孝が軍服を疊んで居ると、『本當に下手だなァ。服ばかりは手入れが惡いと、なつて居ないからなァ。かう疊むんだ。かう――。』と勇造が引奪つて自分で疊んで見せる。そして暇があると、新しく拵へた軍帽を出して、刷毛で丁寧に埃を拂つたり、劍を拔いて磨粉を丸く包んだ布でトン〳〵叩いたりする。

さうかと思ふと、緣側の暖かい日向で、ドシドシと鯱鋒立をして手で歩く。それをお孝はまた始つたと言つたやうな顏をして笑つて見て居る。勤と並んではよく脊競をした。勤は鴨居に殆ど髪が着くが、勇造のは五分位あく。『兄さんは髪を長くしてるからだ！』と言つて、『口惜しいナ、己は兄さんより高い筈だがなァ。』

今一度と遣り直して、こつそり足を爪立てる。

『ずるい、ずるい。』

と勤が見附けると、『何うしても駄目かなァ。』と投げて、『それぢやこれで來い』と鐵のやうな筋肉の張つた腕を出す。腕角力の强いのが自慢である。

同期生がよく來た。中村のお安くない噂を見て遣れなどと遣つて來る。『宅のお客は暴くつて爲方がないんですよ。』とお孝が常にお光にこぼした。其癖內心では客の元氣の好いのを誇つて居る。

幼年學校の生徒などが來ると、大抵居留守を遣ふ。『彼奴等に菓子を食はれては、途が潰れて了ふからナア、兄さん。それや三人も來りや、五十錢位ぺろりッと平らげて了ふんだからな。』

勇造はまたお光を捉へてよくからかふ。足に小さい瘤があるのを、お光は成たけ隱すやうにして居ると、それを見附けて、わざと、『嫂さん、何だよそれは、ちよつとお見せなよ。』などゝいふ。またお光が娘時代に店に出て居たのを知つて居て、『僕も嫂さんの家に吸取紙を買ひに行つたことがあるぜ。嫂さんの手から釣錢を取つたこともあるんだぜ、これでも……。山本が二階に居たねえ、彼奴、氣障で厭な奴さ。男の癖に香水などをふつて居やがる。僕は大嫌ひさ。けど、男振は好かつたねえ。嫂さん。』などと厭がらせる。お光はくやしがつて、その仕返しに、お孝の言葉にちよいちよい田舍訛の出るのを捉へて、その眞似をする。

『嫂さん、旨いもの御馳走しようか、』と言ふから、何かと思へば、麩糊を煮て居る。『咲ちやんの足は何時まで治らないんだ、嫂さん、あんな醫師に掛けて放つて置いては駄目だぜ。』などと世話を燒く。お光はよく突込まれる。笑ひながら調戲半分に遣られるので、一層小腹が立つ。此方でも何かの竹篦返しをして遣らうとは思ふが、才氣のない無邪氣なお光にはそれが出來なかつた。時偶旨いことを言つた

つもりでも、すぐ其上手に出て見事に崩されて了ふ。さうかと謂つて正面から顏を赤くして怒つて見る場合もない。また餘りお孝の田舍訛を種にしても角が立つ。

お光はその時はきまつて、

『此間は殿樣のお萩餅を澤山御馳走樣！』とやる。

『何でい、兄さんだツて、始めの中は釜の底に穴を明けたぢやないか。』

と言ひ返すが、でもそれを持出されると勇造も流石にしよげる。

此間の日曜に、お萩餅の御馳走をするから皆樣にお出でなさいとのおつかひであつた。勇造が自から竈の前に立つて飯を焚く。小豆を袋で漉して餡を拵へる。お孝が手傳はうとすると、『お前見たいなお孃樣に何が出來るものか、殿樣の遣るのを見てゝ覺えろ！』などゝ頗る鼻息が荒かつたが、お光が咲子を負つて、勝手に行つた時には、臺所はもう大失敗の大まごつき、『貴樣、默つて笑つて見てる奴がある か。』と勇造がお孝を叱り飛ばして居る。お孝は、『だッて可笑いんですもの！』と笑つて立つて見て居る。聞くと飯は眞黑焦げ！　それに慌てゝ折角煮た餡の鍋を板の間にひつくり返して了つたので、折角の御馳走も滅茶々々。

遣つて來たお三輪がキャッ〳〵と笑ふ。

『そんなに笑つたッて駄目だよ。嫂さん。人には過ちと言ふことがある。御馳走しようと思つたり笑

はれたりしては、遣り切れんなァ。』と怒る。其怒るのがまた可笑しいとて、お三輪もお孝もお光も腹を抱へて笑つた。總領の兄は、『大變旨く出來たつてな、お萩餅は！』

『殿樣、大失敗を遣つちやつた。』

と勇造は生え懸つた下顎を撫でる。

其時から、『殿樣のお萩餅』といふ新熟語が女連の口に上つた。

お光は何ぞといふとそれを持出した。と、勇造は皮肉を言つて置いて、『嫂さん、そら殿樣のお萩餅が口から出懸つて居るぜ。もう殿樣も古いぜ！』など、先を越していふ。

細君連が寄集ると、夫の話が出る。お三輪はお孝を好運者だといふ。『好い旦那さんをひつかけて、本當に旨いことをしたがね。』といつもいふ。お孝にはそれが快く耳に響くが、お光には餘り嬉しくなかつた。『なんだ軍人なんか、中尉なんか。』といふ腹がある。それに、其身が軍人に嫁きそくなつたといふいくらか羨ましい氣もある。お三輪が勤を評する時には、社會上の地位や、器量などは言はずに、堅くつて好いとか、しつかりしてゐてしまりやで好いとか言つて賞める。そして自分の夫の意氣地なしで、何時もピー〳〵で、無い癖に派手家で、いらぬ交際や義理をするから爲方がないと言つて、『でもまァ世の中が廣いから。』といつか巧に自分の夫を賞めて居る。夫がやさしいといふのがお三輪には自慢である。

『表向きはあゝして誰にもやさしいけど、それは怒ると怖いんだよ。』

『義兄さんが怖いなんて、そんなことはありやしない。』

お光もお孝もかう言ふと、

『さうでないんだからねえ、あれで……。何も彼もすつかり呑込んで居で、そして默つて耐へて居るんだから、怖いがね。』

長兄は漢學者で、歷史に通じて居て、藏書家である。古い書箱に、お三輪などが見てはこんなものが何うなるかと思ふやうな古い書が一杯に詰められてある。そして時々蠹の食つた綴の切れた書を買つて來て、さも珍らしいものを搜し當てたといふ顏をして喜んで居る。二人の弟に對しては、無論慈愛の深い兄で、義妹達にもいつも笑顏を見せてやさしい言葉をかけた。誰かが批評して言つた——中村の總領の兄は弱い男だ。弱いから從つて同情がある。男よりも女に持てる。嘘と思ふなら見ろ、その周圍には、屹度同情を買はんが爲めに泣附く男か、さうでなければ女が集つて來る——。

この批評は確かに一面を見て居た。憂ふるもの、苦しめるもの、病めるもの、蒼い顏をしたものが常に長兄の周圍に集つた。貧しい割合に家の賑やかなのはこの爲である、お三輪は、『本當に、内ぢや爲方がありやしない、世話をしないでも好い人まで世話をしてやるんだから。』と常に言ふ。けれど其の同情の深いのに感心もして居る。

主人は熱心に古文書を調べる。面白い歴史上の隱れた事實を弟共にして聞かせる。昔の豪傑の殘した逸話を持出して、『己は今の戰術は知らんがな、勇造、昔の戰爭だつて今の戰爭だつて戰略には變りはない。關ヶ原の狹隘に引附けた石田の軍略も、あれで中々馬鹿に出來んよ。あれは家康が稀世の英雄で機を見るに早い大將だつたから、西軍が敗北したが、小早川が裏切をしなけりや何うなつたか解りやせんよ、』などゝ話すと、勇造は此兄から少年時代に八家文の無點を敎つた尊敬の念で熱心に聞惚れて、『うむ、さうだ。今の戰術にも敵を隘路に誘ひて擊破するといふことがある。狹隘戰と謂つて、中々大切な戰術だ！』と態々戰術敎科書を出して、讀んで聞かせる。

長兄はまた勤に向つては、何とかいふ人の關ヶ原の覺書といふ寫本を見せて、浮田秀家が戰場から遁れる時、一人の忠僕が苦心して大阪まで伴をしたといふ話をして、『これを一つ脚本に仕組むと面白い立派なものが、出來るが、勤、何うだ、一つ奮發して書いて見んか、』と勸める。けれど勤にはそんなものは一顧の値だになかつた。勤は長兄の話を唯點頭いて聞いた。

この兄が短い白縞の袴を穿いて、太いステッキをついて、腕を扼して寫した當年の寫眞が今も黃く薄くなつて寫眞箱の中に交つて居るが、それを見ると、勤は自分等の田舍から出て來た時分のことを考へずには居られなかつた。東京の名所をこの兄にせびつて伴れて行つて貰つたものだ。日比谷の原には中央に大きい樹が一本立つて、兵士がいつも演習をやつて居た。今の凱旋道路の處には其時分の樞府とも

謂ふべき元老院があつて、二頭馬車が門から勢よく砂利を飛ばして出て來た。あれが三條公だなどと長兄が敎へて呉れた。京橋日本橋の大通りには、漸く馬車鐵道が出來たばかりで、珍らしがつて乘る人が多かつた。丸の内には昔の大名屋敷がまだ殘つてゐて、乳のやうな鏡のついた大きな門や、ナマコ漆喰で塗つた處々に窓のある長い高い塀などがあつた。日蔭町の細い通り、門並にある古本屋を一軒々々ひやかして歩いたこともあつた。上野淺草にも日曜日といふと出懸けた。池の端の角に牛肉屋があつたが、其處で長兄は弟共に午飯の御馳走をした。其時分のことを考へると、勤はいろ〳〵なことを思出す。あの活氣のあつた長兄がかうした人間になつたことも不思議であるし、自分等兄弟三人が各自に一家を成して、毎日往來して居るのも意味がある。二十年に近い月日が昨日のやうにも思はれ、また遠い遠い昔のやうにも思はれる。

彼方此方と引越し廻つた家屋が庭の木やら、大家の顏やら、其折々に起つた事件やらと一緒に細かに織込まれて、繪のやうになつて眼前を通る。先の嫂はやさしいかよわい女だつた。勤とは交情(なか)が好かつた。細い眼を怖々ながら明けて見るといふ風で、低く囁くやうな話し方をした。其先妻の死んだ時、兄は聲を放つて慟哭した。其時から長兄の性格は著しく變つたやうに勤には思はれる。物に頓着しない、實際のことはなるやうにしかならぬといふやうな捨身なところは、其時から出來たやうに勤には思はれる。

『そんなことを言つたつて駄目だよ。血氣に逸つたつて爲方がない。』長兄は常にかう言つて笑つた。

また、時には、

『お前はさうするが好いさ。己にはそんなことはつまらない。』

弟が何かに激昂することなどあると、

『そんなに短氣では、世の中は渡つて行かれないよ。世の中つていふものは、さうしたものぢやない。』

此頃、勤の胸にもある感じが萠して來た。長兄の經て來た徑路と同じところがあるやうに思はれた。

『今少し眞面目にならんければいかん。』とわれとわれを戒めて見ても不思議にも何等の反響も起らぬ。

社の仕事も變つた。今までは少年相手の至極單調な平凡な雜誌を遣つて居たが、此二月から、新に出來た週刊の雜誌を編輯することになつて、社會と密接に觸れて來た。いくら臆病でも、神經質でも、仙人でも、默つて顏を赧くして机に取附いて居る譯には行かなかつた。

二十三

男連が出勤した後は、女連の自由の世界であつた。笑ひ聲が彼方此方に聞えた。お三輪の家の勝手元には、朝飯の跡仕舞が午後まで其儘になつて居ることもある。かき餅を燒いたとか、使に出た歸りに餅菓子を買つて來たとか、退屈だからお汁粉を拵へたとか、何とか彼とか言つて、寄集つては、茶を飲み無駄話をした。

石渡の少佐夫人と、太田の後家さんと、田舍から來た若い細君と其他後家さんが猶二三人も居た。後家さん達は常に男の話をして笑つた。『もう私達は此世を　ましたんですから、何んなことをしても好いんです！』と言つて無遠慮な打明話をした。男は一體に情に脆いといふこと、意氣地がないといふこと、月經前後は頭が懊惱して爲方がないといふこと、もう亭主などは二度と持つ氣にはなれないといふこと、亭主といふものは氣むづかしやで、我儘で、始末にいけないものだといふこと、それから懷姙する時の話なども出た。

『懷姙すると思ふと、よく〳〵男が厭になるけれど……そこには又男が可愛い處もあつてねえ。』

と誰かが言ふと、

『私は又、亭主に死なれた時、ホツとしましたよ。そりや悲しいことは悲しかつたけれどもねえ、これでまア子供を產まなくつても好いと思ふと、身が輕くなつたやうでしたよ。』

これは……五人まで生んだといふ後家さんの言葉である。他の一人は、

『本當に今になつて見ると、よくあんなに子供の世話が出來たと思ふ位ですよ。襁褓がいらないやうになつたと思ふと、もうすぐ後に出來てるんですもの……。本當に體の安まる暇はないんですものねえ。』と笑つて、『お三輪さんのやうに子が出來ない人は仕合せよ。』

『それやねえ、奧さん、其處はちやんと出來ないやうにして置くんだがね。』と例の調子をお三輪が出

すと、傍に居た若い細君が不思議なことをといふ顔をして、

『奥さん、何うして子供を拵へない法があるんですの？』

『それはあるともね、けども中々容易には傳授が出來ないがね……。』と笑つて居る。

『うそでせう？　そんなこと。』

『うそなことがあるものかね、若い人はたしなみが悪いから、子供ばかり產んで爲方がないんぢやがね、ねぇ奥さん。』

と少佐夫人を顧みる。

少佐夫人も笑つて、『子供ばかり拵へて居ては、本當に爲方が無いわねぇ。女だつて少しは樂をしなくつちや、男にいぢめられてばかり居るのが女の能ぢやないものねぇ。』

『本當ともねぇ。』

『奥さん、私、聞かせて下さいな。』

『何を？』

『子供の出來ない法を……。』

『大變だねぇ、まァ。この人は……』と笑つて、『そんなことを無闇に傳授すると、旦那樣に怒られるがね。』

『怒られても好いのよ。』

『教へないでも段々今に覺えて來ますよ。』

と少佐夫人も笑つた。

『これで子供さへ出來ないものなら、好いでせうね。』

『本當ねぇ。』

と皆笑つた。

『でもね、子供があるんで持つて居るんですよ。子供が出來ないとなつたら、そりや隨分でせうね。』

『それこそ闇ですよ。』

『それこそさぞ勝手に男を拵へることでせうねぇ。』

『さうなれや面白いけれどねぇ。』

などと話合つた。傍で聞いて喫驚するやうな話も出た。男の知らない女の祕密が幅で打明けられた。

『本當に旦那さんの居らつしやる方は、お氣の毒のやうですよ。』

などと後家組が言ふとお三輪は負けぬ氣になつて、

『そんなことを言つたら、うんと交情の好い處を見せつけて遣るから。』

『見せつけられたッて、何とも思ひやしないから大丈夫！』

『一人で淋しいッて、此間も言つてたぢやないかね。』

『でも、ひとりで居る方が、いくら好いか。本當にのうくしると思ふことがありますよ。餘所へ行つて奥さんが御亭主にぶつぶつ言はれて居るのなどを見ると、それやかうしてひとりでゐるのが何んなに難有いと思ふか知れやしない……。』

『奥さん少し惚氣でも言つて聞かせてお上げなさいよ。』

とお三輪は少佐夫人に言ふ。

少佐夫人は何處となく重々しく品格をつくつては居るが、拍子に乘ると、隱すところなく、ドシドシ饒舌る。ある日、お光がお孝の家に行つて見ると、少佐夫人は勇造の外套を引張り出して、白い顏に鬚を書いて、束髪の上に軍帽を冠つて、面白い手附で踊つて居る。

笑聲が崩るゝばかりにした。

『よう、よう、似合つた！』

と手を拍くものもある。

平生澄まして居るだけに、際立つて可笑しく見えた。

後で、お孝がお光に、

『面白い奥樣ねえ。』と言ふと、

『本當に何うしたんでせう、まア。』

『ちよつと見ると、何うかしてるとしか思はれない位ですよ。突如壁に懸つてあつた外套を取つて、あんなことを始めるんですもの。』

『何うかしてるのよ。あの奥さんは。』

『可笑しいのねえ。』

『何か心配でもあるんぢやないの。』

『そんなことは無いでせう。』

『嫂さんも隨分ですねえ。』

『それは隨分、聞いて居られないやうなことをいふのね。』

『私、此間も呆れて了つた。兄さんのことをあんなに惡く謂はなくつても好さゝうなものだのに……。』

『何うかしてるんですよ。』

若い女の群に中年の女の心は解らなかつた。

三月の節句には、下の家の座敷に古い雛が飾られた。これは、前の細君の持つて來たものである。女の子も無いのに、こんなもの面倒臭いと、毎年お三輪が邪魔にするが、主人はいつも手づから丁寧に壇を拵へて飾つた。菱餅に白酒、紅梅が桃の代りに花瓶に挿されて、高島田に結つた先妻の娘姿の寫眞が

雛壇の上に置かれた。

二十四

四月の麗かな日に、山手から濠端に通ふ同じ路を、新らしい一箇の乳母車が押されて通つた。

黄格子の唐棧の綿入に、樺色がゝつた繻子の帶を緊めた肥つた小婢の姿は、柴垣、要垣、枳殼垣、板塀、冠木門などのある小路から賑かな町の通りに際立つて鮮かに見られた。

車には唉子が色の褪めた肩掛に包まれたまゝ寢かされてある。この大きな幅廣の肩掛は、お光が娘の時分に流行つて、色合が好いなどゝ友達から賞められたものであつた。兒の傍には、ミルクの罐と罐とが置かれて、小さい口の動く度に、罐の中のミルクがのどかな春の日に微かに光る。

襁褓を包んだ風呂敷包もその傍に載せてあつた。

小刻に運ぶ足に連れて、乳母車はガラガラと動いて行く。

小婢の心は、押して居る車よりも、あたりに見える賑かな町の家並よりも、路傍に咲く木蓮、八重櫻の美しい花よりも、遠く田舍の藁葺の小屋にあつた。藁葺の小屋には昨年産れた妹に乳を含ませて、母親が笑つて居た。姉が路に近い戸を明けて、青縞を織つて居る音がチャンカラチャンカラ聞える。家の前に草の蔽つた汚い溝があつて、人が通ると、蛙が音を立てゝ飛込んだ。町の漬物屋で杏の漬けたのを

賣つて居るのを母親にせびつて、一錢貰つて、自分が買つて食つて居る——ふと前にめづらしいものがあつたので、思はず立留つた。垣の傍にしんこ細工をする爺さんが荷を卸して居て、子供が五六人其周圍を取卷いて居るのが眼に入つた。猫、犬、鷄其他いろいろなものが出來て居る。

今、鼠を拵へて居る處で、見て居る中に頭が出來て、胴が出來て、尾がずうと長く引出された。色しんこを彼方此方こね廻して居ると思ふと、今度は何うしても本當の物としか思はれないやうな鷄卵（たまご）が出來が。

小婢は久しく立つて見て居た。

車の中の兒は、眼をあけて、まじ〳〵とあたりを見廻した。晴れた大空が其の小さな明かな瞳に映つた。花の影やら木の影やらが微かに顏、衣、車の上に動く。兒は時々思ひ出すやうにスバスバと乳を吸つた。

山手の春の路は繪のやうであつた。小路の到る處に花が明かに咲いて、鶯の聲が竹藪の中から聞えた。

二十五

お光とお榮とが話をした。

『別れた方がのんきだらう、姉さん。』

『それやのんきだともねえ、お前。こんな狹い——六疊と四疊半の家だけども、自分の家だと思ふと、

氣がのう〳〵するよ。店があると、何うしたつて夜も勝手に寢られやしないし、二階で仕事をしてりや、お榮は自分の仕事ばかりして居て、役に立たんて母さんに言はれるし……それに、秀（女の兒の名）の爲めにも、あゝいふ見世屋に居ては、行末の爲めにもよくないからね。』

『さうね。』

『此間もね、秀がお婆さんの處に居るのが厭だ、厭だつて言ふから、何うしたのかと思ふと、學校でね、お前、ダイヤモンドつて言ふ綽名が附いてるんだとさ。』

『何うして？』

『店に、ダイヤモンド齒磨のビラが出て居るだらう。』

『まァ厭だ！』

とお光は笑つた。

『さういふ風だからね、お前。あの兒の爲めにも早く引越したいと思つて居たんだけれど、お嫁さんが馴れないし、見て貰つたら先月までは動いては惡い事があるッて言ふから爲方なしに居たんだよ、お前。母さんは一軒家を持つと、中々同居してるやうな譯には行かないつて、唯でも置いて貰ふやうに恩に着せるけれど、秀のと二人分食扶持はちやんと出して居るんだからねえ、お前。』

『姉さんも大變だね、これから。』

『本當だよ、お前。うつかりして居られやしないよ。秀でも大きくなつて、好いお婿さんでも來るやうになるまでは、寢る目も寢ないで働かなくつては、それや本當に立つて行きやしないよ。』

お榮の前には、銀杏の裁物板に針箱に鋏に糸卷、賃仕事の一樂織の男物があたりに散らばつて居た。

『それでも秀ちやんは容色が好いから、何んな好い養子でも來るわね。』

『何うしてねえ。お前。今時分財產も碌々ありもしないこんな處に養子の來手があるものかね。隨分大きな家でも、養子ッていふものは難かしいものだ相だから、爲方が無けりや、私は、秀は餘所に出して了はうかとも思ふよ。』

『さうしても好いのねえ。』

『兎に角、あの兒は丈夫で大きくなつて貰はなくつては爲方がない、』と言つて、少し笑ひ懸けて、『その代り、あれが大きくなつて、そんなに望みは無いけども、好いおとなしい養子でも出來れば、それこそお前、どんな御馳走でもするよ。』

伴れて來て次の間に寢かして置いた咲子が目を覺まして泣出したので、お光は立つて抱いて來て乳を含ませた。

『本當に、子供の世話つて言ふものは、なか〳〵大變ね。餘り泣かれると、私、投（はう）つて了ひたくなるのよ。』

『だつて爲方が無いがね、お前誰だつて皆なさうして來るんだもの、私など内に逝かれる時分は、お前も知つてるけど、それは大變だつたよ。秀は未だわからないし、幸はかァちやんかァちやんつて言ふし、生れた子は乳を離れないし……』

『幸ちやんが今迄生きて居ると好かつたねぇ。』

『何方かひとり生きて居りや好かつたと思ふこともあるよ。秀一人ぢや本當にもしものことがあると心配だからねぇ。けどね、考へて見ると死んだ方が好かつたかも知れないよ。三人居ては骨が折れるからね。』と話を後に戻して、『お前なぞ、今のうち苦勞して、たんと子供を育てゝ置く方が好いよ。』

『子供も好いけど……』と言ひ淀むと、姉は、

『お前の内では、皆な子供が嫌ひだね、勤さんもさうだし、お前も餘り好きぢやないねぇ。』

『え、私、嫌ひね、何方かと謂ふと、……』

『本當に不思議だよ。子供つて言ふものは可愛いものだがねぇ……それ笑つて居るよ、』と乳を離した兒をあやして、

『もう母さんが解るね。』

『え、もう私が立つと、後を見送つて居るのよ。』

『可愛いものなのに、何うしたんだらう、お前の家に行つて見ると、本當に二人で大騒ぎをして、持

扱つて居るから可笑しくなるよ。ひとりであんなことをしてゐては、三人にもなつたら、何うするんだらう。』

『本當よ。泣かせると言つては小言を言はれ、喧しいつて言つては怒られ、本當に何うしたら好いか解りやしないよ。それに、此兒がそれや喧しいんだから！』

『さうね、少し癇が強いね。』

『亡くなつた義兄さんなぞは、秀ちやんの小さい時分はよく抱いたり何かしたでせう。内でも——時には抱いたり何かすることもあるけれど、それはほんの氣まぐれで、喧しい、喧しいッ、丸で他人の子のやうなんだもの……』

『さうね、もう少し世間の人のやうに、平氣で、夫婦一緒になつて育てるやうにするといゝねぇ……

……勤さん、書く方で、子供どころぢやないんだらう。』

『さうなのよ……それにね、姉さん、内は情が薄いのかも知れないと思ふよ。勇造さんなど十日に一度位里に遣つた兒が來ると、それはお孝さんと二人で大騒ぎ、引奪りこをして抱いて居るのよ。あんなにして子を育てたら好いだらうと羨しく思ふこともあるよ。』

『それはお前、里に遣つてあつて、時々逢ふ子と、始終家に居る子とは違ふがね……勤さん餘程變つてるからね。』と少し考へて、『でもね、お前、去年あたりから見ると餘程よくなつたよ。此頃は餘程愛

想が好くなつて來たがね。』

調戯はれても冷かされても、お光には矢張勇造の快活なのが好かつた。お孝との間柄にも目に餘るやうな睦しいところがある。咲子が生れても、お光はお光で、勤は勤であつた。

お光は話題を變へて、

『おきよさん、まだ出來たやうな樣子はなくつて？』

『まだそんな話は聞かないがね。』

『もう出來ても好い時分ね。』

『まだお前……』

『店はまだ任せられないつて、今日も母さん言つてゝよ。』

『それはさうともねえ、お前……それに母さん例の遠慮家で、言はなくつてはならないことも遠慮して默つて居るから……あれぢや困るよ、本當に……』

『さうね、何うも氣が附かなくつて困るつて、母さん言つたよ。』

『そら、さういふ風だから困るんだよ。腹ん中でいろんなことを思つて居ても、それは口に出さずに、人にばかり困る困るつて言つてるんだから爲方がないよ。嫁さんだツて、あれぢや遣り憎いし、今のうち、しつかり仕込んで置かないと、後で困るよ。』

『本當ねえ、姉さん、少し母さんに言つて遣る方が好いよ。』

『あゝいふ性分なんだから、言つたつて駄目よ。』

『何うしてあゝだらう、母さんは。』

『それに、お嫁さんも、少しむツつりの方だからね、母さんが呼んだつて、中々立ちやしないつて言ふ風だからね。』

『さうね、少し……』

『なまじつか華族さんなどに奉公してたもんだから、上品なことばかり覺えて、貧乏者にはちとゆつたりしすぎてるからね。西洋料理の拵へ方などばかり覺えて居たつて爲方がありやしないよ。それに政次も惡いのさ、母さんをはつたらかして置いて、二階で話し込んで居たり、一緒にこつそり寫眞を撮つたり、寄席に出懸けて店をしめる時分に歸つて來たりするんだもの。』

『政さん、それでも、毎晩、店を閉める時は手傳ふでせう？』

『手傳ふものかねえ、お前――私が別れてからはそれは手傳ふだらうけれど、此間までは店などに手を出しやしないがね、お前。店を終つて勘定をすまして、母さんが寢る時分には、もう二階ではとうに寢て了つてるんだよ。』

『それはいけないねえ。』

『政次は主人だから、さういふ處に氣を附けると好いんだけど……一向そんな風も見えないし、母さんは母さんで、お腹ん中でヤキモキ思つて居るばかりで、それは變挺だよ。お嫁さんだッて、あれではかへつて困らァね……』

『その癖母さんは家の嫁さんだからつて成るたけよくする氣なんでせう？』

『此頃ぢやもうさうでも無いやうだよ。初めの中は、それでも世話をするつもりで居たらしいけれど、段々厭氣がさして來たんだらう屹度。もう餘りほい〳〵しなくなつたよ。』

『さう？』

疑はしいといふ顏をお光はした。

家の狹い割に、好い道具が多かつた。簞笥、服簞笥、懸軸、額、桐の丸い火鉢もある。立派な茶簞笥もある。紫檀の机もある。鐵瓶、茶器などにも價値のあるものが揃つて居る。お榮の夫は大尉で死んだが、平生心懸が好かつたので、種々な道具を手放しても、猶此小さな家にはありあまるほど殘つて居た。

勤はお榮を昔から知つて居た。秀子が生れる時分、貞一が其入口の狹い二疊に寄寓して、早稻田に通つて居たので、勤は破袴を穿いて、摩滅らした駒下駄を引摺つて、常に其家を訪うた。お榮がかき餅などを燒いて呉れたものである。秀子が生れる日にも、丁度行き合せて居て、其時遣つて來た產婆の肥つた姿を今も覺えて居る。秀子は眼の美しい可愛い子だつた。友禪の綺麗な衣を着せて、夫と一緒にお榮

が出て行くのを見たこともあつた。お榮の夫は其頃三十四五で、鬚の生えた、瘦削な、世の中のことは知り拔いて居る軍人だつた。植木が好きで、庭には檜、楓、蘇鐵、萬年青、柘榴などの鉢が、棚に載せられて、日曜には、へこ帶をした主が、如露から水を濺けて居るのを折々見懸けた。お光は其頃まだ子供で、里から遊びに來ては、貞一の膝にまつはつて繪本などを弄つて居たものだ。

大久保の奥、竹藪の中の藁家が續いて思出された。春は筍が出たり野蒜が出たり菫が咲いたりした。秋は裏の林に栗の實が落ちて、秀子は朝毎に樂みにして其を拾つた。畑には葱、菜、大根などが常に青青として、傍の小屋に住んでゐた老爺が、節毎の野菜の種を下して呉れる。夕暮近く、戸山學校に勤めて居る夫が劒を鳴らして歸つて來るのをお榮は少くとも三四年この家の戸口に出て迎へた。座敷には村田銃が一挺、あたりには獵の道具が一面に置かれて、日曜には夜中から準備をして出懸けて行く。狩獵に懸けては、中々の達人で、山鳩の眠る場所、雉子の居る森、鴨の下りる沼などをよく知つて居た。冬休暇には、汽車で二三日路の處まで行くことなどもある。獲物は常に多かつた。お榮は今でも日當りの好い緣側で小鳥の羽を拶つた其時分のことを思ひ出した。

勤にも貞一にも西にも、其處は記憶の多い家である。露伴紅葉の小說、逍遙鷗外の論文、難かしい審美論が出るかとすると、優しい美しい夢のやうな戀物語が出た。西が新體詩を作る頃には、遠い本鄕臺から戸山の原を越して、林を拔けて裏から遣つて來て聲を懸ける。お榮は大きな丸髷に結つて、肥つた

色白の顔を莞爾させて、新しい大學帽を冠つた一青年と相對した。貞一は表の六疊に、洋書を七八册机の上に載せて、ファルケンベルヒの哲學史などを繙いて居た。小兒の詩と淡い戀の詩とが得意で、新聞の日曜附錄などにはいつも載つた。西は其處で銀杏の樹の蔭に住む少女の話、紫の衣服を着た眼の淸い少女の話などをした。利根川の戀も打明けて語つた。

裏の間に、紙腔琴が一箇置かれてあつた。幸子が丁度五歲位で、常に飽きずにそれを廻すと、『君が代』だの、『梅が枝の手水鉢』だの、種々の曲譜がゆるやかな同じ調子であたりに聞えた。

勤はいつも貞一を誘ひ出して、裏の林を拔けて戸山の原に行くのが例になつて居た。其時は大抵春の長閑な日とか、秋の空の鮮かに晴れた日とか、冬の初めの落葉の鳴る日とかで、二人の靑年は、射的場の上にひろびろと晴れた空を見渡して、自然に對する新しい思を漲らせた。林の角の芝草の小堤、その下に小川が澄んで、二人の頭上を通る色彩ある雲の影が映つた。落合に通ふ路傍の林の中からは、二人が燃した落葉の煙が細く靡いた。晴れた秋の日には、其處によく演習があつて、兵士が『伏せ』を造つて居ると、漸く今年少尉になつたばかりの若い士官が劍を拔いて號令をかけて居る。處々に高く積んだ枯草が長く影を夕日に布いた。汽車が出る度に、踏切の小屋から爺が白い旗を出して居る。

お光も此家に泊つたことが幾度もある。東京にもこんな淋しい處があるかと思つた。姉の秀子と幸子と伴れ立つて、竹のガサガサと鳴る葎の奥に百姓家の燈光の薄く見える垣根道を、通りの湯へ行つたこともある。

『義兄さんが生きて居て呉れると好かつたのねえ！』

いかにも沁々とお光は言つた。稚い頃から可愛がつて、寄席、芝居などによく一緒に伴れて行つて呉れた。自分の下級の若い士官に嫁けようとする腹で、種々教訓した。現に、逝く一年前に、その世話である靑年士官と見合をしたこともあつたのである。義兄さへ居れば、お孝さんのやうに樂しい生計も出來たのにとお光は今でも思つて居る。

義兄が肺病で死んだ家の庭には、白い菊が簇つて咲いて居た。お榮も泣いたが、お光は一層力を落した。月の明かな夜を雁が鳴いて通つた。垣の傍に矢竹が戰いで、其外は細い徑が通じて居たが、勤が丁度その時分其路を往つたり來たりしたことを後に聞いた。『確かお通夜の晩だつたらう、念佛の鐘の音がカン〳〵聞えて、障子には明るく燈光がさして居た。』勤はこんなことを言つた。

『さう言へばお前、今朝西さんに逢つたよ。』お榮は突然言ひ出した。

『何處で？』

『ちよつと、用があつて、今朝早く原町まで行くと甲良町の角で、車に乗つた立派な人が莞爾して私の顔を見て挨拶するから、誰だと思つたら西さんさ。立派になつたね、大變にえらくなつたもんだねえ。』

『此頃、久しく見えないのよ、家には。』

『もう、ちやんと此方の家に來てるの？』

『え、え、去年の暮から養家に一緒になつて居るのよ。』

『まだ式は擧げないんだらう？』

『え、まだ結婚しないのよ。お嫁さんになる人、まだ學校がすまないんですもの。』

『さう。』

『この正月、お嫁さんになる人に逢つたつて、內では大變に喜んで居てよ、やさしい方ですつて。何だか妹でも出來たやうな氣がしたつて言つて居てよ。』

『變るものねえ。』と少し言ひ淀んで、『大久保に來る時分には、まだ若い綺麗な學生さんだつたのに……何でも一度泊つて行つたことがあつたよ、日淸戰爭に內でも出征して、貞一が泊りに來てた頃だつたよ。貞一は學校を出て番町の印刷所に一時勤めて居て、歸りがいつも遲くなる。けども折角遠い處をお出になつたんだからつて、引留めたは好かつたがねえ。其夜、貞一はたうとう歸つて來ないのさ、本當に氣の毒な思ひをしたことがあつたよ。』

『そんなことがあつたの？』

お光もお榮も知らぬが、西がある時、其夜のことを、勤に話したことがある。西は其頃不倫の戀を材

にしたハイゼの短篇小說に讀み耽つて居た。男女の不可思議なる關係、境遇から起る戀の止み難き力、さうした感の起る實例の一つとして、餘所の出來事のやうにしてかれに話した。『細君は隣の間に寢て居る。何うしても寢られぬと見えて、寢反を打つたり、溜息を吐いたりするのが聞える。僕も何だか變な氣がして、其夜はたうとう明方まで眼を覺ましてゐたよ。性の違ふものが二人居るといふことは意味の多いことだ。ハイゼがさういふ處を狙つて詩材にしたのは面白いね、君。』——

姉妹が猶盡せぬ話に耽つて居ると、表の格子が明いて、秀子が學校から歸つて來た。

『お光、御覽よ。秀の恰好ッたら何うだらう？……柄にもないハイカラな眞似をして……此頃はお轉婆になつて爲方がありやしない……』

秀子は流行の廂髪に幅の太い白リボンをかけて、海老茶の袴を穿いて立つた。

二十六

月日は早く經つた。

親に離れるさびしさが此頃お光の胸に絕えず往來した。

嫁が出來てから、以前ほど里に行くのが樂みでなくなる、店の品物を持つて來ても母親は一々帳面に附ける、おきよの綺麗な姿が一面羨しいと共に一面邪魔になるやうな思がする、其身の占めて居た母親

――その總てを占めて居たと信じた母親が、もう自分のものではなくなつた。

話をしても以前のやうに腹の底を打明けることが出來ないばかりか、『お前は他所に嫁いた身だ、』と常に言はれる。家の樣子も變つた。簞笥の置き場所も變つた。姉が別居してから、一層さういふ氣がする。おきよが赤い襷を十字に綾取つて、主婦氣取で、臺所で、働いて居るのを見ると、もう自分の家でないといふ感がひしと迫る。

政次の机の上には、おきよが拵へた綺麗な縮緬の肱附が置いてある。柱に長い姿見が掛つて居る。信玄袋が其傍に雜誌、書籍と一緒になつて居る。紅血が鏡臺の上に伏せてある。寫眞挿には、おきよの母親、兄弟、友達などのが一杯に挿されてある。

總てが變つた。

店の品物を手に取つて見ると、符徵まで變つた。タフネ、イネ、カイヅ――何う考へて見ても解らない。

『符徵を改へたのね、母さん。』

『あゝ替へたよ。』

『何うして？』

『何してといふこともないぢやがね、』と笑つて、『此頃お客樣がな、段々覺えて御座つたで、少し替へ

た方が好いぢやろッて、政次が一生懸命に替へて御座つたがな。』

お光にはさうは思へなかつた。何だか其身などが來て、勝手に店の品物の原價を知るからだといふ風に邪推された。母さんも政さんも他人扱ひにして餘りだと思つた。

勤も前には怒つたり、悲しんだり、三日も口を利かずに居たりしたが、此頃ではさういふことは少くなつた。從つて、その反動とも謂ふべき熱い握手、烈しい情熱、極端な後悔などを示すことも稀になつた。戀人らしい甘い言葉などはもう二人の間に交はされようとはしない。

咲子も次第に可愛くなる。あやすと、高い聲を立てゝ笑つた。齒が生える前には、むづ痒いかして、ぷう〳〵と唇を吹く。やがて小さい齒が二枚可愛らしく出る。すると智慧が附き出して、母親が見えないとすぐ泣出したが、それがまた母親には、此上なく可愛かつた。他から愛を求めて居た身は、いつか他を愛さねばならぬ身となつて居たのである。

ある日、勤が社から例刻に歸つて來ると、お光は今里から歸つたばかりの扮裝をして居たが、溜息を吐いて、

『つまらない！　つまらない！』

『何うしたんだ？』

『本當につまらない！　母さんなんどは賴りにならない！』

『何うしたんだえ？』

『いゝえ、何でもないんですよ。』

とは言つたが、傍に居た咲子を抱き上げて、さもこの世に頼りになるのはこればかりと言はぬばかりに柔かい頰に強いキッスをした。咲子は泣出した。

二十七

『自分は弱かつた。同情は弱者の聲だ！』

かう勤は心に叫んで歩いた。

『善惡標準の轉換、道德の超越、强者の世界、超人を叫んだフリードリッヒ、ニイチエは豪い。善にあらず、惡にあらず、自然の力、自己を自然の力の一部とする思想。

『此の熱烈なる思想を自分が今まで抱いて居た考と比較して見る。自分ながら自分の弱者であつたのに呆れざるを得ないではないか。善を爲せよ。博く愛せよ。美しく行へよ。自己の弱點を改めよ。不幸なる人を憫めよ。筆にせるものは皆な同情的文字、考ふるところは皆な消極的厭世、自己の至らざる、及ばざる、成す能はざることをのみ自ら責めて居た。

『至らざる、及ばざる、成す能はざる、これが至り、及び、成す道であるなどとは、夢にも思ひ至らなかつた。爾に弱點ありといふ、爾に惡の分子ありといふ、爾に呪ふべき惡魔の影ありといふ。何者ぞ弱點？　何者ぞ惡の分子？　何者ぞ惡魔の影？

『自分は空しき影を逐つて居た。空しき美しき夢を見て居た。弱點の攻め、惡魔の襲ひ來るのをのみ恐れて居た。けれど弱點は人間の弱點ではないか。惡魔は人間の惡魔ではないか。否、否、弱點として今まで呪つて居たのは、暗い弱點の影、惡魔の影ではなくて、其處にまことの自然の力が潛んで居たのだ。

『弱者――然り弱者であつたが爲めに、其自然の偉大なる力を縱横に自由に發展せしめることが出來なかつた。地上にあつて天上の星にのみ憧れて居た。

『胸には美しい淸い思想を抱いて居ると思ひながら、實際は無情、臆病、陋劣な擧動をのみして居た。虛僞の生活をまことの生活と信じて居た。畫いた彩色した餅を食つて旨いと思つて居た。

『われは地上の動物たるに甘んぜん。猛獸野獸たるに甘んぜん。我は四肢を地上に立て、吼ゆる時は吼えん、眠る時は眠らん。かくニィチエは叫んだ。然り地上の野獸！

『善とは人間が社會組織上に便利と見たる時の符徵、惡とは人間が社會組織上に不便と見たる時の符徵――。

『所謂善を行ふ事にのみ腐心せる人は禍なるかな、所謂惡を拒ぐことにのみ努力する人も亦禍なるかな、ズウデルマンは其作中の主人公ボレスラプをして、自然の兒レギイネの死屍に對して、善惡價値の轉

倒に就いて、感慨無量たらしめた。眞實なれ、自然なれ、われまことに獸たらば、獸たるに甘んぜん。まことに惡魔たらば、惡魔たるに甘んぜん。弱點あらば弱點を人に示すに躊躇せじ。願ふところは、唯わがまことの心、まことの姿、まことの力の僞るところなく顯はれんことのみ――。

『愛せる子を殺す。殘忍の極、非情の極。されどこれを敢てせるものには、殘忍非情より來る絶大なる呵責に堪へたる力を有せることを證す。呵責なき自由は與みしないが、若し自分にもその力を有することが出來たならば――。

『總て人に求むる心、依賴する心、憧るゝ心、願ふ心――これ等は皆な人間が欲望に屈從して居ては、決して自己の自然のまことの姿を示すことが出來ない。

『自分は曾て道を求めた。美を求めた。善を求めた。自己の克己忍耐と博愛と犧牲とに由つて、理想の家庭をつくり、理想の樂園を得ることが出來ると信じた。戀は戀にして肉にあらずとの考を抱いて居た。かくして爾は美を得たか、善を得たか、理想の家庭を得たか、淸き戀を得たか。

『一つとして滿足のある物を得たためしはない。自分は妻を敎育しやうとした。自分は子を得て、親として新しい意義を發見しやうとした。いづれも失望に終つたではないか。

『何處まで行つても自分は自分である、他人は他人である。妻は妻である。子は子である。何物をも求められない、何物をも得られない。――いや求めたのが、得ようと思つたのが、そもそもの過誤(あやまり)である。

『求めよ、さらば與へられんとイエスクリストは言つた。此立場が卽ち今の新しい思想と違ふ所だ。與へられんなどといふよりも、われは得ん、必ず得ん、得ざるべからずといふのが今の思想である。自己本位、自己中心、自覺、――超人(ユーベルメンシ)――。

『理想の夢に迷はされたるが爲めに、失望が多かつたのだ。與へらるゝを待つが爲めに何物も得なかつたのだ。

『今までは、唯、人生の希望、理想、快樂といふことにのみ頭を沒して居た。馬車馬が脇目も觸らずに歩いて行きさへすれば好いと思ふやうに歩いて居た。いつも同じ路を歩いて居ながら、高い處に達せんことを望んで居た――今、今は少くともさうではない。自分は四邊を見廻し始めた。眼を蔽つてゐたある物を捨てた。確かにぬぎ捨てゝ大地に投り附けた。

『新しい西洋の作家の傍觀的態度、本當にその傍觀的態度が羨ましい。巴渦の中から、一度離れて立つて見て居るのがかれ等の態度である。美も醜も善も惡も無い、萬般の事物唯現象として自然の姿として歷々(あり)として其眼に映ずる。

『飽まで悶え、飽まで苦しみ、飽まで疑ひ、飽まで巴渦の大坩堝の中に其眞面目な熱烈なる心を投じて見て、矛盾、敗滅、紊亂、平凡、腐敗、虛僞の現象に魂を驚かして、さて否定し、反抗し、冷笑した心！

『さうだ――形は千變萬化、人に由つて異り、國に由つて違つた。或者は燃えるやうな高い獅子吼をし

た。或者は惡魔のやうな皮肉な笑ひ方をした。或者は石のやうに冷かに沈默した。或者は狂した。或者は憤死した。けれど其心は一つだ。

『新しき奮鬪、新しき努力。』

二十八

夏になり秋になつた。

丘の上から見ると、目白臺の樹木の中に西洋館の白いペンキ塗が際立つて、空には色ある雲が靡いた。草の上には、赤蜻蛉が飛び、細い水には藻が浮いた。

勤の家では夜はいつも遲くまで書齋の障子に燈火がさした。萩の散つた庭には蟲が鳴いた。勇造の家の裏門の側の井戸端には、お孝が襟に白い手拭を懸けて水を汲んで居ることもある。何うかすると琴の音がした。お光のを借りて來て、お孝はをりをり生田流の六段を彈く。

後家さんの群も凋落した。石渡少佐が臺灣から歸つて來て、一悶着あつたのは此夏のことである。亭主と喧嘩して蒼いけんのある顏をして、夫人がお三輪の家に驅け込んだのも二度や三度のことではなかつた。離緣をするなら手切金を五千圓出せと、夫人は主張した。下の家の主人が中に入つていろ〳〵口を利いて遣つたが話は容易に纏らなかつた。少佐は夫人に未練があつて、喧嘩の間には、をりをり艶めかしい幕を見せて、寢卷姿で女房に負さつて居ることなどもあつた。秋の初めに、近所に評判の立つほどの大喧嘩をしたが、四五日して、不意に小石川の方へ移轉して行つて了つた。太田の後家は、いつの間にか男に印形をちよろまかされて、氣が附いた頃には、三軒の貸家を抵當にしても猶埋らぬ程の借金の穴が出來て居た。男は其金で赤坂の藝者を買つて居たのである。後家さんは雨のしとしとと降る日、下の家の長火鉢の前で、

『これも亡くなつた人の罰が當つたんだ、』と泣いてお三輪に一伍一什を話した。

新聞記者の家では、本妻に先づ男の子が出來て、續いて妾が懷姙した。丁度此頃七月位で、大きな腹をして、庭などに出て居るのを往來の人が常に見懸けた。每朝十時頃に抱への車が來て、新聞記者は洋服姿で威勢よく出懸けて行く。

山手から濠端に通ふ路には、小婢の押した乳母車が同じやうにして通つた。ある日、坂を下りようとすると、洋服姿の西さんが、急に傍に寄つて來て、突然、車の中から咲子を抱取つて、頰を自分の頰に當てた。咲子は人見知もせずに莞爾と笑つて居た。

小婢は歸つてから、お光に、

『本當に奥さん、私、初めびつくりしましたのよ。』

お光は嬉しさうにして、其時のことを詳しく聞いた。其日は終日西さんのことを頭腦に描いて、何と

なくそは〳〵して居た。

おきよと政次との間は、まだ蜜のやうであつた。大きな髷はおきよに殊によく似合つた。政次は其節毎に流行のネクタイをして役所から歸つて來る。母親は段々嫁の蔭口を人に語るやうになつた。その癖、嫁に對する言葉遣ひはいよ〳〵丁寧になつて、『おきよさんや、これをしてお呉れ、』などと言つた。時には傍に居るおきよをわざと擱いて自分で腰を曲げて勝手元へ行つて用を足すことなどもあつた。おきよが二階で泣いて政次に何事をか語ると、『困るなァ本當に、母さんは、』と政次は言つた。

お榮は近くに居るので、朝に夕に濠端の母の店に來た。秀子の綺麗な眼とハイカラな無邪氣な姿も其處に見られた。

秋は日に日に深くなつた。雨がしとしとと幾日か續いて降つた。彼岸の中日は空は美しく晴れて、下の家の金木犀が庭から座敷に匂ひ餘つた。此木犀は十年前に主人と勇造とで神樂坂の緣日で買つて來たものである。

其日勇造夫婦の歸國を送る爲めの宴がその座敷で開かれてあつた。

翌朝は霧が深かつた。

露に濡れた木槿の紅い白い花が垣に幽かに見えて、屋敷町はまだしんとして居た。井戸側、門、垣、其處に俥が二臺置かれて車夫は久しく待つて居た。やがて門から柳行李と軍用カバンとを運び出して車

に載せたのは、下の家の主人である。續いて勤が出て來る。お三輪が出て來る、軍服を着け劍を鳴らした勇造の後から、お孝は縮緬の羽織に紬の袷、手に信玄袋を下げて顏を出した。

昨夜から宿つて居た二十三四の丸髷の里親は、男の兒を抱いて其傍に立つた。

お光が咲子をたゞ負ぶして、急いで向うから遣つて來る。

『それぢや丈夫で、』と總領の兄が言ふと、

『兄さん、大變に御世話になりました』とお孝はもううるみ聲で、『武(男の兒の名)はこれからさぞ御世話になることで御座いませうが、よろしくどうぞ……親の傍に居られない兒だと思召して……』

半ば言得ずに顏を背けると、總領の兄は、

『大丈夫だよ、武のことは安心してお出！』

『嫂さんには、殊に御世話になるでせうから、』と今度はお三輪の方に言ひかけると、

『本當に大丈夫だからね、安心して居らつしやいよ。立派な兄弟がこんなに澤山居らしやるんだから。』

勤は勇造に、

『それぢや成るたけ早く東京に出られるやうに運動するが好いよ。田舍にまご〳〵して居たつて爲方がない。』

勇造は、

『うむ、來年は出られるだらうと思ふんだ。兄さんも少し田舍の方に遊びに遣つて來ると好い。』

『あゝ其中行くよ。』

お孝は里親の抱いた兒に離れ難ないといふやうに其の顏をじつと打守つた。兒はメリンスの赤い地に紅葉の白ぬきにしてある衣を着て、莞爾して居た。若い母親の眼には涙があつた。

お光は其處に立寄つて來て、別離の言葉を述べた。

誰の胸にも別離のつらさが充ちた。此春からの睦しい往來が胸に浮んで、明日からはもう弟の元氣な聲を聞くことも出來ないと思ふと、總領の兄も勤もさびしい氣がした。お光はまたかうして睦じく夫と一緒に國に歸つて行くお孝が羨しかつた。――霧がこの一團を包んで流れた。

勇造は時計を出して見たが、

『それぢや、汽車に後れると惡いから。』

『さうとも……』と兄は言つたが、『でもまだ大丈夫だ。上野までは一時間あれば行ける。』

車夫は梶棒を寄せる。行李はお孝、軍用カバンは勇造が其車に載せた。總領の兄は汽車の中で退屈した時にと、唐饅頭を一袋包の中に入れて遣つた。

『それでは。』

『左樣なら。』

車はガラガラと動き出した。お孝は二三度振返つて此方を見た。いつもの朝なら、坂の上までは其後影が見えるのだが、霧が深いので、車の音はしてももう見えなくなつた。

人々は思ひ思ひの考を抱いて別れた。

二十九

一年はまた過ぎた。

表通りが賑かな町になつて、蕎麥屋、菓子屋、煙草屋が軒を並べるやうになつたのと、ミルクホールが出來て、色の白い白粉をベッタリ塗つた女の學生と戯れて居るのと、丘の蔭に夫婦者の情死があつたのと、久しく塞がらなかつた前の空地に大きな家屋が建てられて、藝者上りの細君のある家族が住んだのと、お三輪が其細君にすぐ懇意になつて、毎日のやうに出入をして、相變らず例の笑聲を立てゝ居るのと、政次の俳句が近頃大分上手になつて時々はホトトギスなどの選に入るのと、裏の樅の樹の伐り倒されたのと、傍の家に主は臺灣の役人に行つて居て、祖母さんが二人、孫娘が二人、その姉の方は、今年十五で、生れつきの白痴で、平生涎を垂らして居るといふ家族が引越して來たのと、下の家の主人が昵近(ちかづき)になつて何彼(なにか)と相談に乘つて遣るので、祖母さん達は大變に喜んで居るのと、早稻田が大學になつて、四角の帽子を被つて學生が朝に夕に陸續と通りを通つて行くのと、鶴卷町の裏の森や茗荷畑が段々ひら

けて家屋が新しく建てられて行くのと、僅か一年の短い月日の中にも、數へれば盡きぬほどの推移があつた。

おきよは今年の夏に女の兒を產んだ。宇都宮のお孝も二番目の兒が生れて、『今度は海軍を產んぢやつた、』と勇造が失望したやうに知らせて來た。お光にも九月の末に男の兒が出來た。『皆な上手だことねえ、まァ、』とお三輪は頓狂な聲で羨ましさうに言つた。六月頃、お三輪にもその噂があつて、『今に見てお出！負けないやうな好い兒を生んで見せる、』などと威張つて居たが、やがてそれは何でもなかつたといふことが解つた。

勤の心の持方は、其實際の處世上にも絕えず効果を與へて居た。かれは常に奮鬪を續けた。自ら顧みるよりは自から進まうとして居た。羞恥、慚愧、神經過敏などといふものは勉めて押へて、如何なる凌辱にも如何なる罵詈にも耳を塞いで奮勵した。夏の初、主筆が罷めて、勤が其週刊雜誌を自分で編輯することになつてから、其力は更に所を得た。咲子の生れた時と、二番目の男の子の生れた時とを比べると、僅か二三年の間に、かうも心も境遇も違ふものかと思はれた。

勤は洋服をつくつて着た。縞セルの脊廣に、縞のズボン。冬服には焦茶色の羅紗の立派な外套が出來た。中折の帽子も流行の色を選んで買つた。靴も深護謨を二足まで造つた。——かれは全く汚れた舊い衣を脫いだ。

近所の細君連も、その變りやうの早いのに眼を瞬つて、『此頃は裏の方も見違へるやうに立派におなんなすつてね、』とお三輪に言つた。

西はまだ公然と披露目こそしないが、もう立派な旦那樣で、その爲めに建增した八疊の新室に常に起臥して居た。室には本箱が並べられて、紫檀の机の上には金緣の洋書が幾册も置かれた。硝子戸を透して山茶花の赤い花が見えた。勤が初めて洋服を着て行くと、『ヤァ、洋服などをつくつて……丸で變つちやつたね、もとの中村君ぢやないやうな氣がする。』

勤も西の變つたのを見た。

梅雨の頃、西さんの養子披露會があつて、大學の同窓、役所の同僚、竹馬の友も二三人は來た。文學方面では勤と田邊が席に列した。養父といふのは、法曹界でも有名な官吏である。肥つた夫人が自から席を斡旋して、鬚の生えた主人も出て杯を客に勸めた。十二疊の廣間、床には狩野元信の三幅對が懸けてあつた。芝草の庭にサッと降頻る雨、青葉の風に靡くのが硝子障子を透して夢のやうに見えた。

雨に濡れた薔薇の紅いのが緑葉の中に一輪鮮かに咲いてゐた。勤は西さんのことを繰返して考へた。

披露會があつてからは、勤が訪問すると、夫人がよく出て來て快活な話をした。未來の若い細君も廊下などで、時々は恥かしさうな樣子をして、黃八丈の羽織姿を見せた。後には馴れて、西さんが電鈴を押すと、障子を明けて、白い美しい顏を出した。田邊と勤と西さんと三人落合ふことなどあると、『おい、

君のは何時まで何うしたんだ。もう内々一緒になつてるのかい、』などと無遠慮に田邊が言つた。

『そんなこと言つたつて、まだ學校に行つてるんだから仕方がないぢやないか、』と西さんは微笑を含んで眉を昂げた。

『學校なんぞ舍させちまふさ。』

と田邊は笑つて、『丸で、猫の鼻先に鰹節をおくやうなもんだからな。』

『馬鹿にしてる！』と西もつい笑つた。

また西さんが勤にこんなことを言ふこともある。『本當に、家のはまだねんねで仕方がありやしない。雨戸の建てやうも知らんのだからねえ、君。此間も母に、お前そんなことで何うするのなんて言はれて居たよ。細君になつたッて、別段變りやうはありやしないし、僕も多きを望まんけどもねえ。』

『それや何處の家だッてさうだ。僕の妻だつて御覽の通りだ。』

『でも本當に考へると不思議な氣がするねえ。君の細君が兎に角二人の子供を怪我もさせずに育てゝ居るんだからねえ。』

『本當さ。』

『人生といふものは、難かしいやうで、存外容易く出來てゐるもんだねえ。』

『左樣だとも。』

西さんも先輩からの壓迫を常に役所で受けて居た。青年官吏間では兎に角樞要な地位を得て居るのであるが、年が若いので、其意見がいつも思つたやうに通らなかつた。『今日は一日口の酸くなるほど議論をした。』『いくら重要な新しい議論をしても老人連には解らんのだから。』『僕も其中に田舍に出るかも知れんよ。』などといふ言葉の端々に、不平不滿の氣が充ちて居た。身體が弱く常に蒼白い神經のたかぶつたやうな顔をして居た。

其顔を見ると勤は『早く結婚して了ひ給へ、』と心から眞面目に勸めた。友を思ふの餘、身體が弱い爲め、養子の籍を入れても、わざと結婚を延ばして居るのではないかといふ邪推もあつた。

西さんのその新室で、お光が若い未來の細君に逢つたことがある。お光は勤にすゝめられて其大きな邸に西さんを訪ねた。百日紅のまだ赤く咲き殘つてゐる頃の日曜日で、西さんはフランネルの上に羽織を着て居た。顔が蒼白く、弱々しさうな姿に、眉の徒に秀でたのが惜しいやうな氣がして、昔のことがさまざまにお光の胸に溢れた。

若い未來の細君はお節さんと呼ばれた。西さんが電鈴を押して下女を呼んで、『中村君の奥さんが入らしつたから、節ちやんに御目に懸つたら好いだらうッてさう言つてお出で、』と命じたが、中々出て來なかつた。節ちやん！　節とかお節とか言はずに節ちやん！　其言葉がそゝるやうにお光の胸に響く。でも、少時すると、廊下に輕い足音がして、障子がすうと明いて、痩削の庇髪に結つた面長な顔が此處に

顯はれる。別嬪といふほどではないが、さう容色が悪い方でもないとお光は思つた。

細い白い指に篏めた純金の指環、不斷着にして居るらしい伊勢崎銘仙の羽織、帶の色などが眼に留る。

初對面の挨拶は形式的に濟んだ。學校仕込のハイカラな好い家庭の娘と二人の兒の親の世帶じみた姿が一種の對照(コントラスト)をなして相對した。お光はたぢ〳〵といつも立後れのやうな調子で話した。

下女が大きな有田燒の菓子器にウエーハーを入れたのを持つて來て、銀瓶から湯を薩摩燒の小さな急須に移して、冷えたのと換へて行く。

其處に肥つた夫人が入いて來た。

お光は氣がつまるやうに感じた。莞爾した笑顔、言葉つかひも上品に、手を膝の上に重ねて、『まだほんに分らずやですから、』とか何とか調子の好い口附で話し懸けられると、無調法な口がいよ〳〵無調法になつた。

『中村君にお嫁に行く時、私が荷物の宰領をしたんですからねえ。』

と西さんが席の白けるのを氣にして、笑ひながら言ふと、

『さうかねえ、まア。お前も、里にゐらつしやる時分から知つてゐるのだねえ。』

『えゝえゝ、私はお光さんがまだ此位の時から知つてゐるんですよ、』と西さんは笑ひながら、手を疊から三尺位の高さに伸ばして見せる。

『さうかねえ、まア、』と夫人は言つたが、すぐ話を更へて、『それに、お子さんが此間お產れになつたばかりのやうに……』

と言ひ懸けてお光の顏を見て、『おつれになつていらつしやれば好う御座んすのに、少しの間でも、さうしては、お困りでせうにねえ。』

『中村君に預けて來たんですか。』そんなことをと思ふやうなことを西さんは言ふ。

お光には夫人が何だか難かしい人のやうに思はれて爲方がなかつた。話しながらぢろ〳〵と見る眼、自分の扮裝(みなり)も羞かしかつた。

お光は西さんに同情した。またしても、『なぜ御自分から養子になどなつたのでせう？』といふ心が起る。と、其蒼い顏も、痩せた體も、昔のやうにはき〳〵せぬ調子も、皆な其の爲めであるやうに思はれる。何となくうら悲しいやうな佗しい心になる。

夫人の去つた後、

『田舍の兄さんは此頃何うしました。』

かう西さんから訊かれて、『もうすつかり田舍者になつて了ひました。』

三十

ガタ馬車の顚覆りさうな深い泥濘の五里の路を衝いて、田舍の小さい停車場から、貞一の寺を勤の訪ねたのも、此年のことである。横しぶきの入らぬやうにと垂れ下げた馬車の雨被ひの間から、をり〳〵見える藁葺の百姓家、餌を拾ふ鷄の群、ふかし甘藷を並べた路傍の休み茶屋、雨に赤い蹴出を高く捲つて、傘を避けて、馬車の駛つて行くのを避けて居る田舍娘もあつた。町の家並から野に出る處には、竹藪が連つて、川柳やら蒲やら藻やらの亂れた小川に、秋雨はザン〳〵降つた。

寺のある町は、平野の中に處々散らばつて居るやうな特色のある町で、造醬油屋の細い煙突と半鐘臺と北を劃つた寺の暗い杉山と多額納稅者の白壁とで成立つて居て、其の中央にペンキ塗の剝げた警察分署があつた。庇の長い家屋が一筋に並んで、市の日には唐物屋の硝子戸の中に赤い青い毛糸が見えた。靑縞が土地の名產で、機杼の音が到る處に聞える。大きな吳服屋と足袋屋の招牌が著しく眼に附いて、町の街道の向うには、晴れた日の空に日光の群山が捺したやうに鮮かに背景をつくつて居た。

道路が町から四方に車の輻のやうに通じて、其外れに、乘合馬車の繼立場が三箇所まであつて、喇叭の音がをり〳〵町の靜かな空氣を賑かにした。

寺は町の裏にあつた。山門の白壁は半は崩れて、舗石道はでこぼこと歩み憎く、本堂は低く見すぼらしかつた。昔榮えた寺の衰微——杉山の大きいのと、境內の廣いのと、周圍に溝を取廻してあるのとが、昔の榮えと今の衰へとを語つた。

蝙蝠傘に雨を凌いで勤が傾きかけた山門の處にひとり立つた時には、さま〴〵の思が胸をついて湧き返つた。當年の若い群の一つの心は、此處に埋れ果てゝ居るのである。柳町から原町喜久井町の長い路をシエクスピアを抱へて早稻田に通つたかれ、柔しい情を常に若い群に與へて居たかれ、共に戀に泣き運命に泣いたかれ、明治の詩壇に新しい種を蒔いたかれ——かれは此處に居るのであると思ふと、過ぎ去つた昔の追懷がそれからそれへと集つて來て、緩かな哀愁が曲譜のやうに心に流れわたつた。勤は此のなつかしい思を靜かに味ひたい氣になつて、山門の處にしばし立盡した。秋雨は降頻つた。

あたりは靜かであつた。庫裡の廊下に接した珊瑚樹の大きな葉に雨がたまつて、風の一吹ごとにばらばらと落ちた。井戸側には釣瓶が伏せてあつて、赤い冠鷄の鷄が簷下に雨を避けて、一二羽遊んで居たが、人の近寄る氣勢にコヽと聲を立てた。

庫裡の入口はがらんとして居た。米俵が五六俵隅の方に積まれたのが見えて、高い天井には、維新前主僧が供をつれて乘り廻した古駕が、埃に黑く煤けて、二箇吊つてある。案內につれて、古い衝立の蔭から十五六の小僧が顏を出した。

やがて貞一の莞爾した顏が其處に顯はれて、

『よく來て呉れた、よく來て呉れた。』

寺行の話があつた時分の貞一の物語が勤の胸に蘇つた。廊下もある、貞一の小僧の頃居たといふ玄關の三疊もある。總てが思つたよりも古く汚く衰へ果てゝ居た。貞一の詩に歌つた寺の娘の若々しい戀が、こんな寺に起つたとは何うしても思はれなかつた。

其娘は色白の丸顔で、よく貞一と圍爐裏に相對して坐つて、火箸で灰に字を書いて見せ合つたといふ。また默つて泣き合つたこともあるといふ。裏の畑の芋の葉に夏の月の夜の露が光つて、其間の細い路は林の中に入つて行く、『二人こそ樂しかりけれ、おぼろ夜の月の光に。』かう貞一は詩の中に追懷を歌つた。其娘は今鴻の巣在の荒物屋の細君になつてゐた。

『此間も來たよ、』と貞一は話した。

『僕が小僧をしてる時分には、此寺はこれで中々盛んなものだつたよ。老僧が派手家で、世話人に其時分の豪家が居て、成田から不動さまを勸請する。其門前には、弘法樣の御夢想湯ッて言ふのがあつて料理屋が二軒まで出來て、白粉を塗つた女が五六人も居て、朝から三味線の音がしたものだよ。寺だつて、こんなに荒れては居はしない。道具だつて寺附の立派なものが隨分あつたサ。處が先住が死んで、留守居を置いてある間にこんなに荒れて了つて、僕は初めて入つた時は、それや喫驚した位だつたよ。唐紙、雨戸、そんなものまで持つて行つて了つたんだから。』

貞一の言葉には何處となく田舍訛が交つた。おきよと政次の結婚後、一度東京に出て來たばかり、心も姿も田舍風に染みたのを勤は見た。

ルーヂンの話、わが黨にも隱家一つ位あつても好いと其頃言つた。其隱家に敗兵は來ずに、貞一自からが隱れることとなつたのである。

若い群は思想上にも實際上にも敗北に敗北を重ねながら、猶志すところに進んで居た。勤の此頃の心から見ると、貞一は餘りに平和に安んじ過ぎた。

『僕等はもう在來の思想に甘んじて居ることが出來なくなつた。平和などに甘んじて居られなくなつた。』

勤はかう言つた。

明治の詩壇も著しく變つて居る。貞一が田舍で田園の平和を歌つて居る間に、感情派が出たり唯美派が起つたりした。手帳に書き附けた詩を貞一は歌つて聞かせたが、勤には甚だ時代に後れて見えた。

『何うも面白いには面白いが、もう少し新しい分子があつて好いね。』

『さうだらうね、僕も何うもさう思ふ。矢張刺戟するものが無いといけないねえ。』

『田舍に安んじて了ふと、矢張いかんのだ、』と勤は言つて、考へて、『一時、田園生活などといふことが唱へられたことがあつたね。あれが矢張ある思潮の墜落の頂點に達した時だつたんだね。吾々が敗殘

とか衰頽とかいふ風なことを考へて、自から消極的にして了つた時、ある新しい芽がもう出懸つて居たんだね。』

『さうかな。』

貞一は頭を傾けた。

二人の間には酒が置かれてあつた。貞一は昨年結婚したので、田舍訛のある丈の高い肥つた細君が勤に初對面の挨拶をした。若い群の青年時代は既に去つた。

むかしの友に訪はれて、消え懸けた心の再び燃ゆるほどの熱はまだ貞一に殘つて居た。幼い頃から枯淡な宗教にはぐくまれて、物に執着せぬ性質は、若い群の間にも常に際立つて眼に附いて居たが、それがかれのかうした隱者の生活を送るやうになつた第一の動機である。

『僕も遣るよ、大に遣るよ。』

とかれは激昂して言つた。

勤は田邊の話をした。窮厄また窮厄、霞ヶ丘の家も持ちこたへられずに、家族を里に預けて、再び放浪の生活を始めた。『あの才筆を抱いて、久しく世に認められないことを考へると、實際、文藝の道に携つて居るのは厭になるよ。西君が此道に入らずに、吾々と別れて行つたのも尤だと思ふね、』と嘆息して、

『それは君のやうに、かうして田園生活をして、原稿の一枚賣の恥辱を免がれたのは賢い仕方だ。何

うせ、人生は轉變極りない。自然が人間を保護すると思ふのは大間違ひで、ある時などは實に殘酷に見えることがある。人間は自然に對して防禦に出でなければならないと痛切に感ずることさへあるよ。僅か三四年の間だが、隨分大きな變遷があつたぢやないか、君。現に僕の方の杉山君などの死を考へて見てもわかる。あんなに得意であつた地位から忽ちにして死！　先生が洋行に萬歳を唱へられた時には、もう其の暗い影と相面して居たんだ。ぐづぐづしては居られんよ、君。どんな形式でも自分の特色を發揮して了ふ必要がある、』と言淀んで、『それを思ふと、田邊などは豪いさ。餓ゑても猶ほ其目的の爲めに働いて居る。瀨尾君などの歴史事業に隱れて、安きに就いたのから考へると、餘程豪いと思ふ。』

『本當にさうだ。僕なども安きを貪り過ぎてた。大に遣るさ。』

貞一の顔は酒に赧くなつて居た。

細君は勤のよく飲みよく談ずるのに驚いた。夫も頻りに機嫌よく聲高に笑つた。平生默つて、進まぬ顔をして、机に凭つて書を讀むか物を書くかして居る人とは思へぬ位で、傍で見て居ると、二人の心が解け合つて、縺れ合つて、さも離れ難ないやうに見えた。夕暮近く、德利が五六本も並ぶ頃には、二人はしたゝかに醉つて、殆ど席に堪へぬといふ風であつたが、やがて濁聲で何か歌ひ出したので、細君が襖を細目にあけて覗いて見ると、客は眼を細くし顔を上げて、拙い調子で何か歌をうたつて居た。

おきつね、きつね、

春の夜はせめては啼くな、
故郷の藁家の鳩が、
たまさかに、
むかしの春を思出でゝ、
夢に見にこん……。

五年前に西さんが作つた詩で、若い連中は當時よく歌つたものである。夕日の野に林から出ようとする坂の上などに來ると、西さんはやさしい聲で、眉を昂げて、胸に染みわたるやうな歌ひ方をした。向うには利根川が一筋白く、帆が色ある雲に映つた。それが、今、秋雨の降頻る田舍寺の薄暮の佗しい空氣に震へるやうに聞えた。

三十一

その翌年の矢張秋雨の降頻る日に、勤は長兄の家の門の前に立つた。檜の木の繁茂の間を傘を斜に庭に入らうとすると、雨滴がばらばらと落ちたので、思はず首を縮めた。緣側に添つた障子は堅く閉ぢられて、處々の破れやら、碁盤の目のやうに黑く白くなつて居るのが目に附く。あたりは何となく陰氣にひつそりして居た。

緣側から障子を明けて、案内も乞はずに茶の間に入ると、汚い襟垢の附いた搔卷を懸けて、鬚の茫々と生えた顏を仰向けにして、兄は寢て居た。

久しく替へない古疊が長雨にしとつて、氣味惡く足にべトつく。

『兄さん。』

と搖り起すと、やがて眼を開いて、『勤か、』と言つて半ば起上る。

『何うかしたの？』

『いや。』

と眼を摩り〳〵起上つた。今から三月前大改革があつて非職になつてから、元氣がすつかりなくなつて了つて、白髮が著しく目に立つて來た。財產もなく、力になる先輩も友人もない身には、扶持に離れた翌月から、もう日毎の生活に困り始めたのである。

最初の一月は古びたフロックコートを着て、毎日のやうに彼方此方と出懸けて職をさがし廻つた。顏を合せるのも羞かしいやうな後輩の家をも訪ねた。緣故といふほどの緣故もない舊藩の人々をも訪問して、役にも立たぬ菓子折を贈物にした。けれど四十にもなつた官吏の古手などを相手にするものはなかつた。通り一遍の挨拶と人の不運を冷かに見る眼とに到る處で避逅した。次の一月は絕望と窮迫とが續いた。着物を質に入れる時の細君の繰言にも耳を痛くした。

『あんまり詰らん處でも爲方がないが、何處か好い處が無いかな、』と勤の顏を見る度に言つた。『官吏も長く遣つたが、もう懲々した。今度は一つ實業界に出て見ようと思ふんだが、お前の社に口がないか、』などとも言つた。

賑かであつた家が丸で火の消えたやうになつた。お三輪の元氣な笑聲も聞えない。勤は昨年の暮に、久しく住んだ家を離れて、原町の二階のある家に引越したので、もう以前のやうに度々遣つて來なくなつたが、でも來る度に、蒼い顏と進まぬ話と絕望的な言葉とを聞かされて、いつも氣の毒な思をした。後には兄は生活に勞れ果てたといふやうに常に搔卷を被つて寢て居た。

『嫂さんは？』

『今居たつけがな……何處か其處等に遊びに行つたんだらう。』

身を起して、火鉢の前に坐つて、火をかき起した。

袖口の切れた汚れた黃縞の羽織を着て居た。顏色は蒼い上に暗い影が添つて、半白の頭にはフケが溜つて居る。頰も著しく瘦せて見えた。

若い時の墜落はいかやうにしても浮び上ることが出來る。人生の盛期を過ぎてからのかうした墜落——勤は胸に佗しい同情の念を强く感じた。

『よく降る雨だなァ。』

兄はかう言つて、氣の拔けたやうにあくびをした。

『お前今日は歸りが早いな。』

『休んだんだもの。』

『書くものでもあつたのか。』

『え、少し、』と言つて、『何處か好い口はまだ見附からないですか。』

『心當りが一二軒はあるんだけれど、何うも思ふやうに運ばない。』

何うせ食はずに居る譯には行かないから、大抵な處は我慢して出る積だが、『それでも餘りひどい處でも困るからな、』と淋しく笑つた。聞くと、話が二つあつた。一つは某省の雇で日給四十錢、一つは府廳の寫字生で月給十五圓。

『それでも困るからな。』

と兄は同じことを言ひ足して弟の顏を見た。

今迄の兄の生活は、多くの官吏などに見る其月暮しで、月の半は贅澤に半は節約して暮した。貯金などをする餘裕は無論なかつた。

裏の雨戸は雨にしめた儘なので、家が何となく暗く感じられた。朝起きて掃除をする元氣も無いと見えて、障子の桟にも闕にも埃が白くたまつて居た。神棚にも佛壇にも花もなかつた。

兄は勝手元に手を出すのが好きで、朝など常にお三輪を寢かして置いて、自分で飯を炊いたり味噌を擂つたりしてやつた。勇造が居る時分見兼ねて、『兄さん勝手元だけは女に遣らせなければいかんよ、』と言つて、お三輪に膨れられたこともあつた。鐵瓶がやがて音を立て始めたので、兄は茶碗、土瓶、椀。鍋、七輪などの混雜（こんざつ）と足の踏所もないやうに散らばつてゐる間を、流元に下りて、急須の茶殼を捨てたが、『本當に、何處をほうつき歩いて居るんだか、朝の勝手をまだ仕舞はない！』とぶつ〳〵言ひながら戻つて來て茶を淹れに懸る。

『氣の毒だが、月末にまた少し何うかして貰はなくつちやならんがな。』

と兄はしばらくしてから言つた。

『僕も困るけれど。』

茶を飲みながら勤が顏を曇らせると、

『お前には本當に氣の毒だけれど、來月は何處かに出るから……己だつて、いつまでかうして居られやせん。』

勤は默つて困つたやうな顏色をした。

其處に、お三輪は雨の中を傘もさゝずに歸つて來たが、兄弟默つて坐つて居るのを見て、自分も矢張默つて其處に坐つた。何處となく元氣がない。

『お前、勝手も片附けないで、何處を遊んで居るんだ。』

『前の家に行つたら、つい饒舌が長くなつて了つて……』

いつものやうに笑ひもしない。戯談も言ひもしない。主が茶簞笥やら火鉢の抽斗やらをさがし廻して居るのを見ても、何をさがして居るかと聞きもしない。

さがしあぐねて、主は、

『まだ甘藷（いも）があつたらう？』

お三輪は返事もせずに立つて、勝手に行つて、戸棚をガタピシさせて、やがて汚ない盆に、禿（ち）びた丸燒を二三本載せて持つて來た。

『これやひどい、もつと好いのが殘つてると思つたが、これぢや爲方がない、』と主は言つたが、『お前、少し暖い處を買つてお出……』

『何に、これで澤山、澤山ですよ、嫂さん、』と言つて、勤は其丸燒を一つ取つた。

お三輪は勝手元で放つて置いた跡仕舞に取懸りながら、

『あゝあゝ何をするにも張合がありやしない！』

先月の拂も出來なかつた。米屋、酒屋などは長いお得意だけに厭な顏もしないが、家賃は其前々から溜つて居るので、差配の四十男が來て、度々催促をした。一二箇月の停滯、常ならば、左程氣にするほ

どのことでもないが、職を失つたとなると、この境遇が無限に續くやうな氣がして、不安が絶えず一家を襲つた。

『本當に好い處が無くつて困つて了ふ。勤さん、何處かありませんかねえ。何んな處でも好いんですがね、』とお三輪は幾度も言つた。『内などもう老耄(おいぼ)れて了つて爲方が無いんですがね……本當に、今になつて困つて了ふ。』

こんなことも言つた。

何時來て見ても二人とも屈託したやうな顔をして居る。今までには、時々御馳走を拵へて晩酌によばれたこともあつたし、菓子鉢に羊羹、唐饅頭などが常に取つてあつたし、火鉢の傍に笑聲の絶えたためしはなかつた。それなのに、此頃では、『本當に氣がくさくさして、口を利くのも厭になつて了つたんだがね、勤さん。』

お光も勤に、

『此頃は兄さんの家へ行つても、何だか調子が變で、話も碌に出來なくなつて了ひましたね。本當に何處か口がありさうなもんですがね。』

兄の家を蔽つた暗い影が、勤の家までも襲つた。

勤は時代に後れた兄の學問と平生とを知つて居るだけに、一層先を苦勞にした。出來るなら十分の世

話もして遣り度い。此兄には自分は幼い頃から一方ならぬ恩を受けて居る。かういふ時に恩返しをしなくつてはならないと思つて居る。時には眞面目になつて、『何アに、月に二十圓か三十圓、原稿の五六十枚も書けば、あの一家の不安を救ふことが出來る。夜、二時間づゝ兄の爲めに働いて遣れば好いんだ！』などと健氣な決心をすることもある。けれど餘裕とてもない身には、一枚でも餘計に原稿を賣れば賣るだけ、金が費るといふことになる。實行は容易でなかつた。

『何うか氣の毒だがな……』

と兄はまた言出した。

『え、何うかします。』

勤は言つた。

雨は矢張降つて居た。

表で傘に雨が當る音がしたと思ふと、入口の格子が明いて、誰か人の來た氣勢がする。主が暗い入口の障子を明けたが、

『あゝお前か、』と言つて、すぐ引返した。

『誰？』

勤がかう訊ねた。

『おきよだよ。』

傍に來て坐つた居たお三輪が、

『おきよが……此雨に、』と言つて、立つて行つたが、續いて、『まア お前、子供を負つて此雨に遣つて來たの。』

といふ聲がする。

『だツて、暫く御無沙汰しましたから。』

かう言つて、おきよは上つて來た。二三月前から見ると餘程變つた。第一、少し肥つて、昔の愛くるしい眼がもう光を失つて、額のあたりから頰にかけて、何處となく母親になつた面影が見える。めづらしく束髪に結つて、結付に負つた兒はスヤスヤと寢て居た。

おきよは勤に、

『今、ちよつと、勤さんの處に寄つて來ましたのよ。』

『さうですか。お光が一人で淋しがつてゐたでせう。』

『えゝ、』と笑つて見せる。

『歸りにまた寄つて行くんでせう？』

『え、荷物を少し置いて來ましたから。』

脊から下すと、兒はぱつちりと眼を明いて、笑ひもせず泣きもせず不思議さうにして四邊を見廻して居る。お三輪は手を出すと、顏を母親の胸に當てゝ了つた。

おきよは此の伯父伯母を一方ならずたよりにして居た。結婚當座は來る度によく戲談を言はれた。交情が好いと言つては冷かされ、惡いと言つては冷かされた。娘から妻になつた苦痛、妻から母親になつた苦痛、それを訴へに來ても、いつも心が輕くなつて歸つた。聞いて居て顏の赤くなるやうな男女の祕密をもお三輪の口から聞いた。しつかりした里のない身には、里にも增して力に思つて居た。その伯父の非職は、おきよに取つて、賴む木蔭に雨が漏るやうな氣がしたのである。

兒に乳を含ませたり、襁褓を更へて遣つたりするのを主は見て居たが、

『此頃は子供の世話が大分上手になつたね。』

おきよが默つて笑つて居ると、お三輪が、『え、もう此頃ぢやすつかり母樣になつて了つた。』

『でもね、伯母さん、』とおきよは笑つて、『今でも隨分大變ですよ。雨が降つて襁褓が乾かない時だの、夜何うしても寢つかない時など、つくづく子供といふものはつらいものだと思ひますよ。』

『勝手に拵へたんだから爲方がないわね、』とお三輪は笑つた。

『皆なさうして大くなつて來たんだ、』と主は淋しさうに言つた。

勤は少時して暇を告げたが、車屋、石屋、煙草屋などの並んで居るいつもの通を歩きながら、『皆なさ

うして大きくなつて來たんだ、』と言つた兄の言葉を胸に繰返した。平凡な言葉、よく自分も聞かせられた言葉――でも今日は何だかそれに深い意味があつて、混雜（こんざつ）した現象がそれを中心に分明（はつきり）と頭腦に上つて來るやうな氣がした。西さんのこと、田舍に隱れた友のこと、おきよのこと、自分等夫妻のこと、殊に其身が世の中に出て段々思想も地位も感情も變つて行くのを意味深く感じた。世間といふものが解つたやうな氣がすると共に、榮ゆるものゝ上にも、衰ふるものゝ上にも、動かすべからざる力が行はれて居ることをつく〴〵思つた。

『勞働！　勞働！』

と自から叫んで、ゾラのことなど考へて見た。

妻といふことが頭腦を衝いて來た。戀と妻といふことが第一に考へられる。戀といふも愛といふも皆な生殖の爲めである。複雜した人間の生活も皆な種の繼續の爲めであるといふやうに考へても見た。けれどさういふ風に見るよりも、戀は戀、愛は愛、妻は妻、生活は生活といふ風に、その中心に連絡した思想を置かずに考へる方が事實に近いと思つて見た。と、かうして男と女がある動機で一緒になつて、妻と呼び夫と呼び、親となり子となつて居るのが、不思議な現象のやうに思はれた。

三十二

家には書生が置いてあつた。構も今までとは大した違ひで、間數が六間、家賃が十四圓、庭には松に敷石、手水鉢は立派な石で出來て居た。移轉した時、持主の切髪の後家さんが來て、目ぼしい道具の無いのと細君が若くつて世馴れないのと、且那の書生上りでぞんざいなのとに不安を抱いて、それとなくもしもの時のことを、隣の友達の後家さんに賴んで行つた。

勤は散歩の序に此の家を見附けた。原町の通から奥に鍵の手に折れ曲つて入つて行くと、日に〳〵開けて變つて行く牛込の山手に、維新以來の感じが其儘ソッと保存されてあるといふやうなところ、木立が深く繁つて、秋の日には、日影がチラチラと葉を洩れて、垣には紅い白い木槿が咲いて居た。栗のいがの熟みわれた藁葺家からは、細い煙が人に忘られたやうに颺つて、井戸端で白髪の上品なお爺さんが、盆栽の鉢を洗つて居るのを見懸けることなどがある。貸家札の斜に貼られた其家の門には、其時柏の廣葉が風にガサ〳〵と音を立てゝ居た。勤は隣の後家さんに戸をあけて貰つて入つて見た。構からつくり、間取の具合がいかにも氣に入つた。殊に裏の空地の欅の大きな樹が聳えて、淡竹やら草やら八重葎やらが一面に亂れて居るのを面白く思つた。幽栖（かくせい）――勤の胸は喜びに溢れた。兄や里の母親が家賃が餘り高過ぎると反對したにも頓着せず、すぐ話を定めて移轉して了つた。

持主の後家さんは、十九になる中學に通ふ男の兒と、十七になる眼の美しい容色の好い娘とを育てゝ暮した。南山伏町に小さな家を借りて、生花教授の看板を出して居た。『宿が此家を造りまして、三年住んだ切りで歿くなつて了つたものですから……此の二階なども今に倅が成長くなつて、友達でも來るやうになると、庭からすぐ上れるやうにッて、さういふ處まで考へて造りましたのですが、逝かれて了つては本當に爲方が御座いません、』と後家さんは昔を話した。話振から推すと、夫は相應に好い處の官吏をして、派手に暮して居たらしかつた。勤は住んでからも、時々此の家を造つた人のことを胸に浮べて見ることがある。床の間の好み、緣先の石、玄關のつくり、植込の木の種類、其人が亡くなつて、かうして他人が借りるといふことも意味のあることである。

庭に大きな枇杷の樹があつた。この樹を他所から買つて此處に移した時、細君が、『枇杷の木を植ゑると悪いことがあると言ひますから、』と言つてとめた。其時、主は『女は御幣ばかり擔いで爲方がない』と笑つたとの話、其枇杷の樹の大きい葉の間から、春は紅梅の花が二階の勤の書齋を硝子障子に繪のやうに透して見えた。

欅の木は恰度大きな翼をひろげたやうに空に聳えた。風が渡る、夕日が照る、色ある雲が過ぎる、弓のやうな月が懸る、――勤は朝に夕に、この大きな樹の動き靜まる姿と相對して坐つた。

前の藪からは、さま〳〵の音が聞えて來た。葉と葉と擦れる音、幹と幹と觸れる音、私話くやうな音、

怨むやうな音、蚯蚓のなく音、名を知らぬ蟲の音、靜かにしんとしてゐる時があるかと思ふと、際立つて騷々しく思はれる時もある。藪地との境に丸竹を組んだ古い垣があつて、葎が一面に蔓つてゐた。

晴れた日には、光線が亂れ合つて、緣がチラ〳〵した。雨の日には降る雨の脚が樹の影に長く見えた。

二階を下ると、庭に面した八疊が座敷で、六疊が居間、其居間の硝子障子の傍に、勤は妻子と蒲團を並べて寢た。朝目を覺すと、いつももう雨戸が繰つてあつて、鮮かな朝の青空と欅の大きな樹の頭とが見える。前の戸袋には朝日がさした。

隣の後家さんの家には肥つた二十三四の娘が居た。赤城あたりの小學校の女教師をして居て、朝早く海老茶の袴を穿いて出懸けて行つた。勤は此娘については、餘り好奇心を起さなかつたが、移轉しない前、神樂坂に通ふ通りで、毎朝邂逅した綺麗な女教師が此娘の友達で、ある日門から二人で伴れ立つて行くのを見てから、何となくたゞならぬ心地がした。隣の娘もその綺麗な女教師も麻布の高等女學校出身で、同じく一人娘で、養子を取る身だといふことを聞いた。隣の娘には、一昨年一度軍人の養子が出來て、三四箇月して離緣になつたといふことである。

隣の後家さんは、裏から緣側に來て、日向ぼつこをしながら、お光とよく話をして居た。旗本で、維新前から此處に住んで居て、家屋も地所も皆な自分で持つて居る。上品な、言葉の少い、義理の固い好いお婆さんであつた。初めは樣子を見に來たものらしかつたが、後には懇意になつて、却つて勤の家を

頼りにするやうになつた。

勝手元は廣かつた。井戸も一軒で使ふやうになつて居る。流しが石で出來て居て、冬は凍つてツル〳〵滑る。勝手の隣に湯殿があつた。錢湯が遠く、夜行く路が淋しいので、勤はつまらぬ雜誌につまらぬ原稿を二十枚ほど書いて、立派な角風呂を買つて來て据ゑた。井戸から竹筧に通すやうにする爲めに、汚い桶屋の爺が來て、一日働いて拵へて行つたが、その傍で閑暇な兄は何彼と世話を燒いた。これに限らず、兄はすぐ勤の家の世話をした。勤も何ぞといふと、兄を呼んで相談をした。移轉した當座、物干がなくて不自由して居ると、兄は近所の材木屋から丸太を二本買つて來て、薪を半分に割つて竿かけを拵へて、裏の空地に立派なのをつくつて呉れた。鋸に鉈に釘箱に錐。兄の體を曲げて仕事をして居る肩の處に暖かい日が當つた。

唉子は今年四歳のよち〳〵歩行、その傍に行つて、廻らぬ舌で『伯父さん、何ちてるの？』などゝ言つた。眼の丸い、髪の房々した兒であつた。雜種の茶色の犬が垣の傍で足で腹のあたりを掻いて居たが、時々それを止して、何か物音でも聞くやうな樣子をして、ぢつと耳を立てた。例の肥つた家婢が襁褓の洗つたのをバケツに入れて通つて行くと、兄は仕事をしながら、『お菊それ蛇の脱殼が、』などゝ戯談を言つた。お菊はいつも大きな聲で笑つた。

『彼方の旦那樣が戯談を仰有つて爲方がないんですよ、奥さん。』

ばた〳〵と勝手元に逃げあがつた。三年の間に樣子がすつかり變つて、言葉の訛も除れ、田舍の土臭い處もなくなつた。何方かと謂ふと、元氣な働者で、跡仕舞などはぐん〳〵すまして、子供を負つて、いつも近所の小さな練兵場に兵隊さんを見に行く。日當の好い芝草の堤には、子傅や下女が澤山遊びに來て居て、近所に居る好い男の御者の噂抔をした。戯談を言つてから歸つて行く酒屋の御用聞などもあつた。

藪地と寺とを隔てた通りには、午後に時々廣告の樂隊や行進中の兵士の軍歌などが通る。と、お菊は浚ふやうに男の兒を後にたゞ負ぶして、鍵の手に曲つた道を、それに間に合ふやうに一散に驅け出した。同じ道から同じやうにして驅出す下女が少くともいつも四五人はあつた。で、通りに出る角の煙草屋の檐下に並んで、道化た假裝行列や、紅白の旗や、調子をかしく叩いて行く樂隊の男や、牛に曳かせた粧飾した車などをあくがれ見た。

ある時かういふことがあつた。六月の晴れた日のことである。門の前に近所の子供が來て、『お菊さん、誰かゞ呼んでるよ！』と言つた。お菊は聞いての聞かぬ振をして居た。でも子供等が容易に去らぬので、玄關の三疊に居た書生が出て見たが、すぐ引返して來て、厭に冷かすやうに、『お菊さん本當に人が來てるんだよ、』と笑つた。其日は日曜か何かで、勤は長火鉢の傍に居た。お菊は困つたやうな樣子をして顔を赧くしてぐづ〳〵して居たが、ひよいと男の兒を抱き上げて勝手元からこつそり門を出て行つた。勤が好奇に、後から出て見ると、樹の繁つた長い道に、一ところ長屋の三軒ほど續いたところがあつて、

その前に子供が七八人かたまつて居て、其處に垣に寄つて、男が一人腰を草に下ろして居るらしかつた。其前に行つたお菊の赤い繻子の帶が日に光つて、はつきりと際立つて見える。

二人は相對して、何か久しく話して居た。ふと、男は立上つた。今まで見えなかつた姿が見えた。髪の長く延びた學生風の男で、汚い茶色の脊廣を着て居た。兒を抱いたお菊と一緒に並んで、二人とも後を振返りもせずに、長い路を一歩一歩話しながら歩いて行くと、後から子供の群がぞろ〳〵尾いた。長い路には葉櫻の枝が出たり、桐の花が紫に咲いたり、冠木門の松が枝を伸したりして居たが、並んだ姿は段々其間を遠く遠く、曲り角に近づいた頃には、もう蹤いて行く子供もなかつた。振返りもせずに曲つて了つた二人のあとの長い巷路には、日が葉にキラキラと光つた。

『田舍の從弟が來て……こんな處に來なくても好いのに……』とお菊は歸つてから顏を赧くしながら、申譯のやうに言つた。

『從弟？　お菊さんうそでせう。』

と書生はわざと眼を丸くして見せた。書生は二十四五、丈の高い氣の利いた男で、夜は神田邊の法律學校に通つて居た。兄が非職にならぬ前、一年ほど世話をして遣つた緣故で、止むを得ず引取つて、勤が玄關に置くことになつたのである。父親が難かしかつたとかで、家事にはよく馴れて、家の周圍や庭の掃除は痒い處に手の屆くやうに行屆いた。箒を持つのが道樂ではないかと思はれる位であつた。

書生と謂つても、勤やお光には友達のやうであつた。事に寄ると、若い夫婦などより却つて世間のことを知つてゐることがある。お光などは時々夢にも知らぬやうなことを聞かせられて驚くこともあつた。玄關の三疊には、友達が來て、義務だの權利だのと常に喧しい議論をした。夜はいつも十二時過に歸つて來る。『お菊さん、門と戸だけ明けて置いて下さいねえ、』と常に言つた。

夏のある夜、下女室の二疊が厠に近く風通しが惡く、いかにも寢苦しいので、何うせ明いてるのだからとて、お菊は蚊帳と蒲團とを玄關の隣の二疊に持つて來て寢た。二三日は何事もなかつた。すると、ある朝、勤が二階に居ると、お光が上つて來て困つたやうな笑つたやうな顏をして、『餘り虛言らしいと思ふんですがね、お菊がさう言ふんですよ。いくら山口さんだつて、まさか、あんなお菊見たやうなものに、あんな眞似はしやしないだらうと思ふけど……』

今朝玄關と隣の室の襖が五寸程明いてゐた。それが山口が明けたのだとお菊は言つたとお光は語つた。

『怪しからんね、それは——』

『餘りうそらしい、お菊が思ひ違ひをしてるんぢやないかと思ふけれど、……本當だツて言ふんですからねえ。眼が覺めて、ちやんと知つて居たつて言ふんですよ……腹が立つたから、餘程聲を立てて遣らうかと思つたけれど、と言つて居ましたよ。』

『馬鹿な——怪しからんねえ、それは。』

勤は可笑しいやうな淺間しいやうな家を汚されたやうな氣がした。『山口に訊いて見る！』と急に立上つたが、『まア、お止しなさいよ。山口さんだッて、直下に聞かれちや赤面するから、』と頻りにお光が留めるので、一先づ思ひ留つた。

出勤前には、いつも洋服を着る手傳をするのだが、其朝は書生は玄關で靴を磨いて居て出て來なかつた。顔を見られるのを避けるやうにして居た。其夜、勤はお菊に、『男にそんな眞似をされたッて、欺されてはいかんぜ！』と言つて聞かせた。

『大丈夫ですよ。私なんか。』

とお菊も流石に顔を赧くした。

勤は數日前、西さんとイブセンの劇の話をしたことを思出した。家庭といふことから、家の構造、室の位置が家庭の悲劇に大きな關係があるといふことを話した。『何うも日本の室のつくり具合はいかん。僕が聞いた話でも貧乏で一間に寢る爲めに、親子兄妹が通じた話はいくらもある。』こんな話をしたことを思ひ出した。夜遲く長い暗い路を歸つて來る錢もない一書生の姿を浮べても見た。

三十三

硝子戸を隔てゝ、日當りの好い芝草地が見える。梧桐の葉の落盡した梢が、十二月の鮮かに晴れた空に

捺したやうに枝を張つて居ると、其間ををり〳〵鳥の翼がスッと掠めて通つた。がら〳〵と落葉の轉がる音もした。

勤は足に火傷をして、早稻田の醫師の小さい病院に半月以上も居た。寢臺に病床日記が下げてあつて白い敷布の上に、西洋の書籍が五六冊亂雜に置かれてあるが、讀みさして伏せた金緣の本の半面から寢て居る勤の頰に朝日がさした。

白い服を着けた年老つた看護婦が、いつも牛乳を運んで來た。十時には醫師が見舞ひに來る。繃帶を取つて、ガーゼと油紙と脂藥を塗つた布とを除り去ると、足の甲が一面にただれて赤くなつて居る。石炭酸の匂ひがプンと鼻を衝く。

石炭酸で洗ふと、傷が切らるゝやうに烈しく痛んだ。堪らなく顔を蹙めたり聲を立たりすると、『大きな體をして、子供のやうぢやな、』などと醫師は笑つた。

傍にはいつも誰か來て居た。兄とお三輪とお光と家の書生とが交る交る看護した。室の傍の二疊の疊に角火鉢と炭取と茶器と見舞の菓子折とがあつて、鐵瓶は常に湯氣を吹いて居た。病院の賄がまづいので、兄夫婦は午に晩にいろ〳〵なものをつくつて持つて來て呉れる。肴屋が好い鮪を持つて居たと言つては小皿に一人前さし身に作らせて來たり、饂飩が好きだからとて瀨戸引の小鍋に湯氣の立つのを風呂敷に包んで來たりする。林檎だの柿だの蜜柑だの錢もないのによく買つて來ては袂から出した。

夜は遲くまでいろ〳〵な話をして行く。お三輪の笑聲も時々聞えた。

醫師も何うかすると、夜など一杯機嫌で話に來ることがあつた。もう五十をとうに越して居たが、病院を經營した話や、此處に開業した二十年前のことや、『醫は仁術なり』といふ古めかしい意見などを語つて聞かせた。『世間の人は醫師が病氣を治すと思つて居るのは間違ぢや、治すのではない、惡くならないやうにするのぢや、どんな豪い博士だとか何とか言つたつて、皆なさうぢや、醫師も神さまぢやないでナア、』と言つて機嫌よく笑つた。印刷した小冊子を置いて行つたのを後で見ると、醫師としての古めかしい意見が拙い漢文調で豪さうに書いてあつた。この醫師には、房州生れの下婢上りの若い妾があつて、夜など何うかすると、奥で調子はづれの三味線の音がしたり、拙い義太夫を唸る聲が聞えたりした。看護婦と代診と駈落した話も勤は聞いて知つて居る。

お光は丸髷に結つて、小紋の縮緬の羽織を着て、咲子を伴れて朝ごとに遣つて來た。廊下を小刻に歩く足音と、咲子の無邪氣に何か饒舌つて來るのとで勤にはすぐ分る。咲子は廻らぬ舌で、『父樣、火傷、あんよ。』

お光はいつも新聞と手紙とを寢臺の上に置いた。ある朝、その中に女の名の手紙が一通交つて居た。この手紙は二月前から一週間に一度位づゝ來る。處は神戸、名は吉江てる子。勤が返事を出して、將來文學上の相談相手になるといふことを諾してからは、てる子といつも名ばかりを書いてよこした。

勤が讀終つて、それを傍に置くと、お光は覗くやうにして、『また、てる子さんから參りましたね、』と笑つた。勤はいつも細君のそれを讀むのに任せて置く。

お光は火鉢の前で、膝の上に其の長いすら〳〵と達者に書いた手紙を展げて低頭いて熱心に讀んだ。勤は其顏と頰と丸髷と手紙とを何のことなしにぢつと見詰めた。室の中を咲子がちよこちよこと眼まぐるしく歩いて、時々母親の傍に寄つて來る。

『かあちやん、何ちてるの？』

と幾度か訊ねる。

長い手紙を丸めて、封筒に入れて、寢臺の上にソッと返した。勤はもう向うむきになつて、芝草地の向うの藁葺家を見て居た。引窓から細く煙が颺る。

『來年になると、出て來るつて書いてありますね。』

『むゝ。』

勤は取合はなかた。

てる子の噂は此までも隨分出た。家庭から性質、年齢などをあれのこれのと話し合つた。容色の話がことに話題に上つた。『容色は何うだか知れませんけど、それは屹度ハイカラな人ですよ、』とお光は言つたが、時には、『けれどかう熱心に文學などをやらうといふ人だから、存外容色の惡い人かも知れません

ねえ。』

またある時はかうした話もした。

『今の女はすつかり變つて了つたね――。』

と勤が言ふと、

『それはもう何うしても……』

『お前の娘で居る時分にはこんな娘を見たくつても見られやしなかつた。』

『さうですねえ、本當に。』

『この手紙を讀んで御覽、實によく書いてあるぢやないか。自分の心がすつかり出てゐる。まだ逢つたこともない人に、かういふ手紙を書くなんて、我々時代にはなかつたことだ。』

『さうですねえ。……本當に、此頃の娘は路を歩いて居ても、私、吃驚する位ですもの、丸で男のやうですねえ、此頃は。』

『日本も進歩した！』と勤はさも感じたやうに、『昔の娘のやうに家庭と子供にばかり齷齪してるやうでは爲方がないからねえ。それに女としてもつまらない話だ。亭主が何をしやうが、何んなことを考へて居ようが、そんなことは丸でお構なしで、襁褓の世話ばかりして居ちや餘り張合がないからねえ。これから、日本にも本當の女が出來る。本當の意味で夫を助けたり女の本分を十分に出したりする女が出

來る。好いことだ。』

『さういふと、本當にさうですねえ、私などつまらなかつた。』

てる子から手紙が來る度にかういふ話が二人の間に常に交換された。此間小包で、神戸名物の茶の入つた菊水の紋の白く草色の地に出て居る菓子を送つて來た時にも、長火鉢に相對して坐つて、茶を淹れて食ひながら同じやうな話をした。けれど今日は何も言はなかつた。杓杞の紅い實が硝子戸を透して見えた。

見舞客は可也多かつた。社の編輯の人々も來た。自轉車を門前に乘捨てゝ案内を乞ふものもあれば、俥を奥の病室の入口まで曳込ませるものもある。新形の脊廣を着たのは實業雜誌の主筆で、金緣の眼鏡を懸けて頭を丁寧に分けたのは編輯長次席であつた。醫師は、『貴郎の處には、いろ〳〵なお客樣が澤山來ますな、』などと言つた。山手の小さい病院ではかうした見舞客はめづらしいと見える。

親友の誰彼も驚いて音信(おとづ)れて來た。西は火傷の原因を聞いて、『君はそゝつかしいからな、』と笑つた。田邊は丁度鎌倉から上京して居たので、七日目に來て半日以上も話して行つた。相變らず元氣で、輕い鋭い洒落やら皮肉やらが口を衝いて出る。

『君、あの原稿は何處でもフイさ。大阪でも返して來たよ。けれど折角書いたものを破つて了ふのもつまらないから、まア爲方がない、筐底に深く藏して置くといふ始末だよ。一體『運命論者』なんて名を

つけたから惡いんだ。』

こんなことを言つて笑つた。

『戀と言ふものは可笑なもんだ。』と田邊は始めた。『戀が消えなければ、夫婦の愛情は起らないねえ、君。僕は此頃つくづく思ふよ。妻と兒と自分と、もう何うなつても離れられない紐で縛り附けられてある。僕はこれで隨分癇癪黨だから、女房の横面位張り兼ねないけれど、それでも矢張變な淡い愛情があることは否まれないねえ。不思議なもんだよ、ねえ君。』

『僕は又此頃こんな風に思ふね、』と勤は考へて、『青年時代には頭でばかり生きてる。肉體なんぞ何うでも好いといふ風がある。戀してる間は確かにさうだつたねえ。お互ひに心の滿足ばかりを趁つて居た。けれども今ぢやもうさうぢやない。肉體が中心になつて來たやうな氣がするよ。肉體が中心になると、もう頭が餘り動搖しない。青年時代を例へて見れば、頭でつかちの、體の瘦せた畸形兒のやうなものだ。』

『本當にさうだ。夫婦の關係もさういふ風だねえ。』と田邊は言つて眉を昂げて、『だから一歩突込んで考へて見ると、夫婦の淡い愛情は動物の愛情に近い。心よりも肉で堅く結び附けられてある。殊に、女がさうだねえ。男の方ではいくら肉が中心になりかけて來ても、まだ心が動く、頭が動く。動物だけでは、何うしても生きて居られない。けれど女は平氣だ。動物結構で御座いッて言つて、のんきに生きてる。兒に對する愛情などを觀察して見てもすぐ分るねえ君。先生方の愛情は盲目的だからねえ。飽まで

肉體的だからねえ。』

『そこが性の違ひだ！』

と勤は心から感じたやうに言つた。

『男は種を蒔く、女はそれを育てる。要するに平凡なる眞理さ。人間あつてから常に繰返された事實に過ぎないさ。右に推して見たつて左に推して見たつて、この事實が何うなるものぢやない。これを思ふと、僕は厭世ならざるを得んね。』

と田邊は例の思想を持出した。勤もそれからそれへと熱心に語つた。

病院の半月は勤の混亂した思想にある一種の沈靜を與へた。のどかな小春日和は長く續いた。

三十四

拜啓益々御機嫌麗はしくわたらせられ候御由奉賀上候、御怪我も御退院後益々御快癒の趣何よりも嬉しく存候、先日は心なしにも面倒なることを御相談申上げ候ひしに、御病後にも拘らず、今朝御芳書賜はり、謹で拜見仕候、態々女子大學まで御足勞、いろ〳〵御世話下され候ことまことに身に餘る恩惠と唯々感謝致すより外に言葉もこれなく候、來年四月まで此地に留り學事にいそしみ候方得策との御意見もよく解り申し候へども、小女は一日も早く御地に上り、朝夕御元にて御教へを蒙り度く、そ

れに此學校は御存じのミッションスクールとて、小說を繙き居候ふても舍監など何彼と喧しく申し、とても筆執り候暇など無御座、小女のためにも不爲のやう思はれ申候、父母もやう〳〵心解け、文學に携はり候ことをも上京をも許し吳れ候今の際、いたづらにかく暮し候よりは、一刻も早く御地に上り、勉强仕度と存候、女子大學は學期の初めならでは入學相許さずとのことに候はゞ、それまでは獨學致してもよろしく、よき補習學校有之候はゞ、一月二月通ふもあしからじと存候、さは申し候へども、師の君にして不得策なりと思召候はゞ、尙暫く當校に留り申すべく、猶御意見今一度御洩し下されたく候、

小女は五年を學の窓にありながら、何も出來ぬつまらぬ女にて、女子大學の英語科などには、とても入學覺束なきことと存候、止むなくば、豫科になりと入學致し勉强仕度覺悟、父母は文學を修むるにしても、普通學を今少し修め候方得策なるべくと申候ふが、いかに候ふべき、無論、國語などの力も不十分にて文章の言語なども多く知り申さず、此方も猶十分に勉强致さではと存じ候、兎に角、聖書のみ强ひて讀ませられ、集會、祈禱會などにのみ出席を强ひられ、文學修養の寸暇なき此の學校は一刻も早く去り度くと存候、今一度御指圖賜はり度候、

この二十三日頃よりは、冬休暇に相成申すべく、御たよりは田舍の方に御つかはし被下度候、尾の道より十三里も山の奥、雪積りて軒には氷柱長く、谷川の瀨の音のみ高く聞え候ところに有之、唯々樂

しきは、古き思ひ出多き家に、火燵圍みて父母と物語りすることに御座候、來ん春の御目もじいかに嬉しく候ふべき先づはあら〳〵かしこ

十二月十七日　　てる子

先生おもと

末ながら奥樣によろしく御傳へ被下度候

勤は今から一週間ほど前、てる子の爲めに、入學手續を聞きに女子大學に行つたことを思ひ出した。まだ脚が十分に治らぬので、車に乘つて行つた。其處には幹事に知人がゐて、萬事詳しく敎へて吳れた。大きな講堂からはオルガンの音がして、落葉した櫻の樹の處々にある廣場には、白いリボンや菫色の袴などがちらほら歩いて居た。門を出て廣い目白の通を行くと、軒を並べた雜貨店に夕日がパッと照つて、袴を長く紫の風呂敷包を抱へた脊のすらりとした女學生の影を長く前に曳いた。

三十五

押詰つて十二月も三十日、門松を買つて來て立てるやら、お供餅の飾付をして三寶に載せるやら、六疊の居間は、注連、ゆづり葉、ゴマメ、昆布などの散亂れた中に、手傳に來た兄が、時々輕い戲談を言ひながら、半紙を折つて、小注連を切つて居ると、勤と書生とは、長火鉢の傍で頻りにのし餅に庖丁を

當てゝ居た。四角な餅が見る〳〵莫蓙の上に溜つて行つた。

門が明いて、續いて玄關のくゞり戸が勇しく明いたと思ふと、

『郵便！』といふ聲がして、ドサリと重い物を置いた音がした。

立つて行つた書生はやがて大きな油紙包と小包受取證とを持つて入つて來た。勤は油紙包を鳥渡手に取つて見たが、默つて傍に置いて、次の間の机の硯箱から認印をさがして、それを受取證に捺して、書生に渡した。元の席に戻つた時には、もう細君が其包をひつくりかへして見て居た。

『てる子さんから、また何か送つて來ましたね。』

とお光は笑つて、『何んでせう、いやにぶかぶかと柔かな物ね。』

『どれ、お見せなさい、奥さん、』と書生は傍から手に取つて、暫く押して見て居たが、『何うも鳥渡見當がつきませんね、食ふものぢやないらしいけれど……』

『どれ、己が當てゝ見よう。』

と兄は傍から手を出した。

で、其小包を上にしたり下にしたり、觸つて見たり、押して見たり、ものゝ十分もいぢくり廻して考へて居たが、『さうさな、何うも解らんな……或は海岸の名產の何か海苔とか和布とかさういふものかも知れんが、何うもそれにしては、少し柔か過ぎるやうだな……手觸りでは、何か綿のやうにも思はれるけれど……眞綿ぢやあるまいな、まさか。』

『眞綿、眞綿、確かに眞綿ですよ、先生。』

と書生は今一度兄の手から取つて觸つて見て言つた。

『だつて、眞綿を送つて寄越すといふのも變ぢやないか……國は何か生糸でも澤山出來る處かえ？』

『いや、そんな話は聞かないが……』今度は包が勤の手に渡つた。

『眞綿をわざ〳〵送つてよこすつて言ふことはないでせう、……お祝とか何とかならさういふこともあるけれど……』とお光は傍から口を挿れて、『てる子さんのことですもの、屹度何かハイカラなものに違ひないですよ。そんなことを言つて居ずに、早く明けて御覽なさいな！』

で、勤は餅切庖丁で、小包を絡つた麻糸をばらぶ〳〵と切り放した。兄もお光も書生も皆な眼を其包に注いだ。中から何が出て來るか、一座の人々の好奇心を惹くに十分であつた。

油紙を剥ぐと、中は丁寧に新聞紙で二重に包んであつて、思ひもかけず手づから編んだ毛糸のシャツが二箇出て來た。

『これは素敵ですな。』

書生は眼を圓くした。

勤の顔にも兄の顔にも微笑がそれとなく湛へられた。成程、ハイカラな女だといふ思ひが誰の胸にも

あつた。お光は逸早く手に取つてひろげて見た。一つは大きく一つは小さく、手首の處の膨れて居るのと、居ないのと――

『自分で編んだんでせうか。』

と、暫くして、お光は誰に訊くともなく言つた。

『さうですとも……自分で編んだんですとも、なかく〳〵えらい女ですねえ。』

書生はかう言つて手に取つて見た。

『これだけ編むには中々大變だ！』

と兄は切つた小注連を輪飾に挿しながら言ふ。

書生は二箇のシャツを引くりかへして頻りに展げて居たが、『ひよつとすると、此の小さい方は、奥さんのゝつもりでよこしたのか知れませんよ。』

『私に？』

とお光は眼を睜つて、小さい方を取つてまた展げて見て、『私に？　私がこんなのを着たら、それこそ可笑しいでせう。』

『可笑しいもんですか、今の若い奥さんは皆な着て居ますよ。』

『まさか、ねえ、兄さん、私によこしたんぢやありませんねえ。』

と言ひ懸けると、兄は笑つて、

『さうさな、お前によこしたんぢやないだらう。逢つたことがないんで、大きい人か小さい人か分らんから、二つ拵へてよこしたんだらう。』

『でも、先生の寫眞は、雜誌か何かで見たことがあるんでせう？』

『それはあるだらうがね……』

『屹度、さうですよ、それに違ひないですよ。神戸のミッションスクールあたりに居る女ですもの、その位なハイカラなことは屹度しますよ。』

『さうですかしら。』

とお光は首を傾けた。

少時して、『それでも、器用にまア、よくこんなに纏まりましたねえ。十八や九で、こんなに見事に……。餘程、編物が達者だと見えますのねえ。』

『えゝえゝあそこらの學校の生徒は、こんなものはわけなく拵へるでせう。』と書生は笑ひかけて、『冬休暇に先生に上げようと思つて、屹度一生懸命に編んだんですよ。』

『さうですよ屹度。』

とお光も笑つた。

『毛糸のシャツは暖かくつて好い。これを着ると、メリヤスのなどは寒くつて着て居られやしない！』

兄は眞面目な顏に一種の笑を湛へて、『そして、本當に遣つて來るのか？』

『え、來年は早々來るんですつて、』と勤の答へるのも待たずに、傍からお光が訴へるやうな調子でいふ。

『來て、何うするんだね？』

『女子大學の寄宿にでも入れて、宅には日曜にでも通つて來るつて言ふやうにしやうと思ふんだがね。』と勤は言淀んで、『けども……寄宿舍生活には倦きて、もうつくぐ〳〵厭だつて言つてゐるから、何處か好い處があつたらとも思つても居るんだが……兄さん、何處か好いしつかりした後家さんか何かで世話して呉れる家はないだらうか。』

『さうさな……』

別に思當る處もないといふ顏を兄はすると、お光は、

『何うせ、家では子供がやかましくつて、勉強などしてられやしませんしね、私は私で、この體ですから、家にはとても居られないんですから……。』

『それはさうとも。』

『何處か好い處があつたら、心掛けて置いて下さい、』と勤が賴むと、

『よし、よし』と兄は點頭いた。

兄の職はまだ見當らなかつた。勤は原稿を書いて毎月いくらかづゝ手傳つて居た。お光は來年の二月が三人目の兒の臨月である。

三十六

冬休暇に勤は小旅行をした。

一月になつてから四日目、かれは信越線の汽車で、雪の深い信濃へと志して居た。かれの前には榛名の群山が裾を長く曳いて、前橋市の白壁や半鐘臺や煙突を前景にした赤城の大きな姿は、既に既に後になつて了つた。榛名の右の潤(うる)い處は利根川の流れ落ちる谷で、其奥の越後境の山は、アルプスの山の繪葉書を見るやうに、美しく白く雪に光つた。

汽車は烏川の小さい鐵橋を轟と音して渡つて、今度は碓氷川の深く削られた左岸の臺地へと懸る。桑畑の中を通つて居るかと思ふと、竹藪と白壁と土藏と貧しい百姓の家族の襤褸を散して日向ぼつこをして居る藁葺家とを掠めるやうにして駛つて行く。踏切小屋からよぼ〳〵した頰冠の爺が白い旗を出して居るのもあつた。川を隔てゝ眠つたやうな田舍町がをりをり見えるが、此方の岸から彼方の岸に通ふ橋の上には、吹荒るゝ風に逆つて、俥が一臺、客は吹飛ばされぬやうにと、低頭いて帽子をしつかりと押へ

て居る。

汽車の窓には煤烟と砂埃とが風に煽られて烈しく當つた。耳を欹てると、汽車の駛る音と川の瀨の鳴る音と風の吹暴れる音とが一緒になつて、さながら物の吼えるやうに聞えた。

午後三時過の日影は、左の窓から車内一杯にさし渡つて居るが、湯タンポも無い三等室は、ぞくぐゝと身ぶるひの出るほどに寒かつた。汚い手拭で頰冠をした百姓と、メリンスの赤い帶を緊めたあかぎれだらけの田舍娘、これでは好奇心を惹く價値もない。勤は讀み耽つた新年の雜誌を伏せて、ふと見るともなしに前を見ると、雪で眞白になつた淺間山が壓するやうに眼前に聳えて居た。

羊毛のやうな白い煙が丸で繪のやうに頂から靡く。

これから訪ねようとする友達は、其山の麓に住んで居るのだと思つたが、其考はすぐ變つて、今度は遠い谷合の小さな町が眼に浮んだ。谷川の瀨の音が木枯のやうに聞えて、軒を並べた家々には雪が白く積つて居る。てる子は今年の年始狀に、その山の中の田舍町を寫眞版にしたのを勤に寄せた。

版が鮮明でないので、餘りよくは解らぬが、町を圍んで居るのは可也高い山で、その入口とも覺しき處に小さな橋があつて柳が二三株靡いて居た。町の家並の中央の處に紫インキで線を引いて、『これが私の家ですの、』とてる子は書いた。

柔しい暖かい情緒が勤の胸に萠して來た。氣が附くと、こんな思は、もう久しくかれの心に起つたことはなかつた。かうした思ひの起るのは何だか自分ではないやうな氣がする。遠い昔の反響のやうに思はれた。

雪に光る淺間山は汽車の駛るにつれて、左に見えたり右に見えたりした。碓氷川の瀨は白く碎けて、風はをり〳〵ドッと車窓に砂埃を吹きつけた。勤は何年にも詠んだことのない歌を考へて、隱袋から手帳を出した。友達の家に着いたら、淺間山の繪葉書を一枚貰つて、歌を書いて、遠い山中のてる子に贈らうと思つたのである。

勤は焦茶色の外套に黑の脊廣、てる子の送つて呉れた大きな毛糸のシャツを下に着て居た。

三十七

裏で蕗の薹をさがして居た時から、腹の具合が少し變だつた。產れるのかも知れぬとお光は思つたが、それなりまた靜まつて、夕飯の準備を手傳ふにもさして大儀には思はれなかつた。三人目にもなれば、經驗で略々樣子が知れて、さう騷ぐにも當らないといふ落着いた氣になる。

其夜は遲くまで勤は二階で筆を執つて居た。下りて來たのはもう彼是十二時に近かつた。お光は床に入つて居る。

『何うだ、催して來たやうな樣子かね？』と、聞くと、『さうですねえ、まだよく解りませんけれど、

大丈夫でせう。明日の朝位までは生れるやうなことはないでせう。』

『でも、夜中に起されるとつらいから、今の中、山口に、産婆にさう言つて來て、居て貰はうか。』

『大丈夫ですよ。』

『まだ痛みはしないのか。』

『少しは痛みますけれど、まだこんなことでは中々生れやしませんから。』

お光は平氣でゐる。

勤は行火で暖めてある床の中にもぐりながら、枕元にランプを置いて、いつも習慣になつて居る讀みさしの書を十頁ほど飜して見たが、頭も眼も勞れてゐるので、止して、

『お前もお産は上手になつたな。』

『えゝ。』

『咲子の時はつらかつた。』

『本當に咲子の時には、樣子が解りませんし、手はなし、あんなに困つたことはありませんねえ。』

『邦雄の時も隨分長く苦んだねえ。』

『えゝ、あの時は……無理をしたんですもの。生れる半月前に、車になど乘つたんですもの。あの時は初めからいくらか重いつて言ふことが解つて居ました。』

『今度は大丈夫か。』

『えゝ、今度はお腹の兒もしつかりしてますよ。初めから邦雄の時に懲りて、ちやんと養生をして置きましたから。』

いつとなく話が變る。

『てる子さん、もう來るんでせう。』

『もう來るかも知れないよ。』

『でも此間の手紙では、まだ急なこともないぢやありませんか。』

『よく解らんけれどねえ、』と勤は鳥渡言葉を途切らせて、『屹度田舍からすぐ來るんだらうと思ふけども、若い娘のことだし、一人手放してはよこされないから、それで屹度後れるんだよ。丁度今は田舍の正月だからね……母さんか誰か連れて來るに違ひないから。』

『さうでせうねえ屹度、……』かう言つて白い顏を浮ぶやうに薄暗い闇から見せて、

『何んな方でせうねえ、早く逢つて見たいやうな氣もしますよ。私のやうなものは、お友達になれるかしら？』

『なれるとも……なれなくつてもなつて貰ふさ。お前には友達といふものがないから丁度好い。』

『何んな方でせう。屹度別嬪さんよ。』

勤は默つて了つた。

やがていつものやうに、行火を床から出して、ランプを行燈に點け更へて、便所に行つて來て再び床に入つたと思ふと間もなく鼾が高く聞ぇ出した。お光は腹が痛むので、山手の夜をひとりさびしく目覺めて居た。

これはもう愈々生れると思つた時、明方の四時が鳴つた。出來るだけ自分で準備をして置かうとお光は蒲團を四疊半の間にソッと引張つて來て、押入から兼ねて揃へて置いた一切の產の道具を出して、今一度改めて見て、六枚折の古屛風を立廻して居ると、眼が覺めた勤は六疊で、

『お光、お光。』

傍に行つて、『もう生れさうですから、』と言ふと、勤は眼を摩りながら、

『何だ、もうお前準備をしたのか。』

『えゝ。』

『それぢや、もうすぐ山口を起して產婆を迎へにやらう。』

と起上つて四布蒲團の上にかけた着物を着にかゝる。

『それぢや、邦雄をお賴みしますよ。』

『いゝとも。』

五時には、男の兒の他は家內中皆な起きて居た。竈の前に蹲踞(しゃがん)だお菊の顏は火に赤く、早起の咲子は其傍をちよこちよこして居た。勤はガラ〳〵と前の戸を繰ると、冷めたい新しい空氣は流るゝやうに室內に入つて來た。もう戸外は薄明るく、晴れた空には黎明の光が交つた。

產室では、お光は白い顏だけ出して、搔卷に包まれて寢て居たが、勤が行つて見ると、

『お婆さん、まだ……』

『もう來る。』

邦雄が六疊で眼を覺まして、

『かァちやん、かァちやん。』

勤が行つて着物を着せて遣らうとすると、

『かァちやん、かァちやん』と言つて泣く、まだ漸く數へ年の三歲、母の手は離れ難いのである。

詮方なく、產室に伴れて行つて、

『それ、かァちやん、此處にねんねしてゐる。居たらう、かァちやん……。』

お光が笑つて見せると、男の兒はそれで納得して、自由になつて、父親に着物を着せて貰ふ。『邦雄は好い男(こ)だな、かァちやんが今好いねんねを生んで遣ると……。』

『ねんね。』

と男の兒は不思議な顏をする。朝に晩にまだ乳を離さずに居たので、いきなり傍に寄つて母の乳を探る。

『今日はかァちやんキーキがわるいから……彼方へ行つて居よゝね……好い兒だ、邦雄は。よく聞き分けるね、』とすかすと、

『かァ、キーキ。』

とそれも聞きわけて、父親に連れられて、六疊に行く。

夜は全く明け離れた。

隣の車井戸の音がする。鳥が啼く。何處か遠くで汽笛の鳴るのが聞える。裏の藪に霜が白く置いたのが見える。勝手では今火を引いたと見えて、烟が一杯に滿ちて、餘りが六疊まで流れ込んで來る。

『飯が出來たら、すぐあとで湯を沸かすんだよ。』

と勤は顏を勝手に出して言つた。

其處にお三輪が書生の山口と一緒に呼吸を切つて飛んで來た。

續いて產婆も來た。

其頃丁度二臺の車が瀨の音の高い谷川の緣を縫つて、郡ざかひの小さい峠に懸りかけて居た。

燃えるやうな黎明の空が谷の半を染て、山と山と重り合つた間から、朝日の昇るのももう程がないと

思はれる。山は總て黑かつた。

地には雪が薄く蔽つた。

此の二臺の車は、今から一時間ほど前、まだ曉の眼から覺めぬ寂とした田舍町の闇の中から發つて來た。曉近く、暗い町の家並に、一ところ燈火の明く洩れた大きな家があつて、くゞり戸の前にこの二臺の車は久しく微暗く置かれてあつたが、やがて人々のがやゞゝと騷ぐ音がして、提燈の光が彼方此方に動いた。

『もう早く發たんと三番には間に合はんけえ。』

『路が惡いでな。』

語り合ふ聲が寒さに震へる。空は晴れて曉の明星がキラキラ光つた。やがて二重外套に毛の襟卷をした此家の五十位の主が出て來て、一臺の車に乘ると、續いてコートを着て庇髪に結つた中脊の娘が他の一臺に乘つた。雇人や下婢が手廻りの物を入れた鞄や信玄袋を運んで來て、車の蹴込に載せると、車夫は厚い毛布をかけて梶棒を上げた。

娘の母も兄も兄の妻も稚い妹も皆其前に並んだ。母が、

『それぢやてるさん、丈夫で。』

『母さん左樣なら、兄さん左樣なら。』

『尾の道でも、神戸でも皆さんに宜しく。』

『後をよく賴むぞ。』

主の聲ははつきりとして居た。車は凍つた地上を動き出した。

『左樣なら。』

『左樣なら……』

『てる姉さん！　御機嫌よう！』と長く曳いた稚い妹の聲が高く聞えた。綱をつけた車はガラガラと勢よく凍つた雪道の上を走つた。振返つて見ると、提燈の光がまだ其處を離れずに……。

混雜した光景の中から、丁度其處だけ切り取つて離して見たやうに、鮮かにてる子の頭に浮んだ。黎明の光が山合から何處となくさして來て、町から一里ほどの村落を離れると、谷川がザァと脚の下に鳴つた。谷の竹藪は雪に伏してゐる。

路傍に低い茅葺屋根の百姓家が一軒あつた。入口の處に立つて居た一人の老爺が、威勢の好い車に眼を睜つて、車の上の人を見て、慌てゝ丁寧に辭儀をした。『町の吉江の孃さん、また修業に行かつしやると見える、』と口に出して言つて、二臺の車の見えなくなるまでぼんやり見送つてゐたが、やがて手を後に廻して裏の方に行つた。

小さい峠の上には、松が一本立つてゐた。其處に來た時、丁度朝日は山と山との間から昇つて、最初

の光を雪を載せた松の梢に送つた。

てる子の顏は晴々しくかゞやいた。

三十八

お七夜の赤飯、お頭つき、祝儀に鰹節をつけて貰つて、產婆は喜んで歸る。勤は自分でも心祝の積で、手傳に來て居るお榮に晩酌の準備をして貰つて居ると、玄關に人の來た氣勢がした。

書生が取次に出たが、すぐ飛んで來て、

『先生、田舍の……』

『來たのか。』

『えゝ。』

『母樣と一緒？』

『いゝえ、父樣らしいです。』

姉のお榮も手を留めて聞いて居る。勤も何處となく胸が騷ぐ。

『通して置き。』

客は導かれて座敷に通つた。其前に、お榮は產室と座敷との間の一枚の扉を慌てゝ閉めた。すぐ茶の

間に行かうとするのを捉へて、お光は、

『誰れ？』と小聲で訊いた。

『そら、此間から話して居た人がいよ〳〵來たんだとさ。』

『さう……』とこれも矢張胸が騷ぐといふ樣子で、

『何んな人……』と聲をはずませて訊く。

『まだ私見ない……』と言つたが、『まァ、お前ぢつとしてお出でよ、血にさわるとわるいよ。』

此方の茶の間では、書生が火鉢に火を入れながら、笑つて、

『先生、素敵ですよ。』

『何が……』

『私の想像した通り。』

と火鉢を運んで行く。

座敷の緣側には、午後四時過の日影がぱッとさしてゐた。霜柱の半ば解けて崩れた踏石の處に、沈丁花が簇り咲いて、匂ひが微かに靜かな空氣に雜つた。石の手水鉢の傍の、南天燭の赤い白い實を、小鳥が常に啄みに來てゐたが、低い枝から手水鉢の上に下りて、をり〳〵行水をすると、其水の動く影が日を帶びて障子に寫る。

八疊の一隅には洋書を入れた大きな本箱があつた。桐の唐机の上に雜誌と新刊書とが半開いたまゝに亂れて居たのを、勤は話しながら直した。客は文晁の山水の幅を懸けた床の間と、蒔繪の重硯箱を唯一つ置いたさびしい違ひ棚とを後にして坐つて、父親と勤とが主に種々の話をした。勤の眼に映つたてる子は美しいと言ふよりも寧ろ引付けられるといふ風であつた。縞お召を着て、襟は白繻子に赤く細かい模樣の浮いたのをして、髮には白いリボンを挿した。飽かず話して居る勤の顏をてる子はをりをり見る。

『丁度家内が產をしましたので、ごたごたして居りまして。』

と話の途切れた時に勤は言ふと、

『それはお目出度い。』

てる子は、『おやまァ、さうですか、』と眼を張る。

話はそれからそれへと續いた。てる子は何處となくそはそはして居た。逢つた時に言ふことをいろいろに考へて來たが、それが少しも口から思ふやうに出なかつた。尾の道から神戸、其處の親類に三日ほど逗留した。其日が長くつて爲方がなかつた。新しい友達を訪問する氣にもなれなかつた。神戸から長い汽車の路、其間にも東京のことばかり思ひつめて、さて芝の旅館から吹荒む西風の黃い埃の中を山手の奥まで來て、今、其願が遂げて、かうした靜かな一室の中に其人と相對した……小鳥の行水をつかふ影がまた障子に動く。

話は段々文學に移る。

『文學といふものは他から見ると、大變派手な面白いやうに思へるかも知れませんが中々むづかしいつらいもので、男でさへうはの空では出來んものですから、まして女は……餘程の決心がなくつては駄目ですから、私は其事はてる子さんに始めてお手紙を頂戴した時から申したんですが。』

『それはもう十分呑込んで居るんですけぇ……何うしても文學でなくてはいかん言うて、これで中々我儘でしてな……一度言ひ出すと、親でも何でも言ふことを聞きませんでな。』と娘を少し顧みるやうに頭を曲げて、微笑を顏に湛へながら、父親はいふ。

『その熱心は好いですけれど……只熱心だけでは爲方がありませんから、そこはよく考へて戴かないと……』

勤は眞面目な調子になつた。

『何うぢや、お前、先生の仰しやることはよく解るぢやらうな。』

『え、よく解つて居ります。』

とてる子は頭を下げた。

父親は娘の病身のこと、稚い頃から神戸に出して寄宿生活をさせたこと、物心が附く頃から文學が好きで筆を手から離さなかつたことなどを話つた。話の順序として、やがて來るべき結婚の話が出る。

『結婚のことに就いては、別にこれといふ希望もありませんし、自由結婚といふことも好いとは思ひますが、今の女學生のやうに墮落して了つては困りますので……其時には先生にも相談して、それでよろしいものなら、私には別に異存もありませんけぇ。』

と父親は存外打解けた意見である。勤は田舍紳士として、非常に開けた人だと思つた。

『何うせ世の中は思ふやうにはなりませんでな……一番係累のないと言ふことが何よりですがな……』と勤の顏を見て、『かうして娘を遠い處に伴れて參るといふことも矢張まゝならぬ浮世ですな。』

こんなことを言つて笑つた。

壁一重隔てた產室では、お光が耳を聳てゝ座敷の會話を聞いて居た。父親の聲、勤の聲、をり〳〵其間に交るやさしい華やかな聲——其聲に何だか美しいハイカラな人がありありと眼に浮ぶやうな氣がした。襖を細目に明けて覗いて見ようとすら思つた位である。勤の錆びた聲とてる子の華やかな聲とが雜り合つて聞えると、思はず顏が熱つて胸の動悸が高くなつて、ついわれ知らずイラ〳〵する。平生お光が人知れず苦勞にして居た自己の缺點——文學の上で夫のさびしさを慰めることの出來ない缺點を、その若い華やかなてる子が滿すかと思ふと、胸が騷いだ。

兒が小さやかな聲を立てゝ泣き出したので、起返つて、乳を含ませようとすると、お榮が其泣聲を聞つけて入つて來た。『別嬪さんだがね、中々』と聞きもせぬのに小聲でお榮は言つた。『それでも、あの娘

さんを親が見ず知らずの東京に出すといふのは解らないねえ。何か譯があるんぢやないかね。』

『わけつて？』

『わけつて別に何でも無いがね……。無闇な人に關係して後で困るやうなことが起りやしないのかしら……。勤さん、あの父樣や何かよく知つてるの？』

『それは手紙で……。』

『それはそんなことはないだらうけれどね、あゝした娘を一人他人の中に手離すといふことが、ちよつと私達には考へられないから……。』と囁くやうに言つたが、『それで、何うするんだらう。今夜泊つて行くんだらうか？』

『それは歸るんでせう。』

『さうかねえ、田舍の人だから、存外平氣で泊つて行く氣で居るかも知れないよ。それだとね、お前蒲團を何うかしなくつちやならないよ。』

『泊つて行きはしますまいよ。まさか。』

『さうかしら。』

『でもね、御飯の準備だけはして下さいよ。』

『それはもうしてるよ。』

とお榮は立つて行く。

膳を運んで來た時には、客は既に歸り支度をして居た。お榮が座敷に來て給仕をした。てる子の恥かしさうに箸を取るのをお榮は見ぬやうにして見た。

障子にさした夕日は消えて、裏の欅の樹が潮のやうに鳴る。『ひどい風ですこと！』膳を引いた後で、てる子が誰に言ふともなく言ふと、

『東京の空ッ風ッて今が一番氣候のわるい時ですから。』

勤がかう引取つて言つた。

兎に角女子大學の方も聞いて遣らう、しつかりした下宿も搜して遣らう、下宿があるまでは取敢へず家に來るが好いといふことに話が決つた。

『奧さんにお目にかゝりませんが、何うぞよろしく仰しやつて頂きますやうに……。』

別れる時、父親が言つた。

『奧さまにもよろしく。』

てる子もかう言つて勤の顏を見る。

勤はてる子の眼を到る處で胸に深く刻んだ。其の複雜した引力に富んだ情の曲折を巧に表はす眼！

其處でも此處でも其眼に邂逅して、其の度毎に自分の心の底のある部分を奪ひ去られるやうな心地がし

た。知らずに父親と話して居ると、いつか其眼が見て居る。心を奪つて居る。何だか其眼はてる子が初めてよこした手紙の中にも、もう既に光つて居たやうにも思はれ、その山の中の田舍町のさうした家庭に生ひ立つたある力が、偶然ながら時機を待ち得て、荒凉とした生活の上にある意味を齎らして來たやうにも感じられた。其眼は確かに勤の戀をした時代の簡單なものではなかつた。節操をのみ女子の寶とした昔の恥を含んだやさしいおとなしい無邪氣なものでもなかつた。さうかと謂つて平凡なる生活に倦んだり疲れたりするやうなものでもなかつた。

勤は玄關まで送つて出た。

てる子は下駄を穿いても、コートを着なかつた。勤が寒いからと言つて勸めても矢張其儘にして居た。父親に、『折角先生がさう仰しやるんだから、』と言はれて始めて小さくなつて着た。コートの裏地は派手な薄紫の綸子であつた。

あとで勤はお光に、

『お前によろしくつて言つて行つたよ。』

『別嬪さんですッてね。』

『何ァに。』

少時默つて居た。やがて、

『そして、何うなさるの、宅に置くの？』

『宅に置きはしないが……下宿の定まるまでは置いて遣つても好いつて言つてやつた。父樣は話を定めて一刻も早く國に歸りたいつて言つてたから……。』と少し考へて、『何うだらう、姉さん、置いて呉れないかしら。』

『姉さん？……何うですかねえ。』

お榮が入つて來たので其話をして、『秀ちやんの勉强の復習などして貰ふにも都合が好いと思ふが。』と言ふと、姉は考へて、『さうねえ、まァ、少し考へて見るよ。好ければ好いけど悪かつたりすると困るから。』

其夜、床についてから、勤は遲く迄眠らなかつた。傍には咲子が可愛い顏をして寢て居た。夫と妻と子との關係が繰返し繰返し頭腦に上つて來る。『子が出來ると男女の關係が全く肉の關係になる、』と言つた田邊の言葉が思ひ出される。てる子に對して一種の感じを經驗したといふこと――そのことが更に夫妻と子との複雜した關係を明かに勤の前に展げて見せた。

三十九

翌日、勤はてる子親子を芝の旅館に訪ねた。

その翌日、夕暮に勤が社から歸つて來ると、てる子は玄關から晴々した顏を出した。

道具一切を車二臺に載せて、その午後に移つて來たのであつた。產室に行くと、『今日、てる子さん、引越して入らしつてね、父さんが今一度上るんですけれど、國が選擧で手放されないから失禮するッて……こんなものを頂戴しましたよ。』とお光は土產物を示した。

『父樣は？』とてる子に聞くと、

『今夜の六時の急行で。』と莞爾する。

子供等が皆すぐ懷いて、煩さいと思ふ位其袖やら膝やらにまつはつた。男の兒をかゝへるやうに抱いて、首を傾けて、他愛のない片言を聞くやうにして、そしてをり〳〵眼で勤の方を見る。

勤の晩餐の給仕をするお榮の傍に坐つて、快活な調子で、てる子は話をした。

聲と言ひ、態度といひ、表情といひ、總てが生々として居た。倦み果てた、疲れ果てた家の空氣が俄かに一洗されて、洋燈まで明るくなつたやうな氣がした。

書生が學校から歸つて來た時は、もう十一時を過ぎて居た。其巷路はいつも樹の影が闇に蔽ひ冠さつて暗かつた。家々から微かな明りさへ見えぬのが常であつた。であるのに、其夜は鍵の手の路を曲つた處から、其處等と思ふあたりに明りがぱつとさし渡つて、ゆづり葉の廣い葉裏が照りかゞやいて、門に近づくと、笑聲と話とが賑かに高窓から洩れて聞えた。

座敷の奥の二疊の間が物置になつて居た。彼處では餘りにむさくろしい、產室が明いたら、其處を貴孃の室にして上げるから、それまで座敷の八疊に机を置くやうにと言つたが、却つて其の狹い二疊の方が物を考へたり何かするには氣が散らなくつて好いといふので、翌日出勤前に勤はお榮と一緒に、古葛籠や古屏風や長持や古雜誌の束ねたのなどを片附けて使ひ古した机に有り合せの更紗の布を被けて、重硯の一つを持つて來て貸した。本箱も二箇ほどあけて遣つた。

其日歸つてから、勤が其室に入つて見ると、あたりはすつかり片附いて本箱には愛讀書が綺麗に並べられ、着物を入れた大きな支那鞄は其傍に積重ねられた。今まで讀んで居た一葉全集に、絹糸で編んだ枝折が斜に置かれてあつて、一輪挿にさした沈丁花が强く狹い室に匂つた。

座敷と居間とを隔てた產室は暗く寒かつた。花もなかつた。二三日來の混雜で、少し血が頭に上つたかして、何うも頭痛がして爲方がないと言つて、お光は鉢卷をして居た。終日光線の何處からも入らない袋のやうな室で、枕元にはサフランを飲んだ茶碗が盆に載せて置いてあつた。生れた兒は小さい蒲團に小さい枕をして、ねんねこと毛布とを被けて寢て居た。何だか昨日あたりから乳が出なくなつたと言つて居る。

勤は產室を出て二階に上つた。六疊の書齋には書藉や雜誌や反古が一杯になつて散らばつて居た。机の上には今朝早く起きて書き懸けた原稿が半ば黑く塗り消されたまゝになつてひろげてある。勤は筆を執

る前に長大息をついた。

四十

隣近所でも二階の家に若い女學生の來たのを話の種にした。何うかすると琴の音などがする。古いお光の琴を引出して、小半日懸つて糸を緊めて、むづかしい曲をすら〳〵とてる子は鳴らした。

裏の畑へ行つて、なづ菜などを摘んで居ることもあつた。白い顔を薄暮の色の中に浮かせて、小聲で讃美歌をうたつて居ることもあつた。時には井戸端へ行つて野菜物を洗ふお菊の傍に立つて、面白半分に水など汲んで遣つた。

さうかと思ふと、一日青い顔をして、二疊に引籠つて讀書をするのでもなく、筆を執るのでもなく、机に凭り懸つて物思はしさうな樣子をして居ることがある。顔が非常に綺麗に見える時と非常に醜く見える時とある。そんな時に、お光が、『てる子さん、何うかして？』と訊くと、

『私、變でせう。何うかすると、私厭な氣分になりますのよ。』

二疊に居ない時には、毛糸の玉を袂から出して、編棒を梭のやうに細い指で動かして、見る〳〵子供の涎懸けや襟懸などを拵へる。

無邪氣に書生と話をして居ることもあつた。朝、書生が庭を掃いて居ると、縁側に腰を掛けて、編み

懸けた編棒の手を留めずに、いろ〳〵故郷の話や學校の寄宿舍の話などをする。夜など、玄關の傍の室に行つて一時間も熱心に何か話を續けて居ることもあつた。と、お榮が、『今の娘は丸で私達の時代とは違つて來ましたねえ。』と、一種の笑ひを顔に湛へて、それとなく諷した。

『もう、女も恥かしがつてばかりは居なくなりましたから。』

勤は定つて、かういふ返事をしたが、矢張餘り好い心地はしないと見えて、別に用事もないのに、『てる子さん、ちよつと。』などと呼んで、今日持つて來た雜誌などを見せる。

隣りの小學校に通ふ女教師とも間もなく懇意になつた。始めは日曜など裏の木戸の處に立つて、二人は話をしたが、二三日經つと、今迄お光の處には來たことのない娘が、庭から敷石傳ひに、二疊の室の前の縁側に來てお饒舌をして行く。

『てる子さん、中々交際がお上手ですね。』と、もう徐々起きられるやうになつたお光が、隣の娘の歸つて行く後姿を見ながら言ふと、

『さう？　何うしてですの奥さん？』

『だつて、……すぐあなたはお友達が出來ますもの。』

『私はお友達にならうなんて思はないんですけれど、雜誌を貸してツて仰しやるものですから。』

『お友達が澤山出來る方が好いのよ。私などお友達といふものがなくつて、本當に淋しくて爲方があ

りませんよ。』

お光とてる子はこんな風にもう隔てを置かなくなつた。

てる子はまたよく出歩いた。通りの小間物屋、坂下の雜誌店、西洋菓子を賣る店などに其姿を人々は見懸けた。勤が朝夕の行きかへりにも處々で逢ふことがある。雨の降る中を蛇の目傘に高い足駄で縫ふやうにして歩いて行く後から、いきなり聲を懸けると、驚いたやうに振返つて、『まア、先生』と言つて莞爾する。

『何處へ行つたの？』

『ちよつと手紙を出しに……。』

四十一

書生とてる子と話をすると、お菊は變な顔をして居る。あの事があつてから、離れた心が合ふやうになつて、不思議にもお菊は山口にやさしい素振を見せた。下駄の鼻緒などを立てゝよく世話してやつた。山口は山口で、『お菊さん、本當によく働きますねえ。』と同情の深い言葉を懸けた。その合つた心が、てる子が來てからまた離れた。

勝手元に來ても、いつもツンケンとして居る。『私など何うせ相手になりませんよ。』といふやうな菅な

い素振を見せる。山口は笑つて居た。

夜は賑かであつた。兄がよく遊びに來た。てる子と兄と初對面の挨拶をしてから日數がかなり經つた。兄が來ると、戯談を言つて屹度皆んなを笑はせる。八時には子供が皆な寢て了ふので、それからきまつて茶を淹れて燒芋だの菓子などを食ふ。八時には勤が、『てる子さん、お茶がはひつたから、來ませんか、』と呼ぶ。

てる子は二疊から出て來る。輕い足音がして、仕切の襖がすうと明いて、闇から白い顔が出る。髪の後姿を見せて、しやがんだ儘襖を閉てゝ、さて座に就いて丁寧に兄に挨拶した。書生も傍に來て坐つて居る。お菊もお光の後に雜巾などを刺しながら見て居る。輕い明るい言葉が流るゝやうに人々の口から出て樂しげな無邪氣な笑聲が一座に充ち渡る。

洋燈の明るい光が勤の肩からかけて、兄の優しい顔の半面と膝の上に重ねたてる子の細い指とを照らした。

鐵瓶の湯はグラ〳〵沸立つて、白い湯氣が盛に颺つた。『山口さん、水をさして下さいな、』とお光に命ぜられて、書生は立つて火鉢の前に行く。

一座が茶を飲んだり、菓子を食つたり、面白さうな話をしたりして居た。

お光は赤兒を抱いて居たが、重くなつたので、下に寢かさうと思つて、しびれた足を引摺りながら、

次の間に行きかけると、てる子は、『奥さん、私、だつこして上げませう。』と傍に寄つて來る。

『いゝのよ、いゝのですよ。』とお光は抱へるやうにソッと子供を抱へて、次の間へ行く。

遣つた菓子も食はず、茶も飲まず、暗い顔を低頭かせて、隅の方に小さくなつて、お菊がせつせと針を動かして居るのを兄は見附け出して、

『お菊、何うした？　何か心配ごとでも出來たかね！』と戯れかけると、

『えゝ、何うせ私なんか。』

笑ひもせずに、矢張低頭いたまゝ針を運ばせて居る。

『これは御挨拶だね。』

と兄の笑ふのにつれて山口も笑つた。てる子も解らずなりに笑つた。

『お前、菓子でも食つたら好いぢやないか。』

勤に言はれて、

『えゝ、後で戴きます！』

『お菊、何うかしたね？』と兄がまた笑ひかけると、

『屹度好い便が無かつたんでせう、』と何か知つてるやうに山口が言つた。

『山口さん、たんと仰しやい！』

と言つたと思ふと、すッと立つて下女室に行つて了つた。

てる子は下婢のかうした素振に喫驚したやうな顔附をした。

『先生、何うかしてるんですよ。』

と書生は言つた。

お光が子を寢かしつけて、はだけた乳を胸に藏ひながら出て來た。話聲と笑聲とはまた續いた。

四十二

ある日、山口は兄の家から使ひを受けて出懸けて行つたが、一時間ほどして、すぐ〳〵歸つて來て、玄關の自分の室に入つて、机のあたりをごと〳〵させて居たが、着物を着替へて外出の支度をした。

茶の間を通る時、てる子とお光と長火鉢に相對した話をして居たが、見向きもせずに通つて勝手に行つて、手を洗つて水を一杯飲んだ。

お菊は井戸端で洗濯をして居た。

山口は水口から下駄を突懸けて、裏に行つた。物置に放つて置いた鼻緒の切れた駒下駄をさがしに行つたのである。お菊は洗濯をしながら、頭を分けた山口が竹箒や埃取や薪や炭俵や大きな石を載せた澤庵桶の間を頻りにさがし廻してゐるのを見たが、やがて古い疊表の駒下駄を一足さげて來て井戸端の傍

で鼻緒をすげ始めた。

『山口さん、何してるの。』

『御覽の通りさ。』

笑ひもしない。

『何處かに行くの？』

『あゝ。』

お菊は洗濯を續けた。

『扶持に離れた身は可哀相なもんさ。ぐづ〳〵して居られやしない。今夜寢る處を搜さなくつちやならないんだ！』獨言のやうに言ふのをお菊は聞きとがめて、

『何うしたのさ？』

『今から宿なしになつちやッた。』

『何うして？』

お菊は其耳を疑つた。

『何うしてッて！　別に意味はないさ。置いて呉れないッて言ふんだから、爲方がないぢやないか。』

『それはさうだけれど――可笑しいぢやないかね、唯斷つた？』

『さうさ――、定つてゐらァね。先刻、あつちの家から、ちよつと來て呉れと言ふから行つて見ると、昨夜、彼方の先生に話があつたんだッて。てる子さんは來たし、費用が多く懸つて爲方がないから、彼方の家に當分引取つて呉れッて言ふんださうだ。それは別に理由があるのは定つてるけれど。』

『さうさね。』

『僕だッて、此方の宅に世話になつたのは彼方の先生が困つてるから來たんだから、今更、彼方の先生の處に歸つて行くわけには行きやしない。……』

『それはさうさねえ。』

お菊は胸が晴れたやうな思ひがした。そして一方では山口に對する同情が盛んに起つた。山口は、

『僕だつて、友人もあるし、知己もあるから困りやせんさ。……これから出懸けて行つて寢る處を搜して來るんだ。』

かう言つて一生懸命に鼻緒の前壺をすげて居る。

お菊は笑つて小聲で、

『えらい人が入り込んで來たものねえ！』

『これから一芝居さ。』

と山口も笑つた。

『山口さん、山口さん、』とお菊は思ひ出したやうに、『あなた、小づかひ持つてゝ？』

『金なんかあるもんか。』

『ぢや、』と帶の間から自分で縫つた巾着を出して、中から細かく折つた一圓紙幣を濡れた手でつまんで、

『これ、少しだけれど持つていらつしやいよ。』

『金なんかいらん。』

『だツて、一文なしぢや——。』

要らんと言ふのを、お菊はわざ〳〵立つて來て、無理に男の懷に入れて遣つた。

四十三

勤の家の空氣が頻りに動搖した。下女がまた出て行つた。

新しい婢が目見えに來て、一日働いて見て、居ることにきまると、お菊は荷物を白い大きな風呂敷に包んで、お別れの言葉を述べた。田舍から出て四年目、其頃にはまだほんの小娘で、町の通りを平氣で子守唄を唄つて歩いた。肥つた手を皸（あかぎれ）だらけにして泣いて居たこともあつた。東京の面白いことも、菓子の旨いことも、氷水の飲みたいことも、男の面白味も皆な此處（ここ）で覺えた。白粉をつけたり、銘仙の着物

を拵へたり、繻子の帶を買つたりして、時々は見違へるやうにめかし込んで出懸けた。ねんねこの新しいのを喜ぶやうにもなつた。毎晩抱いて寢た咲子も大きく可愛くなつた。——それが皆な別離に臨んで、取集めて、犇と胸に迫る。

氣强いことを言つて、此處（ここ）ばかりが主人ぢやないといふやうな氣になつたが、さて別れるとなつて見ると、矢張名殘が惜しかつた。四五日前、濠端の政次が土曜の役所の歸途に、ハイカラな洋服姿をして遣つて來て、火鉢の傍でてる子と一緒に睦しさうに話した。てる子の艶かしい樣子と政次のやさしさうな話振とが、前に山口のことがあるので、何となしに腹立たしくお菊には見えた。やがて勤が歸つて、夕飯の御馳走も濟んで、政次が玄關で靴を穿いてゐると、てる子がちよつと其處まで買物があるから御一緒に參りませうと言つて、そろつて出かけようとする。送つて出た洋燈の光にてる子の顏は白くくつきりと際立つて見えて、政次のいゝ男振とよく似合つたので、われ知らず『おそろひで、よく似合ひますよ、』とひやかして笑つた。それが後で小言の種になつて、主（あるじ）からしたゝか叱られた。そんな失禮なことを言ふ奴は使つて置かれないと言つた。勤は前からお菊のてる子に對する素振を見て居て、折があつたらと思つた。その折が來たのである。お菊が暇を乞うて許されたのは其翌日であつた。

女だけに、長年使つて馴染んで居たゞけにお光はお菊との別離を惜んだ。『暇があつたら、時々お出……。』と言つて縮緬の半襟を遣つた。

『奥さんも御丈夫で……。』

あんな女に負けてはいけませんよといふ言葉が口から出ようとしたが、お菊はそれを押へて言はなかつた。何とはなしに涙がこぼれる。折角馴染んで自分の家のやうになつた。我儘も言つた。奉公人にあるまじき口もきいた。まだ二年や三年はお世話にもなり世話をもして上げようと思つた。それが、かうした行懸りで――靜かな水に石を投り込まれたやうな行懸りで、ついわけなく別れて行つて了ふのが、いかにも儚なく心細いやうな氣がした。人間には、ある時ある場合、常に平氣で過して居た世の中の過去と將來とが分明と頭に映つて來るやうなことがあるが、さうした思ひが別れてゆくお菊の胸にも漲り渡つたのである。

お菊は別れてから、門の處で暫く立留つて泣いて居た。

四十四

お光は到る處でてる子のことを聞かれた。

里に行くと、先づ第一に母親は心配さうな顔を笑に包んで、

『何うぢやな、何と言はしつたな、てるさん……さうぢやてる子さん何うして御座るな。』

『勉強してますよ、家で。』

『まだ學校がきまらんかな。』

『四月まで遊ぶつて言つて居ました。』

『何んな人ぢやな。』

笑つてお光の顔を見る。

『母さん、此間逢つたぢやないか。』

『氣分を言ふのぢやがな。』

『好い人ですよ。そりや、深切な……。』

母親は聲を落して、『お前、さうぢやけども……いくら深切な人でも、滅多なことを饒舌つてはいかんぞな。』

お光は母親の心を讀み兼ねたが、『滅多なことなど言ひはしませんから大丈夫ですよ。』

『でもなお前、口を愼まないと、何んなことが起らんものでも無いぢやでな。』

『あゝ、それはもうよく解つてますよ。』

『本當によく氣を附けな。』

母親の心では、お光ののんきなのが何だか齒痒かつた。

『勤さん、本でも敎へて遣るかな。』

『いゝえ、まだ――。』

『何處か早く好い下宿があればいゝがな。』

母親は此間行つた時、襖を明けて淑やかに入つて來て挨拶したてる子の姿を頭に浮べた。

おきよは二階でお光に、

『此間も家で大變賞めて居ましたよ。學問は出來るし、話は旨いし、とてもお光やお前などに眞似が出來ないつて言つてましたよ、』と厭に笑ひながら、『此間も一緒に柳町まで來たんですッてね。』

『政さん、自分でさう言つてゝ？』

『いゝえ、――自分なんか知らん顏してますの。此間ちよいと其話を聞きかじッて、言つて遣りますとね、可笑しいんですの、誰に聞いたッて笑つてるんですもの。』

『一緒に歩くとよく似合つてよ。』

『家ぢや此頃本當に爲方がなくなりましたよ。子供が出來ると、男といふものは皆なあゝかしらん。もうちつとも構つて呉れやしません。子供が煩さいッてばかり言つてて。』

『男は皆なさうね。』

『やさしい言葉などかけて呉れッたッてかけて呉れはしませんよ、もう。此間もね此上に、大きな家の娘がありますのよ、その娘が學校に行く時、いつも一緒になるんだッて、いつもそんな話ばかりしま

すの……男ッてのんきなものねえ。』

ふと思ひ附いたといふ風で、『それから、お光さん面白いことがありますの。私前に上つてたお屋敷の若樣のお妾がすぐそこに圍つてあるのよ。』

『お妾？』

『私、此處で、窓の處で見てますとね、其前の家の緣側で、座敷の障子を貼つてる人がありますのよ。何うも髭の工合といひ姿と言ひ、よく若樣に似てるけれど、家に居てあんなに贅澤をしてゐる人が、こんな處で障子を貼つてるなどと夢にも思ひませんからねえ、別な人かと、思つてると、矢張さう……。毎日、華族女學校へ敎へに行つた歸りには、屹度寄つて行くのですよ、可笑しくなつて了ふ。……』

『まア、さう……何の家？』

『そら、すぐ其處の……。』

二階の下に、庭に松のある三間位の家があつた。踏石の上に盆栽が二つ三つ置かれて、障子は閉めてあつた。

『奥さんや大奥さんに知れると、大變だから、內所にしてあるんでせう。』

『別嬪さん？』

『奥さんの方が何の位好いか。奥さんは矢張華族さんから來たんですから、上品で、容色もよくつて、

女でもほれ〴〵する位だつたんですよ。何うして、あんな女を妾なんかにしてるかと思ふと、不思議な位……。』

『あなたが此處に居ることが先に分つて？』

『此間、風呂敷を抱へて、洋服で、路次を入つて來る處で逢つちやつたの。變な顏をして居ましたよ。』

『困つたでせうねえ、』とお光は笑つた。

『それからお妾さんが店に來てよく買物などして行きますよ。此間も母さんに大奥さんに知れると大變だからつて賴んで居たつて……。男つて浮氣なものねえ、油斷が出來やしませんよ。』

『さうねえ。』

お光は家のことを考へた。

見附の處で、秀子に逢つても、『てる子さん、何うして？』と先づ聞かれる。

姉は姉で、

『お前もお客樣が來て大變だね。』

『姉さんの家で置いて呉れると好いッて言つてるよ。』

『まアもう少し經つてから、』と言つて意味ありげに笑つて、『母樣、此間歸つて來て心配してたよ。』

『何うして？』

『何うしてッて言ふこともないけれど、矢張、お前が可愛いもんだから、心配になると見えるんだよ。』

『大丈夫よ。』

『それは大丈夫さ……。事があつちや大變だよ、お前。勤さんがしつかりしてるからそんな心配はないけれど……そりやないけれど……』とわざと重ねて言つて、『そこは又男の考と女の考とは違ふからねえ……。』

と謎みたやうなことをいふ。

お三輪はまたお光の顏を見ても、成たけ避けて其話をしないやうにする。しないのは、するよりも危機を意味して居る。お光が平氣で、てる子の話をしだすと、フン〴〵と唯笑つて聞いてゐる。ある時聲をひそめて、今まで見たこともない眞面目な顏で、『それや大丈夫だけども、慾にかゝつて、奥さんを追出す人はいくらもあるからねえ。』

お光は其言葉が胸につかえて、其意味をいろ〳〵に考へて見た。

兄は書生のことがあつてから、てる子に關しては、一切口を噤んで了つた。何か話をすると、厭な顏をした。生活の補助を弟から受けて居るので、何彼と細かに其家の世話をして遣つたが、てる子の話だけは身を入れて聞かうともしなかつた。相談をかけられると、『さうだなあ、』『それもよからう、』などと煮え切らぬ返事をした。勤も後にはそれと知つて、全く其話を持出さなくなつた。

西さんが勤から其話を聞くと、

『でも、細君が困るだらう。』

と眞面目な聲で言つた。其聲の中には忠告の意味が籠つて居た。

『何ァに、平氣さ。かへつて友達が出來て好いよ。』

『だッて、そんなことはいかんよ。さういふことは、よく考へてしないと、後で困ることが出來るよ、君。』

てる子に紹介された時には、西さんは嚴めしく坐つて、窮屈な話の爲方をした。西さんは勤のやうに若い女に對して鑑識力を缺いては居なかつた。若い女の複雜した情の曲折――さうしたことはよく知つて居た。西さんが歸つてから、てる子は、『立派な方ね、』とお光に囁いたが、すぐ後を續いで、『でも、私、何だか變だつたわ、何處か怖いやうなところがあつてね。』

『あの人が怖い？』とお光は思ひもかけぬといふ顏をすると、

『だつて怖いわ。人の心をすつかり見拔くやうな人ですもの……先生のお友達では、矢張田邊さんが一番好き。』

てる子はかう言つた。

四十五

田邊は別に意見もなかつたが、唯こんなことを言つた。『人間と謂ふものは、どんな親友でも――親子でも立入ることの出來ぬ處がある。第三者にはとても解らぬほど、人間の機能は複雜して居る。隨分深く其心持を知つてるつもりでも、中に入つて見ると、多くは第三者が思つたやうな簡單なものではない。』

また、次のやうなことも言つた。

『人間はタァニングポイントと言つたやうな時期に邂逅することがある。それが外部から來ることもあれば、內部から來ることもある、內外兩方から來ることもある。さういふ時期は人間には大切だ。其人の發展も失墜も多くはさうした時期にある。』

田邊と勤とは茶湯臺に凭りかゝつて、酒を飲みながら昔を話した。

辨慶橋の上で、勤がお光に對する戀を田邊に明かしたことがあつた。それはもう七年も前のことである。月の明るい夜で岸の柳の影が風に黑く靡いた。勤は何うしても今夜は打明けて話すつもりで、其時一緒に居た田邊の家に行つたが、何うしても話せぬので、歸りに田邊を引張出して、其橋の上まで來て、やうやく話した。田邊は以前に戀を得て、そして失つて居た。

『あの時分のことを考へると隨分もう遠いねえ。』

田邊はかう言つて笑つた。田邊は其戀した女の話を細君の前で草や木のやうに平氣で話した。

『あの時分は若かつたねぇ君。君も讀んだことがある例の日記が、時々本箱など搜すと眼に附くので明けて見るがね、それは馬鹿なことが大眞面目で書いてあるよ、其愚や及ぶべからずと思ふねぇ。』

『だつて、其時分は大眞面目だつたんだから。』

『それは大眞面目とも……邂逅したら、あの女め、殺して遣れと思つて短刀を持つて歩いたことがあるからねぇ。實際、人は刹那に於てのみ眞面目なので、一時間と謂はず、三十分でも經てばもういくらか其眞劍の度が薄くなる。だから經驗をすればするほど容易に動かなくなる。』

『本當だ。』

『だから一生五十年の刹那を殘らず經驗して見なければ大きなことは言へんのさね、三十五の人は三十五、四十五の人は四十五でなければ、其年代の複雜した機能を知ることは出來ないよ。』

『實際さうだ。八年前、君と日光に行つた時分、戀などといふことに悶えてゐる時分、辨慶橋の上時代には、今日あらうとは思ひもかけんからねぇ。其時分の心持を今の心持に比べて見ると、天と地と墨と雪との相違があるが、それが別段ギャップを爲して居るのではなく、自然に推移るのだから實に驚くよ。自然の前に立つては、我々人間は土偶のやうなもんだね。』

『そんなことを聞かせられると、不眞面目だつて言つて大に議論の鋒を向けたもんだなァ。』

と田邊は盃を勤にさした。

『皆な變つたね。』

かう言つて二人は昔を思つた。

『此間西に逢つたが、先生もすつかり御役人樣になつた。』

『西君もさう言つて居た。君も變つたつて言つたよ。』

『さうかな、變つたかな。』と傍にあつた鏡を戯談に取つて映して見て、『さう、別に變つた處もないやうだが。』

一杯グッと干して、

『先生の利根川の家に行つたことがあつたね。』

『うむ』

『機を織つて居る娘があつたね。』と言ひかけて其時の狀を思ひ出すといふ風をした。暫くして、

『あの娘、何うしたらう？』

『もう、子供が二人ある。』

『さうかなあ。さうだらうな、もう君も僕も三人の子持だから。』

『西君の姪が居たらう、あの時十歲位で、君が抱いたり何かした——』

『さう〳〵、何と謂つたけな。』
『袖ちやんさ。』
『さう〳〵袖ちやん。』
『あの子がもう立派な娘になつて、ハイカラに結つて、リボンなぞかけて、此間、西君の處で逢つた。』
『我々はまだ昔の氣で居ると、ぢき老人の組に打込まれて了ふんだねえ。』
『ぐづ〳〵しては居られんよ。』
二人は高らかに笑つた。
『田舍の和尚さんは何うだねえ、便りがあるかね。』
田邊がかう訊ねると、
『相變らず丈夫で居るさ。』
『金を殘したらうな。』
『何ァに……殘りもしないだらう。』
『だッて、僕はわが黨のルーヂンの爲めになんて、氣焰を吐いたことがあつたぢやないか……少し金を融通して呉れても好いわけだぜ。』
『駄目さ。』

『それでも時々は東京に出て來るかね？』
『いや、滅多に出て來ない。でも此春は來るつて言つて來た。』
『來たら、大に歡迎して遣らうねえ、』と言つて、『子併は？』
『ひとり出來た。』
其時窓の下の濠端の道を號外賣が勇しい聲で通つた。今から三四日前、旅順の攻擊が始まつた。露國に對しての宣戰の詔勅もつい此間出た。田邊は昨年鎌倉の佗住居を出て、ある人の計畫の下に『時事畫報』を編輯して居た。
『それ、號外！　早く買へ。』
と次の室に向つて呶鳴つた。
下女が號外を持つて、階段をけたゝましく昇つて來た。號外には津輕海峽に敵艦が遣つて來て、運送船を擊沈した報が載せてあつた。
『遣つけやがつたな、』と田邊は叫んだ。
號外の聲があとからあとへと來た。市中は俄かに騷がしくなつた。

四十六

騷がしい號外の聲を聞流して、勤は日比谷公園に入つた。午後は暖かであつたが、夕暮から風が出て、雲が出て、赤煉瓦の大きな建物の上に殘つた日影は厭に黃かつた。戰端が開かれたといふ日、『そんな大きな戰爭を始めて日本は何うするんだらう、』といふ不安があつたが、愈々敵が復仇に來たと思ふと、人人と同じやうに烈しく血が躍つた。國の爲め――かういふ思ひを起したことはかれには稀であつた。

津輕海峽の怒濤が繪のやうに眼の前に浮んで通つた。

田邊の言葉が思出された。『タアニングポイント、さうだ今は國家もタアニングポイントにあるんだ！何だかかうして居られぬやうな心になつた。時代も國家も矢張自分の閱歷や運命と同じく、盲目の力に支配せられて、無限から無限に動かされつゝあるやうな氣がした。混亂に混亂、紛糾、かうして時代も國家も個人もある大きな潮流の中に流されて行くのである。

平凡なる自己の生活――寧ろ平凡なる人間の生活。

搖籃から死に至るまで、殆ど判を捺したやうな無意味で、平凡でつまらないのは、此の人間の生活だと勤は繰返した。

親と子の關係、兄と弟の關係、夫と妻との關係、友人と友人との關係、それが目の網かい網のやうに

かれの心に織込まれて見えたが、それがすべて意味のない空しき現象としか映らなかつた。

空しき現象！　その現象のまゝで、時は唯過ぎて行く。辨慶橋の上の戀ももう昔話になつた。若い時の煩悶も苦痛も何も彼も笑つて話が出來るやうになつた。どんなことでも――どんな辛い悲しい情ないことでもずん〳〵過ぎて行く。個人々々の生活は現象のまゝで日毎に千變萬化して行く。

過ぎ去つたさまゞ〳〵の舞臺やら、人間やら、感情やらが活動寫眞のやうにかれの前に展げられてそして消えた。笑つたり泣いたり悔んだり嘆いたりしたかれが其處にも此處にも見える。

『曾て種々の現象の過ぎ去つたと均しく、此今の現象も忽ちにして過ぎ去るのだ。津輕海峽の怒濤も、此今の自己の境遇も、妻に對する考も、てる子に對する考も、何も彼も忽ちにして過ぎ去つて了ふのだ！』

ふと氣が附くと、路に枝を出した梅が二三輪寒さうに白く咲いて居た。

今日編輯で主幹の言つたことを思ひ出した。編輯では從軍記者に就いての選擇が容易に決らなかつた。活氣が一室に充ち渡つた。扉を開けて入つて來る人が新しい報を齎らす度に、人々の心は躍つた。主幹が『中村君、何うです？　君、行く氣はありませんか、』と言ふと、『中村君なら大丈夫だ。體も達者だし、脚も達者だから、』と社長は笑つた。

てる子のことが流石に氣に懸つたが、すぐ抑へて、

『戰地へ、戰地へ。』

蒲團外十一編

蒲團

一

小石川の切支丹坂から極樂水に出る道のだら〳〵坂を下りようとして渠は考へた。『これで自分と彼女との關係は一段落を告げた。三十六にもなつて、子供も三人あつて、あんなことを考へたかと思ふと、馬鹿々々しくなる。けれど……けれど……本當にこれが事實だらうか。あれだけの愛情を自分に注いだのは單に愛情としてのみで、戀ではなかつたらうか。』

數多い感情づくめの手紙——二人の關係は何うしても尋常ではなかつた。妻があり、子があり、世間があり、師弟の關係があればこそ敢て烈しい戀に落ちなかつたが、語り合ふ胸の轟き、相見る眼の光、其の底には確かに凄じい暴風が潜んで居たのである。機會に遭遇しさへすれば、其の底の底の暴風は忽ち勢を得て、妻子も世間も道德も師弟の關係も一擧にして破れて了ふであらうと思はれた。少くとも男はさう信じて居た。それであるのに、二三日來の此の出來事、此から考へると、女は確かに其の感情を

僞り賣つたのだ。自分を欺いたのだと男は幾度も思つた。けれど文學者だけに、此の男は自から自分の心理を客觀するだけの餘裕を持つて居た。年若い女の心理は容易に判斷し得られるものではない、かの溫い嬉しい愛情は、單に女性特有の自然の發展で、美しく見えた眼の表情も、やさしく感じられた態度もすべて無意識で、無意味で、自然の花が見る人に一種の慰藉を與へたやうなものかも知れない。一歩を讓つて女は自分を愛して戀して居たとしても、自分は師、かの女は門弟、自分は妻あり子ある身、かの女は妙齡の美しい花、そこに互に意識の加はるのを如何ともすることは出來まい。いや、更に一歩を進めて、あの熱烈なる一封の手簡、陰に陽に其の胸の悶を訴へて、丁度自然の力が此の身を壓迫するかのやうに、最後の情を傳へて來た時、其の謎を此の身が解いて遣らなかつた。女性のつゝましやかな性として、其の上に猶露はに迫つて來ることが何うして出來よう。さういふ心理からかの女は失望して、今回のやうな事を起したのかも知れぬ。

『兎に角時機は過ぎ去つた。彼の女は既に他人のものだ！』

歩きながら渠はかう絶叫して頭髪をむしつた。

縞セルの脊廣に、麥稈帽、藤蔓の杖をついて、やゝ前のめりにだら〳〵と坂を下りて行く。時は九月の中旬、殘暑はまだ堪へ難く暑いが、空には既に淸涼の秋氣が充ち渡つて、深い碧の色が際立つて人の感情を動かした。肴屋、酒屋、雜貨店、其の向うに寺の門やら裏店の長屋やらが連なつて、久堅町の低

い地には數多の工場の煙筒が黑い煙を漲らしてゐた。

其の數多い工場の一つ、西洋風の二階の一室、それが渠の每日正午から通ふ處で、十疊敷ほどの廣さの室の中央には、大きい一脚の卓が据ゑてあつて、傍に高い西洋風の本箱、此中には總て種々の地理書が一杯入られてある。渠はある書籍會社の囑託を受けて地理書の編輯の手傳に從つて居るのである。文學者に地理書の編輯！　渠は自分が地理の趣味を有つて居るからと稱して進んでこれに從事して居るが內心此れに甘じて居らぬことは言ふまでもない。後れ勝なる文學上の閱歷、斷篇のみを作つて未だに全力の試みをする機會に遭遇せぬ煩悶、青年雜誌から月每に受ける罵評の苦痛、渠自からは其の他日成すあるべきを意識しては居るものゝ、中心これを苦に病まぬ譯には行かなかつた。社會は日增に進步する。電車は東京市の交通を一變させた。女學生は勢力になつて、もう自分が戀をした頃のやうな舊式の娘は見たくも見られなくなつた。青年はまた青年で、戀を說くにも、文學を談ずるにも、政治を語るにも、其の態度が總て一變して、自分等とは永久に相觸れることが出來ないやうに感じられた。

で、每日機械のやうに同じ道を通つて、同じ大きい門を入つて、輪轉機關の屋を撼かす音と職工の臭い汗との交つた細い間を通つて、事務室の人々に輕く挨拶して、こつ〳〵と長い狹い階梯を登つて、さて其の室に入るのだが、東と南に明いた此の室は、午後の烈しい日影を受けて、實に堪へ難く暑い。それに小僧が無精で掃除をせぬので、卓の上には白い埃がざら〳〵と心地惡い。渠は椅子に腰を掛けて、煙

草を一服吸つて、立上つて、厚い統計書と地圖と案内記と地理書とを本箱から出して、さて靜かに昨日の續きの筆を執り始めた。けれど二三日來、頭腦がむしやくしやして居るので、筆が容易に進まない、一行書いては筆を留めて其の事を思ふ。また一行書く、また留める、又書いてはまた留めるといふ風。そして其の間に頭腦に浮んで來る考は總て斷片的で、猛烈で、急激で、絶望的の分子が多い。ふと何ういふ聯想か、ハウプトマンの『寂しき人々』を思ひ出した。かうならぬ前に、この戯曲をかの女の日課として教へて遣らうかと思つたことがあつた。ヨハンネスフオケラートの心事と悲哀とを教へて遣り度かつた。此戯曲を渠が讀んだのは今から三年以前、まだかの女の此の世にあることをも夢にも知らなかつた頃であつたが、其の頃から渠は淋しい人であつた。敢てヨハンネスに其の身を比さうとは爲なかつたが、アンナのやうな女がもしあつたなら、さういふ悲劇（トラヂディ）に陷るのは當然だとしみ〴〵同情した。今は其のヨハンネスにさへなれぬ身だと思つて長嘆した。

流石に『寂しき人々』をかの女に教へなかつたが、ツルゲネーフの『ファースト』といふ短篇を教へたことがあつた。洋燈の光明かなる四疊半の書齋、かの女の若々しい心は色彩ある戀物語に憧れ渡つて、表情ある眼は更に深い〳〵意味を以て輝きわたつた。ハイカラな廂髪、櫛、リボン、洋燈の光線が其半身を照して、一卷の書藉に顔を近く寄せると、言ふに言はれぬ香水のかほり、肉のかほり、女のかほり——書中の主人公が昔の戀人にファーストを讀んで聞かせる段を講釋する時には男の聲も烈しく戰（そよ）へた。

『けれど、もう駄目だ！』

と、渠は再び頭髪をむしつた。

二

渠は名を竹中時雄と謂つた。

今より三年前、三人目の子が細君の腹に出來て、新婚の快樂などはとうに覺め盡した頃であつた。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生作に力を盡す勇氣もなく、日常の生活——朝起きて、出勤して、午後四時に歸つて來て、同じやうに細君の顔を見て、飯を食つて眠るといふ單調なる生活につくづく倦き果てゝ了つた。家を引越歩いても面白くない、友人と語り合つても面白くない、外國小說を讀み渉獵（あさ）つても滿足が出來ぬ。いや、庭樹の繁り、雨の點滴、花の開落などいふ自然の狀態さへ、平凡なる生活をして更に平凡ならめるやうな氣がして、身を置くに處は無いほど淋しかつた。道を歩いて常に見る若い美しい女、出來るならば新しい戀を爲たいと痛切に思つた。

三十四五、實際此の頃には誰にでもある煩悶で、此の年頃に賤しい女に戯るゝもの〻多いのも、畢竟その淋しさを醫（いや）す爲めである。世間に妻を離緣するものも此の年頃に多い。

出勤する途上に、毎朝邂逅（であ）ふ美しい女教師があつた。渠は其の頃此の女に逢ふのを其の日〳〵の唯一

の樂みとして、其の女に就いていろ〳〵な空想を逞うした。戀が成立つて、神樂坂あたりの小待合に連れて行つて、人目を忍んで樂しんだら何う。……。細君に知れずに、二人近郊を散歩したら何う……。いや、それ處ではない、其の時、細君が懷姙して居つたから、不圖難產して死ぬ、其の後に其の女を入れるとして何うであらう。……平氣で後妻に入れることが出來るだらうか何うかなどと考へて歩いた。

神戸の女學院の生徒で、生れは備中の新見町で、渠の著作の崇拜者で、名を横山芳子といふ女から崇拜の情を以て充された一通の手紙を受取つたのは其の頃であつた。竹中古城と謂へば、美文的小說を書いて、多少世間に聞えて居つたので、地方から來る崇拜者渴仰者の手紙はこれ迄にも隨分多かつた。やれ文章を直して呉れの、弟子にして呉れのと一々取合つては居られなかつた。だから其の女の手紙を受取つても、別に返事を出さうとまで其の好奇心は募らなかつた。けれど同じ人の熱心なる手紙を三通まで貰つては、流石の時雄も注意をせずには居られなかつた。年は十九ださうだが、手紙の文句から推して、其の表情の巧みなのは驚くべきほどで、いかなることがあつても先生の門下生になつて、一生文學に從事したいとの切なる願望。文字は走り書のすら〳〵した字で、餘程ハイカラの女らしい。返事を書いたのは、例の工場の二階の室で、其の日は毎日の課業の地理を二枚書いて止して、長い數尺に餘る手簡を芳子に送つた。其の手簡には女の身として文學に携はることの不心得、女は生理的に母たるの義務

を盡さなければならぬ理由、處女にして文學者たるの危險などを縷々として說いて、幾らか罵倒的の文辭をも陳べて、これならもう愛想をつかして斷念めて了ふであらうと時雄は思つて微笑した。そして本箱の中から岡山縣の地圖を搜して、阿哲郡新見町の所在を研究した。山陽線から高梁川の谷を遡つて奥十數里、こんな山の中にもこんなハイカラの女があるかと思ふと、それでも何となくなつかしく、時雄は其の附近の地形やら山やら川やらを仔細に見た。

で、これで返辭をよこすまいと思つたら、それどころか、四日目には更に厚い封書が屆いて、紫インキで、青い罫の入つた西洋紙に横に細字で三枚、何うか將來見捨てずに弟子にして呉れといふ意味が返す返すも書いてあつて、父母に願つて許可を得たならば、東京に出て、然るべき學校に入つて、完全に忠實に文學を學んで見たいとのことであつた。時雄は女の志に感ぜずには居られなかつた。東京でさへ——女學校を卒業したものでさへ、文學の價値などは解らぬものなのに、何も彼もよく知つて居るらしい手紙の文句、早速返事を出して師弟の關係を結んだ。

それから度々の手紙と文章、文章はまだ幼稚な點はあるが、癖の無い、すら〳〵した、將來發達の見込は十分にあると時雄は思つた。で一度は一度より段々互の氣質が知れて、時雄は其の手紙の來るのを待つやうになつた。ある時などは寫眞を送れと言つて遣らうと思つて、手紙の隅に小さく書いて、そしてまたこれを黑々と塗つて了つた。女性には容色と謂ふものが是非必要である。容色のわるい女はいく

ら才があつても男が相手に爲ない。時雄も内々胸の中で、何うせ文學を遣らうといふやうな女だから、不容色に相違ないと思つた。けれど成るべくは見られる位の女であつて欲しいと思つた。

芳子が父母に許可を得て、父に伴れられて、時雄の門を訪うたのは翌年の二月で、丁度時雄の三番目の男の兒の生れた七夜の日であつた。座敷の隣の室は細君の産褥で、細君は手傳に來て居る姉から若い女門下生の美しい容色であることを聞いて少なからず懊惱した。姉もあゝいふ若い美しい女を弟子にして何うする氣だらうと心配した。時雄は芳子と父とを並べて、縷々として文學者の境遇と目的とを語り、女の結婚問題に就いて豫め父親の說を叩いた。芳子の家は新見町でも第三とは下らぬ豪家で、父も母も嚴格なる基督教信者、母は殊にすぐれた信者で、曾ては同志社女學校に學んだこともあるといふ。總領の兒は英國へ洋行して、歸朝後は某官立學校の教授となつて居る。芳子は町の小學校を卒業するとすぐ、神戸に出て神戸の女學院に入り、其處でハイカラな女學校生活を送つた。基督教の女學校は他の女學校に比して、文學に對して總て自由だ。其の頃こそ『魔風戀風』や『金色夜叉』などを讀んではならんとの規定も出て居たが、文部省で干涉しない以前は、教場でさへなくば何を讀んでも差支なかつた。學校に附屬した教會、其處で祈禱の尊いこと、クリスマスの晩の面白いこと、理想を養ふといふことの味をも知つて、人間の卑しいことを隱して美しいことを標榜するといふ群の仲間となつた。母の膝下が戀しいとか、故鄕が懷しいとか言ふことは、來た當座こそ切實に辛く感じもしたが、やがては全く忘れ

て、女學生の寄宿生活を此上なく面白く思ふやうになつた。旨味い南瓜を食べさせないと云つては、お鉢の飯に醬油を懸けて賄方を酷めたり、舍監のひねくれた老婦の顏色を見て、陰陽に物を言つたりする女學生の群の中に入つて居ては、家庭に養はれた少女のやうに、單純に、物を見ることが何うして出來よう。美しいこと、理想を養ふこと、虛榮心の高いこと――かういふ傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治の女學生の長所と短所とを遺憾なく備へて居た。

尠くとも時雄の孤獨なる生活はこれによつて破られた。昔の戀人――今の細君。曾ては戀人には相違なかつたが、今は時勢が移り變つた。四五年來の女子教育の勃興、女子大學の設立、庇髮、海老茶袴、男と並んで歩くのをはにかむやうなものは一人も無くなつた。この世の中に、舊式の丸髷、泥鴨のやうな歩き振、溫順と貞節とより他に何物をも有せぬ細君に甘んじて居ることは時雄には何よりも情けなかつた。路を行けば、美しい今樣の細君を連れての睦じい散歩、友を訪へば夫の席に出て流暢に會話を賑かす若い細君、まして其の身が骨を折つて書いた小說を讀まうでもなく、夫の苦悶煩悶には全く風馬牛で、子供さへ滿足に育てれば好いといふ自分の細君に對すると、何うしても孤獨を叫ばざるを得なかつた。『寂しき人々』のヨハンネスと共に、家妻といふものゝ無意味を感ぜずには居られなかつた。これが――この狐獨が芳子に由つて破られた。ハイカラな新式な美しい女門下生が、先生！　先生！　と世にもえらい人のやうに渴仰して來るのに胸を動かさずに誰が居られようか。

最初の一月ほどは時雄の家に假寓して居た。華やかな聲、艶やかな姿、今迄の狐獨な淋しいかれの生活に、何等の對照！　產褥から出たばかりの細君を助けて、靴下を編む、襟卷を編む、着物を縫ふ、子供を遊ばせるといふ生々した態度、時雄は新婚當座に再び歸つたやうな氣がして、家門近く來るとそゝるやうに胸が動いた。門をあけると、玄關には其美しい笑顏、色彩に富んだ姿、夜も今迄は子供と共に細君がいぎたなく眠つて了つて、六疊の室に徒に明らかな洋燈も、却つて佗しさを增すの種であつたが、今は如何に夜更けて歸つて來ても、洋燈の下には白い手が巧に編物の針を動かして、膝の上に色ある毛糸の丸い玉！　賑かな笑聲が牛込の奥の小柴垣の中に充ちた。

けれど一月ならずして時雄はこの愛すべき女弟子を其の家に置くことの不可能なのを覺つた。從順なる家妻は敢て其の事に不服をも唱へず、それらしい樣子も見せなかつたが、しかも其の氣色は次第に惡くなつた。限りなき笑聲の中に限りなき不安の情が充ち渡つた。妻の里方の親戚間などには現に一問題として講究されつゝあることを知つた。

時雄は種々に煩悶した後、細君の姉の家――軍人の未亡人で恩給と裁縫とで暮らして居る姉の家に寄寓させて、其處から麴町の某女塾に通學させることにした。

三

それから今回の事件まで一年半の年月が經過した。

其の間二度芳子は故鄕を省した。短篇小說を五種、長篇小說を一種、其他美文、新體詩を數十篇作つた。某女塾では英語は優等の出來で、時雄の選擇で、ツルゲネーフの全集を丸善から買つた。初めは、暑中休暇に歸省、二度目は、神經衰弱で、時々癪のやうな痙攣を起すので、暫く故山の靜かな處に歸つて休養する方が好いといふ醫師の勸めに從つたのである。

其の寓して居た家は麴町の土手三番町、甲武の電車の通る土手際で、芳子の書齋は其の家での客座敷、八疊の一間、前に往來の頻繁な道路があつて、がや〳〵と往來の人やら子供やらで喧しい。時雄の書齋にある西洋本箱を小さくしたやうな本箱が一閑張の机の傍にあつて、其の上には、鏡と、紅皿と、白粉の罎と、今一つシューソカリの入つた大きな罎がある。これは神經過敏で、頭腦が痛くつて爲方が無い時に飲むのだといふ。本箱には紅葉全集、近松世話淨瑠璃、英語の教科書、ことに新しく買つたツルゲネーフ全集が際立つて目に附く。で、未來の閨秀作家は學校から歸つて來ると、机に向つて文を書くと云ふよりは、寧ろ多く手紙を書くので、男の友達も隨分多い。男文字の手紙も隨分來る。中にも高等師範の學生に一人、早稻田大學の學生に一人、それが時々遊びに來たことがあつたさうだ。

麴町土手三番町の一角には、女學生もさうハイカラなのが澤山居ない。それに、市ヶ谷見附の彼方には時雄の細君の里の家があるのだが、この附近は殊に昔風の商家の娘が多い。で、尠くとも芳子の神戸仕込のハイカラはあたりの人の目を聳たしめた。時雄は姉の言葉として、妻から常に次のやうなことを聞かされる。

『芳子さんにも困つたものですねと姉が今日も言つて居ましたよ、男の友達が來るのは好いけれど、夜など一緒に二七(不動)に出かけて、遲くまで歸つて來ないことがあるんですつて。それや芳子さんはそんなことは無いのにきまつて居るけれど、世間の口が喧しくつて爲方が無いと云つて居ました。』

これを聞くと時雄は定つて芳子の肩を持つので、『お前達のやうな舊式の人間には芳子の遣ることなどは判りやせんよ。男女が二人で歩いたりさへすれば、すぐあやしいとか變だとか思ふのだが、一體、そんなことを思つたり、言つたりするのが舊式だ、今では女も自覺して居るから、爲ようと思ふことは勝手にするさ。』

此議論を時雄はまた得意になつて芳子にも說法した。『女子ももう自覺せんければいかん。昔の女のやうに依賴心を持つて居ては駄目だ。ズウデルマンのマグタの言つた通り、父の手からすぐに夫の手に移るやうな意氣地なしでは爲方が無い、日本の新しい婦人としては、自から考へて自から行ふやうにしなければいかん。』かう言つては、イブセンのノラの話や、ツルゲネーフのエレネの話や、露西亞、獨逸あ

たりの婦人の意志と感情と共に富んで居ることを話し、さて、『けれど自覺と云ふのは、自省といふことをも含んで居るですからな、無闇に意志や自我を振廻しては困るですよ。自分の遣つたことには自分が全責任を帶びる覺悟がなくては。』

芳子にはこの時雄の教訓が何より意味があるやうに聞えて、渴仰の念が愈々加はつた。基督教の教訓より自由でそして權威があるやうに考へられた。

芳子は女學生としては身裝が派手過ぎた。黃金の指環をはめて、流行を趁つた美しい帶をしめて、すつきりとした立姿は、路傍の人目を惹くに十分であつた。美しい顏と云ふよりは表情のある顏、非常に美しい時もあれば何だか醜い時もあつた。眼に光りがあつてそれが非常によく働いた。四五年前までの女は感情を顯はすのに極めて單純で、怒つた容とか、三種、四種位しか其の感情を表はすことが出來なかつたが、今では情を巧に顏に表す女が多くなつた。芳子も其の一人であると時雄は常に思つた。

芳子と時雄との關係は單に師弟の間柄としては餘りに親密であつた。此の二人の樣子を觀察したある第三者の女の一人が妻に向つて、『芳子さんが來てから時雄さんの樣子は丸で變りましたよ。二人で話して居る處を見ると、魂は二人ともあくがれ渡つて居るやうで、それは本當に油斷がなりませんよ。』と言つた。他から見れば、無論さう見えたに相違なかつた。けれど二人は果してさう親密であつたか、何うか。

若い女のうかれ勝な心、うかれるかと思へばすぐ沈む。些細なことにも胸を動かし、つまらぬことにも

心を痛める。戀でもない、戀でなくもないといふやうなやさしい態度、時雄は絶えず思ひ惑つた。道義の力、習俗の力、機會一度至ればこれを破るのは帛を裂くよりも容易だ。唯、容易に來たらぬはこれを破に至る機會である。

此の機會がこの一年の間に尠くとも二度近寄つたと時雄は自分だけで思つた。一度は芳子が厚い封書を寄せて、自分の不束なこと、先生の高恩に報ゆることが出來ぬから自分は故郷に歸つて農夫の妻になつて田舍に埋れて了はうといふことを涙交りに書いた時、一度は或る夜芳子が一人で留守番をして居る處へゆくりなく時雄が行つて訪問した時、この二度だ。初めの時は時雄は其の手紙の意味を明かに了解した。其の返事をいかに書くべきかに就いて一夜眠らずに懊惱した。穩かに眠れる妻の顏それを幾度か窺つて自己の良心のいかに麻痺せるかを自から責めた。そしてあくる朝贈つた手紙は、嚴乎たる師としての態度であつた。二度目はそれから二月ほど經つた春の夜、ゆくりなく時雄が訪問すると、芳子は白粉をつけて、美しい顏をして、火鉢の前にぽつねんとして居た。

『何うしたの、』と訊くと、

『お留守番ですの。』

『姉は何處へ行つた?』

『四谷へ買物に。』

と言つて、ぢつと時雄の顏を見る。いかにも艶かしい。時雄は此の力ある一瞥に意氣地なく胸を躍らした。二語三語、普通のことを話り合つたが、其の平凡な物語が更に平凡でないことを互に思ひ知つたらしかつた。此の時、今十五分も一緒に話し合つたならば、何うなつたであらうか。女の表情の眼は輝き、言葉は艶めき、態度がいかにも尋常でなかつた。

『今夜は大變綺麗にしてますね?』

男は態と輕く出た。

『え、先程、湯に入りましたのよ。』

『大變に白粉が白いから。』

『あらまア先生!』と言つて笑つて、體を斜に嬌態を呈した。

時雄はすぐ歸つた。まア好いでせうと芳子はたつて留めたが、何うしても歸ると言ふので、名殘惜しげに月の夜を其處まで送つて來た。其の白い顏には確かにある深い神祕が籠められてあつた。

四月に入つてから、芳子は多病で蒼白い顏をして神經過敏に陷つて居た。シユウソカリを餘程多量に服しても眠られぬとて困つて居た。絶えざる欲望と生殖の力とは年頃の女を誘ふのに躊躇しない。芳子は多く藥に親んで居た。

四月末に歸國、九月に上京、そして今回の事件が起つた。

今回の事件とは他でも無い。芳子は戀人を得た。そして上京の途次、戀人と相携へて京都嵯峨に遊んだ。其の遊んだ二日の日數が出發と着京との時日に符合せぬので、東京と備中との間に手紙の往復があつて、詰問した結果は戀愛、神聖なる戀愛、二人は決して罪を犯しては居らぬが、將來は如何にしても此の戀を遂げ度いとの切なる願望。時雄は芳子の師として、此の戀の證人として一面月下氷人の役目を餘儀なくさせられたのであつた。

芳子の戀人は同志社の學生、神戸教會の秀才、田中秀夫、年二十一。

芳子は師の前に其の戀の神聖なるを神懸けて誓つた。故郷の親達は、學生の身で、ひそかに男と嵯峨に遊んだのは、既に其の精神の墮落であると云つたが、決してそんな汚れた行爲はない。互に戀を自覺したのは、寧ろ京都で別れてからで、東京に歸つて來て見ると、男から熱烈なる手紙が來て居た。それで始めて將來の約束をしたやうな次第で、決して罪を犯したやうなことは無いと女は涙を流して言つた。時雄は胸に至大の犧牲を感じながらも、其の二人の所謂神聖なる戀の爲めに力を盡すべく餘儀なくされた。

時雄は悶えざるを得なかつた。わが愛するものを奪はれたといふことは甚だしく其心を暗くした。元より進んで其女弟子を自分の戀人にする考は無い。さういふ明らかな定つた考があれば前に既に二度迄も近寄つて來た機會を攫むに於て敢て躊躇するところは無い筈だ。けれど其の愛する女弟子、淋しい

生活に美しい色彩を添へ、限りなき力を添へて吳れた芳子を、突然人の奪ひ去るに任すに忍びようか。機會を二度迄攫むことは躊躇したが、三度來る機會、四度來る機會を待つて、新なる運命と新なる生活を作りたいとはかれの心の底の底の微かなる願であつた。時雄は悶えた。思ひ亂れた。妬みと惜しみと悔恨との念が一緒になつて旋風のやうに頭腦の中を回轉した。師としての道義の念もこれに交つて、益々炎を熾んにした。わが愛する女の幸福の爲めといふ犧牲の念も加はつた。で、夕暮の膳の上の酒は夥しく量を加へて、泥鴨の如く醉つて寢た。

あくる日は日曜日の雨、裏の森にざん〳〵降つて、時雄の爲めには一倍に佗しい。欅の古樹に降りかゝる雨の脚、それが實に長く、限りない空から限りなく降つてゐるとしか思はれない。時雄は讀書する勇氣もない。筆を執る勇氣もない。もう秋で冷々と脊中の冷たい籐椅子に身を横へつゝ、雨の長い脚を見ながら、今回の事件から其身の半生のことを考へた。かれの經驗にはかういふ經驗が幾度もあつた。一歩の相違で運命の唯中に入ることが出來ずに、いつも圈外に立たせられた淋しい苦悶、その苦しい味を彼れは常に味つた。文學の側でもさうだ、社會の側でもさうだ。戀、戀、戀、今になつてもこんな消極的な運命に漂はされて居るかと思ふと、其の身の意氣地なしと運命のつたないことがひし〳〵と胸に迫つた。ツルゲネーフの所謂 Superfluous man だと思つて、其主人公の儚い一生を胸に繰返した。

寂寥に堪へず、午から酒を飲むと言出した。細君の支度の爲やうが遲いのでぶつ〳〵言つて居たが、

膳に載せられた肴がまづいので、遂に癇癪を起して、自暴に酒を飲んだ。一本、二本と德利の數は重つて、時雄は時の間に泥の如く醉つた。細君に對する不平ももう言はなくなつた。德利に酒が無くなると、只、酒、酒と言ふばかりだ。そしてこれをぐい〳〵と呷る。氣の弱い下女は何うしたことかと呆れて見て居つた。男の兒の五歲になるのを始めは頻りに可愛がつて抱いたり撫でたり接吻したりして居たが、何うしたはずみでか泣出したのに腹を立てゝ、ピシャ〳〵と其尻を亂打したので、三人の子供は怖がつて、遠捲にして、平生に似もやらぬ父親の赤く醉つた顏を不思議相に見て居た。一升近く飲んで其の儘其處に醉倒れて、膳の筋斗がへりを打つのにも頓着しなかつたが、やがて不思議なだら〳〵した節で、十年も前にはやつた幼稚な新體詩を歌ひ出した。

君が門邊をさまよふは
巷の塵を吹き立つる
嵐のみとやおぼすらん。
その嵐よりいやあれに
その塵よりも亂れたる
戀のかばねを曉の

歌を半ばにして、細君の被けた蒲團を着たまゝ、すつくと立上つて、座敷の方へ小山の如く動いて行

つた。何處へ？　何處へいらつしやるんです？　と細君は氣が氣でなく其の後を追つて行つたが、それにも關はず、蒲團を着たまゝ、厠の中に入らうとした。細君は慌てゝ、

『貴郎、貴郎、醉つぱらつてはいやですよ。そこは手水場ですよ。』

突如蒲團を後から引いたので、蒲團は厠の入口で細君の手に殘つた。時雄はふら〳〵と危く小便をして居たが、それがすむと、突如� と厠の中に横に寢てしまつた。細君が汚がつて頻りに搖つたり何かしたが、時雄は動かうとも立たうとも爲ない。さうかと云つて眠つたのではなく、赤土のやうな顏に大きな鋭い目を明いて、戸外に降り頻きる雨をぢつと見て居た。

四

時雄は例刻をてく〳〵と牛込矢來町の自宅に歸つて來た。

渠は三日間、其苦悶と戰つた。渠は性として惑溺することが出來ぬ或る一種の力を持つて居る。この力の爲めに支配されるのを常に口惜しく思つて居るのではあるが、それでもいつか負けて了ふ。征服されて了ふ。此れが爲め渠はいつも運命の圈外に立つて苦しい味を嘗めさせられるが、世間からは正しい人、信頼するに足る人と信じられて居る。三日間の苦しい煩悶、これで兎に角渠は其の前途を見た。二人の間の關係は一段落を告げた。此れからは、師として其責任を盡して、わが愛する女の幸福の爲めを

謀るばかりだ。これはつらい、けれどもつらいのが人生(ライフ)だ！　と思ひながら歸つて來た。

門をあけて入ると、細君が迎へに出た。殘暑の日はまだ暑く、洋服の下襦袢がびつしより汗にぬれて居る。それを糊のついた白地の單衣に着替へて、茶の間の火鉢の前に坐ると、細君はふと思ひ附いたやうに、簞笥の上の一封の手紙を取出し、

『芳子さんから。』

と言つて渡した。

急いで封を切つた。卷紙の厚いのを見ても、其事件に關しての用事に相違ない。時雄は熱心に讀下した。言文一致で、すら〳〵と此上ない達筆。

先生――

實は御相談に上り度いと存じましたが、餘り急でしたものでしたから、獨斷で實行致しました。昨日四時に田中から電報が參りまして、六時に新橋の停車場に着くとのことですもの、私は何んなに驚きましたか知れません。

何事も無いのに出て來るやうな、そんな輕卒な男でないと信じて居ります丈に、一層甚しく氣を揉みました。先生、許して下さい、私は其時刻に迎へに參りましたのです。逢つて聞きますと、私の一伍一什を書いた手紙を見て、非常に心配して、もしこの事があつた爲め萬一鄕里に伴れて歸られるやう

なことがあつては、自分が濟まぬと言ふので、學事をも捨てゝ出京して、先生にすつかりお打明申して、お詫も申上げ、お情に縋つて、萬事圓滿に參るやうにと、さういふ目的で急に出て參つたとのことで御座います。それから、私は先生にお話し申した一伍一什、先生のお情深い言葉、將來までも私等二人の神聖な眞面目な戀の證人とも保護者ともなつて下さるといふことを話しました處、非常に先生のお情に感激しまして感謝の涙に暮れました次第で御座います。

田中は私の餘りに狼狽した手紙に非常に驚いたと見えまして、十分覺悟をして、萬一破壞の曉にはと言つた風なことも決心して參りましたので御座います。萬一の時にはあの時嵯峨に一緒に參つた友人を證人にして、二人の間が決して汚れた關係の無いことを辯明し、別れて後互ひに感じた二人の戀愛を打明けて、先生にお縋り申して鄕里の父母の方へも逐一言つて頂かうと決心して參りました相です。けれど此の間の私の無謀で鄕里の父母の感情を破つて居る矢先、何うしてそんなことを申して遣はされませう。今はしばし沈默して、お互ひに希望を持つて、專心勉學に志し、いつか折を見て――或は五年、十年の後かも知れません――打明けて願ふ方が得策だと存じまして、さういふことに致しました。

先生のお話をも一切話して聞かせました。で、用事が濟んだ上は歸した方が好いのですけれど、非常に疲れて居る樣子を見ましては、流石に直ちに引返すやうにとも申兼ねました。(私の弱いのを御許し下さいまし)。勉學中、實際問題に觸れてはならぬとの先生の御教訓は身にしみて守るつもりで御座い

ますが、一先、旅籠屋に落着かせまして、折角出て來たものですから、一日位見物しておいでなさいと、つい申して了ひました。何うか先生、お許し下さいまし。私共も激しい感情の中に、理性も御座いますから、京都でしたやうな、假りにも常識を外れた、他人から誤解されるやうなことは致しません。誓つて、決して致しません。末ながら奥様にも宜しく申上げて下さいまし。

芳　子

先生御もと

この一通の手紙を讀んで居る中、さま〴〵の感情が時雄の胸を火のやうに燃えて通つた。其の田中といふ二十一の青年が現に此の東京に來て居る。芳子が迎へに行つた。何をしたか解らん。此の間言つたことも丸でうそかも知れぬ。此の夏期の休暇に須磨で落合つた時から出來て居て、京都での行爲もその望を滿す爲め、今度も戀しさに堪へ兼ねて女の後を追つて上京したのかも知れん。手を握つたらう。胸と胸とが相觸れたらう。人が見て居ぬ旅籠屋の二階、何を爲て居るか解らぬ。汚れる汚れぬのも刹那の間だ。かう思ふと時雄は堪らなくなつた。『監督者の責任にも關する！』と腹の中で絶叫した。かうしては置かれぬ、かういふ自由を精神の定まらぬ女に與へて置くことは出來ん。監督せんければならん、保護せんけりやならん。私共は熱情もあるが理性がある！　私共とは何だ！　何故私とは書かぬ、何故複數を用ひた？　時雄の胸は嵐のやうに亂れた。着いたのは昨日の六時、姉の家に行つて聞き糺せば昨夜何時

頃に歸つたか解るが、今日は何うした、今は何うして居る？

細君の心を盡した晩餐の膳には、鮪の新鮮な刺身に、青紫蘇の薬味を添へた冷豆腐、それを味ふ餘裕もないが、一盃は一盃と盞を重ねた。

細君は末の兒を寢かして、火鉢の前に來て坐つたが、芳子の手紙の夫の傍にあるのに眼を附けて、

『芳子さん、何つて言つて來たのです！』

時雄は默つて手紙を投げて遣つた。細君はそれを受取りながら、夫の顔をじろりと見て、暴風の前に來る雲行の甚だ急なのを知つた。

細君は手紙を讀終つて卷きかへしながら、

『出て來たのですね。』

『うむ』

『ずつと東京に居るんでせうか。』

『手紙に書いてあるぢやないか、すぐ歸すッて……』

『歸るでせうか。』

『そんなこと誰が知るものか。』

夫の語氣が烈しいので、細君は口を噤んで了つた。しばし經つてから、

『だから、本當に厭さ、若い娘の身で、小説家になるなんぞつて、望む本人も本人なら、よこす親達も親達ですからね。』

『でもお前は安心したらう、』と言はうとしたが、それは止して、

『まア、そんなことは何うでも好いさ、何うせお前達には解らんのだから……それよりも酌でもしたら何うだ。』

溫順な細君は德利を取上げて、京燒の盃に波々と注ぐ。

時雄は頻りに酒を呼つた。酒でなければこの鬱を遣るに堪へぬといはぬばかりに。三本目に、妻は心配して、

『此頃は何うか爲ましたね。』

『何故？』

『醉つてばかり居るぢやありませんか。』

『醉ふといふことが何うかしたのか。』

『さうでせう、何か氣に懸ることがあるからでせう。芳子さんのことなどは何うでも好いぢやありませんか。』

『馬鹿！』

と時雄は一喝した。

細君はそれにも懲りずに、

『だつて、餘り飲んでは毒ですよ、もう好い加減になさい、また、手水場にでも入つて寢ると、貴郎は大きいから、私と、お鶴(下女)の手ぐらゐでは何うにもなりやしませんからさ。』

『まア、好いからもう一本。』

で、もう一本を半分位飲んだ。もう醉は餘程廻つたらしい。顏の色は赤銅色に染つて眼が少しく据つて來た。急に立上つて、

『おい、帶を出せ！』

『何處へいらつしやる。』

『三番町まで行つて來る。』

『姉の處？』

『うむ。』

『およしなさいよ、危いから。』

『何アに大丈夫だ、人の娘を預つて監督せずに投遣にしては置かれん。男が此の東京に來て一緒に歩いたり何かして居るのを見ぬ振をしては置かれん。田川(姉の家の姓)に預けて置いても不安心だから、

今日、行つて、早かつたら、芳子を家に連れて來る。二階を掃除して置け。』

『家に置くんですか、また……』

『勿論。』

細君は容易に帶と着物とを出さうともせぬので、

『よし、よし、着物を出さんのなら、これで好い。』と、白地の單衣に唐縮緬の汚れたへこ帶、帽子も被らずに、其の儘に急いで戸外へ出た。『今出しますから……本當に困つて了ふ、』といふ細君の聲が後に聞えた。

夏の日はもう暮れ懸つて居た。矢來の酒井の森には烏の聲が喧しく聞える。何の家でも夕飯が濟んで、門口に若い娘の白い顏も見える。ボールを投げて居る少年もある。官吏らしい鰌髭の紳士が庇髪の若い細君を伴れて、神樂坂に散歩に出懸けるのにも幾組か邂逅した。時雄は激昂した心と泥醉した身體とに烈しく漂はされて、あたりに見ゆるものが皆な別の世界のものゝやうに思はれた。兩側の家も動くやう、地も脚の下に陷るやう、天も頭の上に蔽ひ冠さるやうに感じた。元から左程强い酒量でないのに、無闇にぐい〳〵と呷つたので、一時に醉が發したのであらう。ふと露西亞の賤民の酒に醉つて路傍に倒れて寢て居るのを思ひ出した。そしてある友人と露西亞の人間は是れだけだから豪い、惑溺するなら飽迄惑溺せんければ駄目だと言つたことを思ひ出した。馬鹿な！　戀に師弟の別があつて堪るものかと口へ出

して言つた。

中根坂を上つて、士官學校の裏門から、佐内坂の上まで來た頃は、日はもうとつぷりと暮れた。白地の浴衣がぞろ〳〵と通る。煙草屋の前に若い細君が出て居る。氷店の暖簾が涼しさうに夕風に靡く。時雄は此の夏の夜景を朧ろげに眼には見ながら、電信柱に突當つて倒れさうにしたり、淺い溝に落ちて膝頭をついたり、職工體の男に、『醉漢奴！　しつかり歩け！』と罵られたりした。急に自から思ひついたらしく、坂の上から右に折れて、市ヶ谷八幡の境内へと入つた。境内には人の影もなく寂寞として居た。大きい古い欅の樹と松の樹とが蔽ひ冠さつて、左の隅に珊瑚樹の大きいのが繁つて居た。處々の常夜燈はそろそろ光を放ち始めた。時雄はいかにしても苦しいので、突如其の珊瑚樹の蔭に身を躲して、其の根元の地上に身を横へた。興奮した心の狀態、奔放な情と悲哀の快感とは、極端まで其の力を發展して、一方痛切に嫉妬の念に驅られながら、一方冷淡に自己の狀態を客觀した。

初めて戀するやうな熱烈な情は無論なかつた。盲目に其の運命に從ふと謂ふよりは、寧ろ冷かに其の運命を批判した。熱い主觀の情と冷めたい客觀の批判とが絡り合せた糸のやうに固く結び着けられて、一種異樣の心の狀態を呈した。

悲しい、實に痛切に悲しい。此の悲哀は華やかな青春の悲哀でもなく、單に男女の戀の上の悲哀でもなく、人生の最奥に祕んで居るある大きな悲哀だ。行く水の流、咲く花の凋落、此の自然の底に蠕れる

抵抗すべからざる力に觸れては、人間ほど儚い情ないものはない。

汪然として涙は時雄の鬚面を傳つた。

ふとある事が胸に上つた。時雄は立上つて歩き出した。もう全く夜になつた。境内の處々に立てられた硝子燈は光を放つて、其の表面の常夜燈といふ三字がはつきり見える。この常夜燈といふ三字、これを見てかれは胸を衝いた。此の三字をかれは曾て深い懊惱を以て見たことは無いだらうか。今の細君が大きい桃割に結つて、このすぐ下の家に娘で居た時、渠は其の微かな琴の音の髣髴をだに得たいと思つてよく此の八幡の高臺に登つた。かの女を得なければ寧そ南洋の植民地に漂泊しようといふほどの熱烈な心を抱いて、華表、長い石階、社殿、俳句の懸行燈、この常夜燈の三字にはよく見入つて物を思つたものだ。其の下には依然たる家屋、電車の轟こそをり〳〵寂寞を破つて通るが、其の妻の實家の窓には、昔と同じやうに、明かに燈の光が輝いて居た。何たる節操なき心ぞ、僅かに八年の年月を閲したばかりであるのに、かうも變らうとは誰が思はう。其の桃割姿を丸髷姿にして、樂しく暮した其の生活が何うしてかういふ荒涼たる生活に變つて、何うしてかういふ新しい戀を感ずるやうになつたか。時雄は我ながら時の力の恐ろしいのを痛切に胸に覺えた。けれど其の胸にある現在の事實は不思議にも何等の動搖をも受けなかつた。

『矛盾でもなんでも爲方がない、其の矛盾、其の無節操、これが事實たから爲方がない、事實！　事

實！』

と時雄は胸の中に繰返した。

時雄は堪へ難い自然の力の壓迫に壓せられたもの〻やうに、再び傍のロハ臺に長い身を横へた。ふと見ると、赤銅のやうな色をした光芒の無い大きい月が、お濠の松の上に音も無く昇つて居た。其の色、其の狀、其の姿がいかにも佗しい。その佗しさが其身の今の佗しさによく適つて居ると時雄は思つて、また堪へ難い哀愁が其の胸に漲り渡つた。

醉は既に醒めた。夜露は置始めた。

土手三番町の家の前に來た。

覗いて見たが、芳子の室に燈火の光が見えぬ。まだ歸つて來ぬと見える。時雄の胸はまた燃えた。此の夜、此の暗い夜に戀しい男と二人！　何をして居るか解らぬ。かういふ常識を缺いた行爲を敢てして、神聖なる戀とは何事？　汚れたる行爲のないのを辯明するとは何事？

すぐ家に入らうとしたが、まだ當人が歸つて居らぬのに、上つても爲方が無いと思つて、其の前を眞直に通り拔けた。女と摩違ふ度に、芳子ではないかと顔を覗きつ〻歩いた。土手の上、松の木蔭、街道の曲り角、往來の人に怪まるゝまで彼方此方を徘徊した。もう九時、十時に近い。いかに夏の夜であるからと言つて、さう遲くまで出歩いて居る筈が無い。もう歸つたに相違ないと思つて、引返して姉の家

に行つたが、矢張まだ歸つて居ない。

時雄は家に入つた。

奥の六疊に通るや否、

『芳さんは何うしました？』

其の答より何より、姉は時雄の着物に夥しく泥の着いて居るのに驚いて、

『まァ、何うしたんです、時雄さん。』

明かな洋燈の光で見ると、成程、白地の浴衣に、肩、膝、腰の嫌ひなく、夥しい泥！

『何ァに、其處で鳥渡轉んだものだから。』

『だッて、肩まで粘いて居るぢやありませんか。また、醉ッぱらつたんでせう。』

『何ァに……。』

と時雄は强ひて笑つてまぎらした。

さて時を移さず、

『芳さん、何處に行つたんです。』

『今朝、ちよいと中野の方にお友達と散歩に行つて來ると云つて出た切りですがね、もう歸て來るでせう。何か用？』

『え、少し……』と言つて、『昨日は歸りは遲かつたですか。』

『いゝえ、お友達を新橋に迎へに行くんだつて、四時過に出かけて、八時頃に歸つて來ましたよ。』

時雄の顏を見て、

『何うかしたのですの？』

『何ァに、けれどねえ姉さん、』と時雄の聲は改まつた。『實は姉さんにおまかせしておいても、此間の京都のやうなことが又あると困るですから、芳子を私の家において、十分監督しようと思ふんですがね。』

『さう、それは好いですよ。本當に芳子さんはあゝいふしつかり者だから、私見たいな無教育のものでは……』

『いや、さういふわけでも無いですがね。餘り自由にさせ過ぎても、かへつて當人の爲めにならんですから、一つ家に置いて、十分監督して見ようと思ふんです。』

『それが好いですよ。本當に、芳子さんにもね……何處と惡いことのない、發明な、利口な、今の世には珍らしい方ですけれど、一つ惡いことがあつてね、男の友達と平氣で夜歩いたりなんかするんですからね。それさへ止すと好いんだけれどとよく言ふのですの。すると芳子さんはまた小母さんの舊弊が始まつたつて、笑つて居るんだもの。いつかなぞも餘り男と一緒に歩いたり何かするものだから、角の交番でね、不審にしてね、角袖巡査が家の前に立つて居たことがあつたと云ひますよ。それはそんなことは

ないんだから、構ひはしませんけれどもね……』

『それはいつのことです？』

『昨年の暮でしたかね。』

『何うもハイカラ過ぎて困る。』と時雄が言つたが、時計の針の既に十時半の處を指すのを見て、『それにしても何うしたんだらう。若い身空で、かう遲くまで一人で出て歩くと言ふのは？』

『もう歸つて來ますよ。』

『こんなことは幾度もあるんですか。』

『いゝえ、滅多にありはしませんよ。夏の夜だから、まだ宵の口位に思つて歩いて居るんですよ。』

姉は話しながら裁縫の針を止めぬのである。前に鴨脚の大きい裁物板が据ゑられて、彩絹の裁片や糸や鋏やが順序なく四方に亂れて居る。女物の美しい色に、洋燈の光が明かに照り渡つた。九月中旬の夜は更けて、稍々肌寒く、裏の土手下を甲武の貨物汽車がすさまじい地響を立てゝ通る。

下駄の音がする度に、今度こそは！　今度こそは！　と待渡つたが、十一時が打つて間もなく、少きざみな、輕い後齒の音が靜かな夜を遠く響いて來た。

『今度のこそ、芳さんですよ。』

と姉は言つた。

果してその足音が家の入口の前に留つて、がらゞゝと格子が開く。

『芳子さん？』

『えゝ。』

と艶やかな聲がする。

玄關から丈の高い庇髪の美しい姿がすつと入つて來たが、

『あら、まア、先生！』

と聲を立てた。其の聲には驚愕と當惑の調子が十分に籠つて居た。

『大變遲くなつて……』と言つて、座敷と居間との間の閾の處に來て、半ば坐つて、ちらりと電光のやうに時雄の顏色を窺つたが、すぐ紫の袱紗に何か包んだものを出して、默つて姉の方に押遣つた。

『何ですか……お土産？　いつもお氣の毒ね。』

『いゝえ、私も召上るんですもの。』

と芳子は快活に言つた。そして次の間へ行かうとしたのを、無理に洋燈の明るい眩しい居間の一隅に坐らせた。美しい姿、當世流の庇髪、派手なネルにオリイヴ色の夏帶を形よく緊めて、少し斜に坐つた艶やかさ。時雄は其の姿と相對して、一種狀すべからざる滿足を胸に感じ、今迄の煩悶と苦痛とを半ば忘れて了つた。有力な敵があつても、其の戀人をだに占領すれば、それで心の安まるのは戀する者の常態である。

『大變に遲くなつて了つて……』

いかにも遣瀨ないといふやうに微かに辯解した。

『中野へ散歩に行つたッて？』

時雄は突如として問うた。

『えゝ……』芳子は時雄の顔色をまたちらりと見た。

姉は茶を淹れる。土產の包を開くと、姉の好きな好きなシユウクリーム。これはマアお旨しいと姉の聲。で、暫く一座はそれに氣を取られた。

少時してから、芳子が、

『先生、私の歸るのを待つて居て下さつたの？』

『えゝ、えゝ、一時間半位待つたのよ。』

と姉が傍から言つた。

で、其話が出て、都合さへよくば今夜からでも——荷物は後からでも好いから——一緒に伴れて行く積りで來たといふことを話した。芳子は下を向いて、點頭いて聞いて居た。無論、其胸には一種の壓迫を感じたに相違ないけれど、芳子の心にしては、絕對に信賴して——今回の戀のことにも全心を擧げて同して吳れた師の家に行つて住むことは別に甚しい苦痛でも無かつた。寧ろ以前から此の昔風の家に同居

して、居るのを不快に思つて、出來るならば、初めのやうに先生の家にと今情願つて居たのであるから の場合でなければ、かへつて大に喜んだのであらうに……

時雄は一刻も早く其戀人のことを聞糺したかつた。今、その男は何處にゐる？　何時京都に歸るか？ これは時雄に取つては實に重大な問題であつた。けれど何も知らぬ姉の前で、打明けて問ふわけにも行かぬので、此の夜は露ほども其のことを口に出さなかつた。一座は平凡な物語に更けた。

今夜にもと時雄の言出したのを、だつて、もう十二時だ、明日にした方が宜からうとの姉の注意。で、時雄は一人で牛込に歸らうとしたが、何うも不安で爲方がないやうな氣がしたので、夜の更けたのを口實に、姉の家に泊つて、明朝早く一緒に行くことにした。

芳子は八疊に、時雄は六疊に姉と床を並べて寢た。やがて姉の小さい鼾が聞えた。時計は一時をカンと鳴つた。八疊では寢つかれぬと覺しく、をり〳〵高い長大息の氣勢がする。甲武の貨物列車が凄しい地響を立てゝ、此の深夜を獨り通る。時雄も久しく眠られなかつた。

五

翌朝時雄は芳子を自宅に伴つた。二人になるより早く、時雄は昨日の消息を知らうと思つたけれど、芳子が低頭勝に悄然として後について來るのを見ると、何となく可哀相になつて、胸に苛々する思を疊

みながら、默して歩いた。

佐内坂を登り了ると、人通りが少くなつた。時雄はふと振返つて、『それで、何うしたの？』と突如として訊ねた。

『え？』

反問した芳子は顏を曇らせた。

『昨日の話さ、まだ居るのかね。』

『今夜の六時の急行で歸ります。』

『それぢや送つて行かなくつてはいけないぢやないか。』

『いゝえ、もう好いんですの。』

これで話は途絶えて、二人は默つて歩いた。

矢來町の時雄の宅、今迄物置にして置いた二階の三疊と六疊、これを綺麗に掃除して、芳子の住居とした。久しく物置――子供の遊び場にしておいたので、塵埃が山のやうに積つて居たが、箒をかけ雜巾をかけ、雨のしみの附いた破れた障子を貼り更へると、かうも變るものかと思はれるほど明るくなつて、裏の酒井の墓塋の大樹の繁茂が心地よき翠をその一室に漲らした。隣家の葡萄棚、打捨てゝ手を入れようともせぬ庭の雜草の中に美人草の美しく交つて咲いて居るのも今更に目につく。時雄はさる畫家の描

いた朝顏の幅を選んで床に懸け、懸花瓶には後れ咲の薔薇の花を挿した。午頃に荷物が着いて、大きな支那鞄、柳行李、信玄袋、本箱、机、夜具、これを二階に運ぶのに中々骨が折れる。時雄は此の手傳ひに一日社を休むべく餘儀なくされたのである。

机を南の窓の下、本箱を其の左に、上に鏡やら紅皿やら罎やらを順序よく並べた。押入の一方には支那鞄、柳行李、更紗の蒲團夜具一組を他の一方に入れようとした時、女の移香が鼻を撲つたので、時雄は變な氣になつた。

午後一時頃には一室が一先づ整頓した。

『何うです、此處も居心は惡くないでせう。』時雄は得意さうに笑つて『此處に居て、まゞ緩くり勉强するです。本當に實際問題に觸れてつまらなく苦勞したつて爲方ないですからねえ。』

『え……、』と芳子は頭を垂れた。

『後で詳しく聞きませうが、今の中は二人共ぢつとして勉强して居なくては、爲方がないですからね。』

『え……、』と言つて、芳子は顏を擧げて、『それで先生、私達もさう思つて、今はお互に勉强して、將來に希望を持つて、親の許諾をも得たいと存じて居りますの？』

『それが好いです。今、餘り騷ぐと、人にも親にも誤解されて了つて、折角の眞面目な希望も遂けられなくなりますから。』

『ですから、ね、先生、私は一心になつて勉強しようと思ひますの。田中も左樣申して居りました。それから、先生に是非お目にかゝつてお禮を申上げなければ濟まないと申して居りましたけれど……よく申上げて吳れッて……。』

『いや……。』

時雄は芳子の言葉の中に、『私共』と複數を遣ふのと、もう公然許嫁の約束でもしたかのやうに言ふのとを不快に思つた。まだ、十九か二十の妙齡の處女が、かうした言葉を口にするのを怪しんだ。時雄は時代の推移つたのを今更のやうに感じた。當世の女學生氣質のいかに自分等の戀した時代の處女氣質と異つて居るかを思つた。勿論、此の女學生氣質を時雄は主義の上、趣味の上から喜んで見て居たのは事實である。昔のやうな教育を受けては、到底今の明治の男子の妻としては立つて行かれぬ。女子も立たねばならぬ、意志の力を十分に養はねばならぬとはかれの持論である。此の持論をかれは芳子に向つても尠からず鼓吹した。けれどこの新派のハイカラの實行を見ては流石に眉を顰めずには居られなかつた。

男からは國府津の消印で歸途に就いたといふ端書が着いて翌日三番町の姉の家から屆けて來た。居間の二階には芳子が居て、呼べば直ぐ返事をして下りて來る。食事には三度三度膳を並べて團欒して食ふ。夜は明るい洋燈を取捲いて、賑はしく面白く語り合ふ。靴下は編んで吳れる。美しい笑顏は絕えず見せ

る。時雄は芳子を全く占領して、兎に角安心もし滿足もした。細君も芳子に戀人があるのを知つてから、危險の念、不安の念を全く去つた。

芳子は戀人に別れるのが辛かつた。成らうことなら一緒に東京に居て、時々顏をも見、言葉をも交へたかつた。けれど今の際それは出來難いこと、知つて居た。二年、三年、男が同志社を卒業する迄は、たまさかの雁の音信をたよりに、一心不亂に勉强しなければならぬと思つた。で、午後から以前の如く麴町の某英學熟に通ひ、時雄も小石川の社に通つた。

時雄は夜などをり〳〵芳子を自分の書齋に呼んで、文學の話、小說の話、それから戀の話をすることがある。そして芳子の爲めに其の將來の注意を與へた。其の時の態度は公平で、率直で、同情に富んで居て、決して泥醉して厠に寢たり、地上に橫はつたりした人とは思はれない。さればと言つて、時雄はわざとさういふ態度にするのではない、女に對つて居る刹那——其の愛した女の歡心を得るには、いかなる犧牲も甚だ高價に過ぎなかつた。

で、芳子は師を信賴した。時期が來て、父母に此の戀を告ぐる時、舊思想と新思想と衝突するやうなことがあつても、此惠み深い師の承認を得さへすればそれで澤山だとまで思つた。

九月は十月になつた。さびしい風が裏の森を鳴らして、空の色は深く碧く、日の光は透通つた空氣に射渡つて、夕の影が濃くあたりを隈どるやうになつた。取り殘した芋の葉に雨は終日降頻つて、八百屋の

店には松茸が並べられた。垣の蟲の聲は露に衰へて、庭の桐の葉は脆くも落ちた。午前の中の一時間、九時より十時迄を、ツルゲネーフの小說の解釋、芳子は師のかゞやく眼の下に、机に斜に坐つて、『オン、ゼ、イブ』の長い〳〵物語に耳を傾けた。エレネの感情に烈しく意志の强い性格と、其悲しい悲壯なる末路とは如何にかの女を動かしたか。芳子はエレネの戀物語を自分に引くらべて、其身を小說の中に置いた。戀の運命、戀すべき人に戀する機會がなく、思ひも懸けぬ人に其の一生を任した運命、實際芳子の當時の心情その儘であつた。須磨の濱で、ゆくりなく受取つた百合の花の一葉の端書、それがかうした運命にならうとは夢にも思ひ知らなかつたのである。

雨の森、闇の森、月の森に向つて、芳子はさま〳〵に其の事を思つた。京都の夜汽車、嵯峨の月、膳所に遊んだ時には湖水に夕日が美しく射し渡つて、旅館の中庭に、萩が繪のやうに咲亂れて居た。其の二日の遊は實に夢のやうであつたと思つた。續いてまだ其の人を戀せぬ前のこと、須磨の海水浴、故鄕の山中の月、病氣にならぬ以前、殊に其の時の煩悶を考へると、頻がおのづから赧くなつた。

空想から空想、其の空想はいつか長い手紙となつて京都に行つた。京都からも殆ど隔日のやうに厚い厚い封書が屆いた。書いても書いても盡くされぬ二人の情——餘り其の文通の頻繁なのに時雄は芳子の不在を窺つて、監督といふ口實の下に其の良心を抑へて、こつそり机の抽出やら文箱やらをさがした。搜し出した二三通の男の手簡を走り讀みに讀んだ。

戀人のするやうな甘つたるい言葉は到る處に滿ちて居た。けれど時雄はそれ以上にある祕密を搜し出さうと苦心した。接吻の痕、性慾の痕が何處かに顯はれて居りはせぬか。神聖なる戀以上に二人の間は進步して居りはせぬか。けれど手紙にも解らぬのは戀のまことの消息であつた。

一ヶ月は過ぎた。

ところが、ある日、時雄は芳子に宛てた一通の端書を受取つた。英語で書いてある端書であつた。何氣なく讀むと、一月ほどの生活費は準備して行く、あとは東京で衣食の職業が見附るか何うかといふ意味、京都田中としてあつた。時雄は胸を轟かした。平和は一時にして破れた。

晚餐後、芳子は其の事を問はれたのである。

芳子は困つたといふ風で、『先生、本當に困つて了つたんですの。田中が東京に出て來ると云ふのですもの、私は二度、三度まで止めて遣つたんですけれど、何だか、宗教に從事して、虛僞に生活してることが、今度の動機で、すつかり厭になつて了つたとか何とかで、何うしても東京に出て來るッて言ふんですよ。』

『東京に來て、何をするつもりなんだ？』

『文學を遣り度いと——』

『文學？　文學ッて、何だ。小說を書かうと言ふのか。』

『え、左樣でせう……』

『馬鹿な！』

と時雄は一喝した。

『本當に困つて了ふんですの。』

『あなたはそんなこと勸めたんぢやないか。』

『いゝえ、』と烈しく首を振つて、『私はそんなこと……私は今の場合困るから、せめて同志社だけでも卒業して吳れッて、此の間初めに申して來た時に達つて止めて遣つたんですけれど……もうすつかり獨斷でさうして了つたんですッて。今更取かへしがつかぬやうになつて了つたんですッて。』

『何うして？』

『神戸の信者で、神戸の敎會の爲めに、田中に學資を出して吳れて居る神津といふ人があるのですの。其の人に、田中が宗敎は自分には出來ぬから、將來文學で立たうと思ふ。何うか東京に出して吳れと言つて遣つたんですの。すると大層怒つて、それならもう構はぬ、勝手にしろと言はれて、すつかり支度をしてしまつたんですつて、本當に困つて了ひますの。』

『馬鹿な！』

と言つたが、『今一度留めて遣んなさい。小說で立たうなんて思つたッて、とても駄目だ、全く空想

だ、空想の極端だ。それに、田中が此方に出て來て居ては、貴孃の監督上、私が非常に困る。貴孃の世話も出來んやうになるから、嚴しく止めて遣んなさい！』

芳子は愈ゝ困つたといふ風で、『止めてはやりますけれど、手紙が行違ひになるかも知れませんから。』

『行違ひ？　それぢやもう來るのか。』

時雄は眼を睜つた。

『今來た手紙に、もう手紙をよこして吳れても行違ひになるからと言つてよこしたですから。』

『今來た手紙ッて、さつきの端書の又後に來たのか。』

芳子は點頭いた。

『困つたね。だから若い空想家は駄目だと言ふんだ。』

平和は再びかき亂さるゝことゝなつた。

六

一日置いて今夜の六時に新橋に着くといふ電報があつた。電報を持つて、芳子はまごまごして居た。けれど夜ひとり若い女を出して遣るわけに行かぬので、新橋へ迎へに行くことは許さなかつた。

翌日は逢つて達つて諫めて何うしても京都に還らせるやうにすると言つて、芳子は其の戀人の許を訪

うた。其の男は停車場前のつるやといふ旅館に宿つて居るのである。

時雄が社から歸つた時には、まだとても歸るまいと思つた芳子が既に其の笑顔を玄關にあらはして居た。聞くと田中は既にかうして出て來た以上、何うしても京都には歸らぬとのことだ。で、芳子は殆ど喧嘩をする迄に爭つたが、矢張斷として可かぬ。先生を賴りにして出京したのではあるが、さう聞けば、成程御尤である。監督上都合の惡いといふのもよく解りました。けれど今更歸れませぬから、自分で如何やうにしても自活の道を求めて目的地に進むより他はないとまで言つた相だ。時雄は不快を感じた。

時雄は一時は勝手にしろと思つた。放つて置けとも思つた。けれど圈內の一員たるかれに何うして全く風馬牛たることを得やうぞ。芳子は其の後二三日訪問した形跡もなく、學校の時間には正確に歸つて來るが、學校に行くと稱して戀人の許に寄りはせぬかと思ふと、胸は疑惑と嫉妬とに燃えた。

時雄は懊惱した。其の心は日に幾遍となく變つた。ある時は全く犧牲になつて二人の爲めに盡さうと思つた。ある時は此の一伍一什を國に報じて一擧に破壞して了はうかと思つた。けれどこの何れをも敢てすることの出來ぬのが今の心の狀態であつた。

細君が、ふと、時雄に耳語した。

『あなた、二階では、これよ、』と針で着物を縫ふ眞似をして、小聲で、『屹度……上げるんでせう。紺絣の書生羽織！　白い木綿の長い紐も買つてありますよ。』

『本當か？』

『え。』

と細君は笑つた。

時雄は笑ふどころではなかつた。

芳子が今日は先生少し遲くなりますからと顏を赧くして言つた。『彼處に行くのか、』と問ふと、『いゝえ！　一寸、友達の處に用があつて寄つて來ますから。』

其の夕暮、時雄は思切つて、芳子の戀人の下宿を訪問した。

『まことに、先生にはよう申譯がありまえんのやけれど……』長い演說調の雄辯で、形式的の申譯をした後、田中といふ中脊の、少し肥えた、色の白い男が、祈禱をする時のやうな眼色をして、さも同情を求めるやうに言つた。

時雄は熱して居た。『然し、君、解つたら、左樣したら好いぢやありませんか、僕は君等の將來を思つて言ふのです。芳子は僕の弟子です。僕の責任として、芳子に廢學させるには忍びん。君が東京に何うしても居ると言ふなら、芳子を國に歸すか、此の關係を父母に打明けて許可を乞ふか、二つの中一つを選ばんければならん。君は君の愛する女を君の爲めに山の中に埋もらせるほどエゴイスチックな人間ぢやありますまい。君は宗教に從事することが今度の事件の爲めに厭になつたと謂ふが、それは一種の考

へで、君は忍んで、京都に居りさへすれば、萬事圓滿に、二人の間柄も將來希望があるのですから。』

『よう解つて居ります……』

『けれど出來んですか。』

『何うも濟みませんけど……制服も帽子も賣つてしまうたで、今更歸るにも歸れませんといふ次第で……』

『それぢや芳子を國に歸すですか。』

かれは默つて居る。

『國に言つて遣りませうか。』

矢張默つて居た。

『私の東京に參りましたのは、さういふことには寧ろ關係しない積でおます。別段こちらに居りましても、二人の間には何うといふ……』

『それは君は左樣言ふでせう。けれど、それでは私は監督は出來ん。戀はいつ惑溺するかも解らん。』

『私はそないなことは無いつもりですけれどナ。』

『誓ひ得るですか。』

『靜かに、勉強して行かれさへすれァナ、そないなことありませんけどナ。』

『だから困るです。』

かういふ會話――要領を得ない會話を繰返して長く相對した。時雄は將來の希望といふ點、男子の犧牲といふ點、事件の進行といふ點からいろ〳〵さまざまに歸國を勸めた。時雄の眼に映じた田中秀夫は、想像したやうな一箇秀麗な丈夫でもなく、天才肌の人とも見えなかつた。麴町三番町通の安旅人宿、三方壁でしきられた暑い室に始めて相對した時、先づかれの身に迫つたのは、基督敎に養はれた、いやに取澄ました、年に似合はぬ老成な、厭な不愉快な態度であつた。京都訛の言葉、色の白い顏、やさしい處はいくらかはあるが、多い青年の中からかうした男を特に選んだ芳子の氣が知れなかつた。殊に時雄が最も厭に感じたのは、天眞流露といふ率直なところが微塵もなく、自己の罪惡にも弱點にも種々の理由を强ひてつけて、これを辯解しやうとする形式的態度であつた。とは言へ、實を言へば、時雄の激した頭腦には、それがすぐ直覺的に明かに映つたと云ふではなく、座敷の隅に置かれた小さい旅鞄や憐れにもしほたれた白地の浴衣などを見ると、青年空想の昔が思出されて、かうした戀の爲め、煩悶もし、懊惱もして居るかと思つて、憐憫の情も起らぬではなかつた。

此の暑い一室に相對して、趺座(あぐら)をもかゝず、二人は尠くとも一時間以上語つた。話は遂に要領を得なかつた。『先づ今一度考へ直して見給へ』くらゐが最後で、時雄は別れて歸途に就いた。

何だか馬鹿らしいやうな氣がした。愚な行爲をしたやうに感じられて、自から其の身を嘲笑した。心

にもないお世辭をも言ひ、自分の胸の底の秘密を蔽ふ爲めには、二人の戀の溫情なる保護者とならうとまで言つたことを思ひ出した。安飜譯の仕事を周旋して貰ふ爲め、某氏に紹介の勞を執らうと言つたことをも思ひ出した。そして自分ながら自分の意氣地なく好人物なのを罵つた。

時雄は幾度か考へた。寧ろ國に報知して遣らうか、と。けれどそれを報知するに、何ういふ態度を以てしやうかといふのが大問題であつた。二人の戀の關鍵を自から握つて居ると信ずるだけそれだけ時雄は責任を重く感じた。其の身の不當の嫉妬、不正の戀情の爲めに、其の愛する女の熱烈なる戀を犧牲にするには忍びぬと共に、自から言つた『溫情なる保護者』として、道德家の如く身を處するにも堪へなかつた。また一方には此の事が國に知れて芳子が父母の爲めに伴はれて歸國するやうになるのを恐れた。

芳子が時雄の書齋に來て、頭を垂れ、聲を低うして、其の希望を述べたのは其の翌日の夜であつた。如何に說いても男は歸らぬ。さりとて國へ報知すれば、父母の許さぬのは知れたこと、時宜に由れば忽ち迎ひに來ぬとも限らぬ。男も折角あゝして出て來たことでもあり二人の間も世の中の男女の戀のやうに淺く思ひ淺く戀した譯でもないから、決して汚れた行爲などはなく、惑溺するやうなことは誓つて爲ない。文學は難かしい道、小說を書いて一家を成さうとするのは田中のやうなものには出來ぬかも知れねど、同じく將來を進むなら、共に好む道に携はり度い。何うか暫く此の儘にして東京に置いて吳れとの賴みである。時雄は此の餘儀なき賴みを菅なく却けることは出來なかつた。時雄は京都嵯峨に於け

る女の行爲に其の節操を疑つては居るが、一方には又其の辯解をも信じて、此の若い二人の間にはまだそんなことはあるまいと思つて居た。自分の青年の經驗に照らして見ても、神聖なる靈の戀は成立つても肉の戀は決してさう容易に實行されるものではない。で、時雄は惑溺せぬものならば、暫く此の儘にして置いて好いと言つて、そして縷々として靈の戀愛、肉の戀愛、戀愛と人生との關係、敎育ある新しい女の當に守るべきことなどに就いて、切實に且つ眞摯に敎訓した。古人が女子の節操を誡めた社會道德の制裁よりは、寧ろ女子の獨立を保護する爲であるといふこと、一度肉を男子に許せば女子の自由が全く破れるといふこと、西洋の女子はよく此間の消息を解して居るから、男女交際をして不都合がないといふこと、日本の新しい婦人も是非共さうならなければならぬといふことなど主なる敎訓の題目であつたが、殊に新派の女子といふことに就いて痛切に語つた。

芳子は低頭いてきいてゐた。

時雄は興に乘じて、

『そして一體、何うして生活しやうといふのです？』

『少しは準備もして來たんでせう、一月位は好いでせうけれど……』

『何か旨い口でもあると好いけれど。』

と時雄は言つた。

『實は先生に御縋り申して、誰も知つてるものがないのに出て參りましたのですから、大層失望しましたのですけれど。』

『だッて餘り突飛だ。一昨日逢つてもさう思つたが、何うもあれでも困るね。』

と時雄は笑つた。

『何うか又御心配下さるやうに……此の上御心配かけては申譯がありませんけれど、』と芳子は縋るやうにして顏を赧めた。

『心配せん方が好い、何うかなるよ。』

芳子が出て行つた後、時雄は急に險しい難かしい顏に成つた。『自分に……自分に、此の戀の世話が出來るだらうか、』と獨りで胸に反問した。『若い鳥は若い鳥でなくては駄目だ。自分等はもうこの若い鳥を引く美しい羽を持つて居ない。』かう思ふと、言ふに言はれぬ寂しさがひしと胸を襲つた。『妻と子――家庭の快樂だと人は言ふが、それに何の意味がある。子供の爲めに生存して居る妻は生存の意味があらうが、妻を子に奪はれ、子を妻に奪はれた夫は何うして寂寞たらざるを得るか。』時雄はぢつと洋燈を見た。

机の上にはモウパッサンの『死よりも强し』が開かれてあつた。

二三日經つて後、時雄は例刻に社から歸つて火鉢の前に坐ると、細君が小聲で、

『今日來てよ。』

『誰が。』

『二階の……そら芳子さんの好い人。』

細君は笑つた。

『さうか……』

『今日一時頃、御免なさいと玄關に來た人があるですから、私が出て見ると、顏の丸い、絣の羽織を着た、白縞の袴を穿いた書生さんが居るぢやありませんか。また、原稿でも持つて來た書生さんかと思つたら、横山さんは此方においでですかと言ふぢやありませんか。はて、不思議だと思つたけれど、名を聞きますと、田中……。はァ、それで其の人だナと思つたんですよ。厭な人ねえ、あんな人を、あんな書生さんを戀人にしないたッて、いくらも好いのがあるでせうに。芳子さんは餘程物好ね。あれぢやとても望みはありませんよ。』

『それで何うした？』

『芳子さんは嬉しいんでせうけど、何だか極りが惡さうでしたよ。私がお茶を持つて行つて上げると、芳子さんは机の前に坐つて居て、其の前に其の人が居て、今迄何か話して居たのを急に止して默つて了つた。私は變だからすぐ下りて來たですがね……何だか變ね……今の若い人はよくあゝいふことが出來

てね、私の其の頃には男に見られるのすら恥かしくつて恥かしくつて爲方がなかつたものですのに……』

『時代が違ふからナ。』

『いくら時代が違つても、餘り新派過ぎると思ひましたよ。墮落書生と同じですからね。それやうはべが似て居るだけで、心はそんなことはないでせうけれど、何だか變ですよ。』

『そんなことは何うでも好い。それで何うした？』

『お鶴(下女)が行つて上げると言ふのに、好いと言つて、御自分で出かけて、餅菓子と燒芋を買つて來て、御馳走してよ……お鶴も笑つて居ましたよ。お湯をさしに上ると、二人でお旨しさうにおさつを食べて居るところでしたつて……。』

時雄も笑はざるを得なかつた。

細君は猶語り續いだ。『そして隨分長く高い聲で話して居ましたよ。議論見たいなことも言つて、芳子さんもなかなか負けない樣子でした。』

『そしていつ歸つた？』

『もう少し前。』

『芳子は居るか。』

『いゝえ、路が分らないから、一緒に其處まで送つて行つて來るッて出懸けて行つたんですよ。』

時雄は顏を曇せた。

夕飯を食つて居ると、裏口から芳子が歸つて來た。急いで走つて來たと覺しく、せいせい息を切つて居る。

『何處まで行らしつた？』

と細君が問ふと、

『神樂坂まで、』と答へたが、いつもする『おかへりなさいまし』を時雄に向つて言つて、そのまゝばたばたと二階に上つた。すぐ下りて來るかと思ふに、なか〳〵下りて來ない。『芳子さん、芳子さん』と三度ほど細君が呼ぶと、『はァーい』といふ長い返事が聞えて、矢張下りて來ない。お鶴が迎へに行つて漸く二階を下りて來たが、準備した夕飯の膳を他所に、柱に近く、斜に坐つた。

『御飯は？』

『もう食べたくないの、腹が一杯で。』

『餘りおさつを召上つたせるでせう。』

『あら、まア、酷い奧さん。いゝわ、奧さん。』

と睨む眞似をする。

細君は笑つて、

『芳子さん、何だか變ね。』

『何故？』と長く引張る。

『何故もないわ。』

『いゝことよ、奥さん。』

と又睨んだ。

時雄は默つて此の嬌態に對して居た。胸の騷ぐのは無論である。不快の情はひしと押寄せて來た。芳子はちらと時雄の顔を覗つたが、其の不機嫌なのが一目で解つた。で、すぐ態度を改めて、

『先生、今日田中が參りましてね。』

『さうだつてね。』

『お目にかゝつてお禮を申上げなければならんのですけれども、又改めて上がりますからッて……よろしく申上げて……』

『さうか。』

と言つたが、其のまゝふいと立つて書齋に入つて了つた。

其の戀人が東京に居ては、假令自分が芳子を二階に置いて監督しても、時雄は心を安んずる暇はなかつ

た。二人の相逢ふことを妨げることは絶對に不可能である。手紙は無論差留ることは出來ぬし、『今日ちよつと田中に寄つて參りますから、一時間遲くなります、』と公然と斷つて行くのを何うかう言ふ譯には行かなかつた。また其男が訪問して來るのを非常に不快に思ふけれど、今更それを謝絶することも出來なかつた。時雄はいつの間にか、この二人から其の戀に對しての『溫情の保護者』として認められて了つた。

時雄は常に苛々して居た。書かなければならぬ原稿が幾種もある。書肆からも催促される。金も欲しい。けれど何うしても筆を執つて文を綴るやうな沈着いた心の狀態にはなれなかつた。强ひて試みて見ることがあつても、考が纏らない。本を讀んでも二頁も續けて讀む氣になれない。二人の戀の溫かさを見る度に、胸を燃して、罪もない細君に當り散らして酒を飲んだ。晩餐の菜が氣に入らぬと云つて、膳を蹴飛した。夜は十二時過ぎに醉つて歸つて來ることもあつた。芳子はこの亂暴な不調子な時雄の行爲に尠なからず心を痛めて、『私がいろ〳〵御心配を懸けるもんですからね、私が惡るいんですよ、』と詫びるやうに細君に言つた。芳子は成るたけ手紙の往復を人に見せぬやうにし、訪問も三度に一度は學校を休んでこつそり行くやうにした。時雄はそれに氣が附いて一層懊惱の度を增した。

野は秋も暮れて木枯の風が立つた。裏の森の銀杏樹も黃葉して夕の空を美しく彩つた。垣根道には反(そり)かへつた落葉がが さ〳〵と轉(ころ)がつて行く。鵑の鳴音がけたゝましく聞える。若い二人の戀が愈々人目に餘

るやうになつたのは此頃であつた。時雄は監督上見るに見かねて、芳子を説勸めて、此一伍一什を故鄕の父母に報ぜしめた。そして時雄も此の戀に關しての長い手紙を芳子の父に寄せた。此の場合にも時雄は芳子の感謝の情を十分贏ち得るやうに勉めた。時雄は心を欺いて――悲壯なる犧牲と稱して、此の戀の『溫情なる保護者』となつた。

備中の山中から數通の手簡が來た。

七

其翌年の一月には、時雄は地理の用事で、上武の境なる利根河畔に出張して居た。彼は昨年の年末から此の地に來て居るので、家のこと――芳子のことが殊に心配になる。さりとて公務を如何ともすることが出來なかつた。正月になつて二日にちよいと歸京したが、其の時は次男が齒を病んで、妻と芳子とが頻りにそれを介抱して居た。妻に聞くと、芳子の戀は更に惑溺の度を加へた樣子。大晦日の晩に、田中が生活のたつきを得ず、下宿に歸ることも出來ずに、終夜運轉の電車に一夜を過したといふこと、餘り頻繁に二人が往來するので、それをそれとなしに注意して芳子と口爭ひをしたといふこと、其の他種種のことを聞いた。困つたことだと思つた。一晩泊つて再び利根の河畔に戻つた。

今は五日の夜であつた。茫とした空に月が暈を帶びて、其の光が川の中央にきら〳〵と金を碎いて居

た。時雄は机の上に一通の封書を展いて、深く其の事を考へて居た。其の手紙は今少し前、旅館の下女が置いて行つた芳子の筆である。

先生。

まことに、申譯が御座いません。先生の同情ある御恩は決して一生經つても忘るゝことでなく、今も其のお心を思ふと、涙が滴るゝのです。

父母はあの通りです。先生があのやうに仰しやつて下すつても、舊風の頑固で、私共の心を汲んで呉れやうとも致しませず、泣いて訴へましたけれど、許して呉れません。母の手紙を見れば泣かずには居られませんけれど、少しは私の心も汲んで呉れても好いと思ひます。戀とはかう苦しいものかと今つくづく思ひ當りました。先生、私は決心致しました。聖書にも女は親に離れて夫に從ふと御座いますと通り、私は田中に從はうと存じます。

田中は未だ生活のたつきを得ませず、準備した金は既に盡き、昨年の暮れは、うらぶれの悲しい生活を送つたので御座います。私はもう見て居るに忍びません。國からの補助を受けませんでも、私等は私等二人で出來るまで此の世に生きて見ようと思ひます。先生に御心配を懸けるのは、まことに濟みません。監督上、御心配なさるのも御尤もです。けれど折角先生があのやうに私等の爲めに國の父母をお説き下すつたにも係らず、父母は唯無意味に怒つてばかり居て、取合つて呉れませんのは、餘り

と申せば無慈悲です、勘當されても爲方が御座いません。墮落、墮落と申して、殆ど齒ひせぬばかりに申して居りますが、私達の戀はそんなに不眞面目なもので御座いませうか。それに、家の門地門地と申しますが、私は戀を父母の都合によつて致すやうな舊式の女でないことは先生もお許し下さるでせう。

先生。

私は決心致しました。昨日、上野圖書館で女の見習生が入用だといふ廣告がありましたから、應じて見ようと思ひます。二人して一生懸命に働きましたら、まさかに餓ゑるやうなことも御座いますまい。先生のお家にかうして居ますればこそ、先生にも奥樣にも御心配を懸けて濟まぬので御座います。何うか先生、私の決心をお許し下さい。

芳子

先生おんもとへ

戀の力は遂に二人を深い惑溺の淵に沈めたのである。時雄はもうかうしては置かれぬと思つた。時雄が芳子の歡心を得る爲めに取つた『溫情の保護者』としての態度を考へた。備中の父親に寄せた手紙、其の手紙には、極力二人の戀を庇保して、何うしても此の戀を許して貰はねばならぬといふ主旨であつた。時雄は父母の到底これを承知せぬことを知つて居た。寧ろ父母の極力反對することを希望して居た。父母は果して極力反對して來た。言ふことを聞かぬなら勘當するとまで言つて來た。二人はまさに受く

べき戀の報酬を受けた。時雄は芳子の爲めに飽まで辯明し、汚れた目的の爲めに行はれたる戀でないことを言ひ父母の中一人、是非出京して此の問題を解決して貰ひたいと言ひ送つた。けれど故鄕の父母は、監督者なる時雄がさういふ主張であるのと、到底其の口から許可することが出來ぬのとで、上京しても無駄であると云つて出て來なかつた。

時雄は今、芳子の手紙に對して考へた。

二人の狀態は最早一刻も猶豫すべからざるものとなつて居る。時雄の監督を離れて二人一緒に暮し度いといふ大膽な言葉、其の言葉の中には警戒すべき分子の多いのを思つた。いや、既に一歩を進めて居るかも知れぬと思つた。又一面にはこれほど其の爲めに盡力して居るのに、其の好意を無にして、かういふ決心をするとは義理知らず、情知らず、勝手にするが好いとまで激した。

時雄は胸の轟きを靜める爲め、月朧なる利根川の堤の上を散歩した。月が暈を帶びた夜は冬ながらやや暖かく、土手下の家々の窓には平和な燈火が靜かに輝いて居た。川の上には薄い靄が懸つて、をり〳〵通る船の艫の音がギィと聞える。下流でおーいと渡しを呼ぶものがある。舟橋を渡る車の音がどゞろに響いてそして又一時靜かになる。時雄は土手を歩きながら種々のことを考へた。芳子のことよりは一層痛切に自己の家庭のさびしさといふことが胸を往來した。三十五六歳の男女の最も味ふべき生活の苦痛、事業に對する煩惱、性慾より起る不滿足等が凄じい力で其の胸を壓迫した。芳子はかれの爲めに平凡な

る生活の花でもあり又糧でもあつた。芳子の美しい力に由つて、荒野の如き胸に花咲き、錆び果てた鐘は再び鳴らうとした。芳子の爲めに、復活の活氣は新しく皷吹された。であるのに再び寂寞荒凉たる以前の平凡なる生活にかへらなければならぬとは……不平よりも、嫉妬よりも、熱い熱い涙がかれの頰を傳つた。

かれは眞面目に芳子の戀と其の一生とを考へた。二人同棲して後の倦怠、疲勞、冷酷を自己の經驗に照らして見た。そして一たび男子に身を任せて後の女子の境遇の憐むべきを思ひ遣つた。自然の最奥に祕める暗黑なる力に對する厭世の情は今彼の胸を簇々(むらむら)として襲つた。

眞面目なる解決を施さなければならぬといふ氣になつた。今迄の自分の行爲の甚だ不自然で不眞面目であるのに思ひついた。時雄は其の夜、備中の山中にある芳子の父母に寄する手紙を熱心に書いた。芳子の手紙を其の中に卷込んで、二人の近況を詳しく記し、最後に、

父たる貴下と師たる小生と當事者たる二人と相對して、此の問題を眞面目に議すべき時節到來せりと存候、貴下は父としての主張あるべく、芳子は芳子としての自由あるべく、小生また師としての意見有之候、御多忙の際には有之候へども、是非々々御出京下され度、幾重にも希望仕候。

と書いて筆を結んだ。封筒に收めて備中國新見町横山兵藏樣と書いて、傍に置いて、ぢつとそれを見入つた。此の一通が運命の手だと思つた。思ひ切つて婢を呼んで渡した。

一日二日、時雄は其の手紙の備中の山中に運ばれて行くさまを想像した。四面山で圍まれた小さな田舍町、其の中央にある大きな白壁造、そこに郵便脚夫が配達すると、店に居た男がそれを奥へ持つて行く。丈の高い、髯のある主人がそれを讀む——運命の力は一刻毎に迫つて來た。

八

十日に時雄は東京に歸つた。

其の翌日、備中から返事があつて、二三日の中に父親が出發すると報じて來た。

芳子も田中も今の際、寧ろそれを希望して居るらしく、別にこれと云つて驚いた樣子もなかつた。

父親が東京に着いて、先づ京橋に宿を取つて、牛込の時雄の宅を訪問したのは十六日の午前十一時頃であつた。丁度日曜で、時雄は宅に居た。父親はフロックコートを着て、中高帽を冠つて、長途の旅行に疲れたといふ風であつた。

芳子は其日醫師へ行つて居た。三日ほど前から風邪を引いて、熱が少しあつた。頭痛がすると言つて居た。間もなく歸つて來たが、裏口から何の氣なしに入ると、細君が、『芳子さん、芳子さん、大變よ、お父(とう)さんが來てよ。』

『お父さん。』

と芳子も流石にはつとした。

其の儘二階に上つたが下りて來ない。

奥で、『芳子は？』と呼ぶので、細君が下から呼んで見たが返事がない。登つて行つて見ると、芳子は机の上に打伏して居る。

『芳子さん。』

返事が無い。

傍に行つて又呼ぶと、芳子は青い神經性の顔を擡げた。

『奥で呼んで居ますよ。』

『でもね、奥さん、私は何うして父に逢はれるでせう。』

泣いて居るのだ。

『だッて、父樣に久し振ぢやありませんか。何うせ逢はないわけには行かんのですもの。何ァにそんな心配をすることはありませんよ、大丈夫ですよ。』

『だッて、奥さん。』

『本當に大丈夫ですから、しつかりなさいよ、よくあなたの心を父樣にお話しなさいよ。本當に大丈夫ですよ。』

芳子は遂に父親の前に出た。鬚多く、威嚴のある中に何處となく優しい處のある懷かしい顔を見ると、芳子は涙の漲るのを禁め得なかつた。舊式な頑固な爺、若いもの丶心などの解らぬ爺、それでも此の父は優しい父であつた。母親は萬事に氣が附いて、よく面倒を見て呉れたけれど、何故か芳子には母よりも此の父の方が好かつた。其の身の今の窮迫を訴へ、泣いて此の戀の眞面目なのを訴へたなら父親もよもや動かされぬことはあるまいと思つた。

『芳子、暫くぢやッたのう……體は丈夫かの？』

『お父さま……』芳子は後を言ひ得なかつた。

『今度來ます時に……』と父親は傍に坐つて居る時雄に語つた。『佐野と御殿場でしたかナ、汽車に故障がありましてナ、二時間ほど待ちました。機關が破裂しましてナ。』

『それは……』

『全速力で進行して居る中に、凄じい音がしたと思ひましたけえ、汽車が夥しく傾斜してだらぐ〳〵と逆行しましてナ、何事かと思ひました。機關が破裂して火夫が二人とか卽死した……』

『それは危險でしたナ。』

『沼津から汽關車を持つて來てつけるまで二時間も待ちましたけえ、其の間もナ、思ひまして……これの爲めにかうして東京に來て居る途中、もしもの事でもあつたら、芳（と今度は娘の方を見て）お前